平成 20 年度考古学講座

貝塚とは何か

—縄文から近代まで　神奈川の貝塚にみる貝塚観の変移—

主催　神奈川県考古学会

平成２１(2009)年３月８日

神 奈 川 県 考 古 学 会

開　催　次　第

日時　平成２１年３月８日（日）　午前９時４０分から午後４時１５分
場所　横浜市歴史博物館　講堂

開会挨拶	神奈川県考古学会 会長	岡本　孝之	9：40～ 9：45
趣旨説明		中村　若枝	9：45～ 9：50
記念講演１	神奈川の貝塚時代の自然環境	松島　義章	9：50～10：40
各論（１）食糧採集経済期の貝塚			
	縄文時代早期 海進初期から海水面上昇期の貝塚 ―夏島貝塚・吉井貝塚など―	野内　秀明	10：50～11：20
	縄文時代前期　環状集落の成立と貝塚	松田光太郎	11：20～11：50
	縄文時代中～晩期 環状集落と貝塚	中村　若枝	11：50～12：20
記念講演２	三浦半島の縄文貝塚に魅せられて -赤星直忠先生と夏島貝塚、縄文銛頭とヤスそしてイルカの碑-	金子　浩昌	13：20～14：10
各論（２）食糧生産経済期の貝塚			
	弥生～奈良・平安時代の貝塚	剱持　輝久	14：10～14：40
	魚撈産業の成立　―中世都市鎌倉にみる貝類の獲得と廃棄―	宗臺　秀明	14：40～15：10
	近世・近代　―消費社会と貝塚―	桜井　準也	15：20～15：40
	講評	岡本　孝之	15：40～16：10
閉会挨拶	神奈川県考古学会 副会長	中村　若枝	16：10～16：15

紙上発表　神奈川県 貝塚発見順一覧表　岡本　孝之

目　　次

趣旨説明　貝塚とは何か —縄文から近代まで　神奈川の貝塚にみる貝塚感の変移—　中村　若枝　‥‥　1

神奈川における縄文時代の自然環境　—貝層群集からみた縄文海進—　松島　義章　‥‥　11

三浦半島の縄文貝塚に魅せられて
—赤星直忠先生と夏島貝塚、縄文銛頭とヤスそしてイルカの碑—　金子　浩昌　‥‥　13

縄文時代早期 海進初期から海水面上昇期の貝塚 —夏島貝塚・吉井貝塚など—　野内　秀明　‥‥　25

縄文時代前期　環状集落の成立と貝塚　松田光太郎　‥‥　37

縄文時代中〜晩期 環状集落と貝塚　中村　若枝　‥‥　49

弥生〜奈良・平安時代の貝塚　剱持　輝久　‥‥　61

魚撈産業の成立 —中世都市鎌倉にみる貝類の獲得と廃棄—　宗臺　秀明　‥‥　73

近世・近代　消費社会と貝塚　桜井　準也　‥‥　83

神奈川の貝塚調査研究史　岡本　孝之　‥‥　95

表紙　平塚市 万田貝殻坂貝塚の貝層

趣旨説明

「貝 塚 と は 何 か」

縄文から近代まで　神奈川の貝塚にみる貝塚観の変移

中村若枝

はじめに

貝塚という言葉を聞くと、縄文時代をイメージする方も多いかもしれません。実際に貝塚の多くは、縄文時代の所産です。神奈川には、縄文時代を語るのに欠かせない貝塚がたくさんあります。一方、数こそ激減しますが、縄文時代以降も貝塚は作られ続けられており、つい先ごろまで鶴見川の河口付近でも、貝加工工場の脇に貝塚が形成されていました。

1877 年（明治 10 年）9 月、「まぎれもない大昔の塵棄場すなわち貝殻堆積（シェルヒープ）を発見し調査した」と大森貝塚発掘の第一報をネイチャーに送ったのは、エドワード・S・モースでした。モースは、ニューイングランド沿岸で調査をした経験から、一見して貝塚だと分かったと書いています。「貝塚とは、古代人が残したもので、人工的に堆積した人工遺物を含むもの」と定義し、日本列島にも石器時代が存在したことを明らかにしました。ここに考古学は巨人伝説から脱し、科学的研究の第一歩を踏み出しました。

モースの影響を受けた動物学者丘浅次郎　は、1887 年（明治 20）1 月 4･5 日に横須賀市の久比里村貝塚(江戸坂貝塚)を発掘しています。また 1905 年（明治 38）に、横浜の山下町に居留していたイギリス人医師ニール・G・マンローは、三ツ沢貝塚（横浜市神奈川区）を発見し、日本で初めて大規模な発掘調査を行いました。さらに 1941 年 (昭和 16) 桑山龍進により紹介された夏島貝塚は、その後の明治大学の調査で、カキの殻の放射性炭素年代測定では BP9450±400、木炭では BP9240±500 という縄文時代の開始時期を 5000 年近く遡るデータを得、最大最古の貝塚として話題となるなど、神奈川でも多くの研究者が研究成果を積み上げてきました。

では、貝塚とは、それを遺した人々にとって何だったのでしょうか。この命題は繰り返し問われてきました。

今回の講座では、「貝塚」という現象を、歴史の流れの中で考えてみたいと思います。縄文時代という自然と共生した人々が残した貝塚と、それ以後の貝塚とでは、形状、そして貝塚に関する意識に、変化はみられるのでしょうか？あるいは、社会構造は変わっても貝塚を築くという基底に流れる意識は、変わらないのでしょうか。そこで大きく「食糧採集経済期」と「食糧生産経済期」「食糧流通経済期」の貝塚に分け、歴史の流れをたどる中で、このテーマを検証してみたいと思います。

大森貝塚発掘貝調査から、130 年余年たち、この間に調査された貝塚数は、膨大なものになりました。2008 年 3 月、神奈川県立歴史博物館が編纂した縄文～古代を対象とした『神奈川県貝塚地名表』によれば、確認された貝塚数は 292 ヵ所にのぼります。折しも、1959 年今日の貝塚研究の基盤を築いた酒詰仲男が『日本貝塚地名表』をまとめ上げてから、今年でちょうど 50 年になります。

縄文から近代まで、貝塚とは何かを問い、各時代における貝塚観を明らかにする中で、この問いに一つの答えを書き足すことができればと思います。

また、今回の講座では特別講演として、戦後の日本の貝塚研究を牽引されてきた金子浩昌先生と、自然科学の側面から研究されてきた松島義章先生に、神奈川の貝塚についてお話していただきます。

（2009.2 神奈川県考古学会連絡誌「考古かながわ」41 号掲載）

1．貝塚研究の基点

2008 年『神奈川の貝塚地名表』によれば、縄文時代から古代まで、あわせて 292 遺跡で貝塚が確認された。このデータの基となる資料は、「神奈川の貝塚に学ぶ会」（代表川口徳治朗）が、踏査を重ねる中で積み上げてきたものである。

1960 年代から始まった大規模開発の波の中で、歩調を合わせ次々と行われてきた発掘調査、その成果をしっかり受け止める間もなく眼前の処理に奔走してきたが、そこには正式な調査も経ないまま消えてしまった遺跡も数知れずあったことだろう。

1959 年土曜会から発刊された酒詰仲男『日本貝塚地名表は、私たちが立ち戻るべき原点を提示していた。酒詰仲男は、土器編年を主流としていた学会の中で、「原始的な確かな本能こそ、生活復元にとりより信頼できる手がかりであるという」基点に立っていた。酒詰のいう原始的な本能とは『食糧を得たいという欲求』である。「ヒトがそれ（食料）を獲得する形は大体に於いて、その人の社会形態を決定する」（1961　『日本縄文時代食糧総説』）と説いた。酒詰の研究は「貝塚を営んだ人の生活や、その人間が取り結ぶ社会関係を直接反映する集落」を視界に収めていたであろうと、和島誠一は書いている（酒詰仲男 1967「貝塚に学ぶ」あとがきより）。酒詰は、貝塚を「自然条件と歴史条件の座標上」にあると考え、その法則をさぐることを目的とし、神奈川県下の貝塚をくまなく調査をする事から始めた。やがてこの作業は全国に及び『日本貝塚地名表』として収束した。

1999 年 5 月、それまでは有志で続けていた貝塚をテーマとした集いを母体として「神奈川の貝塚に学ぶ会」を結成し、本格的な活動を開始した。私たちが目指したものは、「第 2 の地名表の刊行」である、そのために、現地を踏査し確認する作業と徹底した記録の収集に努めた。

2009 年、今年は『日本貝塚地名表』が発刊されてから、ちょうど 50 年目にあたる。「貝塚による原始社会の実証的な歴史叙述」をめざし、「日本歴史の勉強を徹底してやって、将来の社会に幾分でも役立ちたい」と志向した姿勢を、私たちも持ち続けたいと思う。

2．酒詰地名表から 50 年　成果と課題

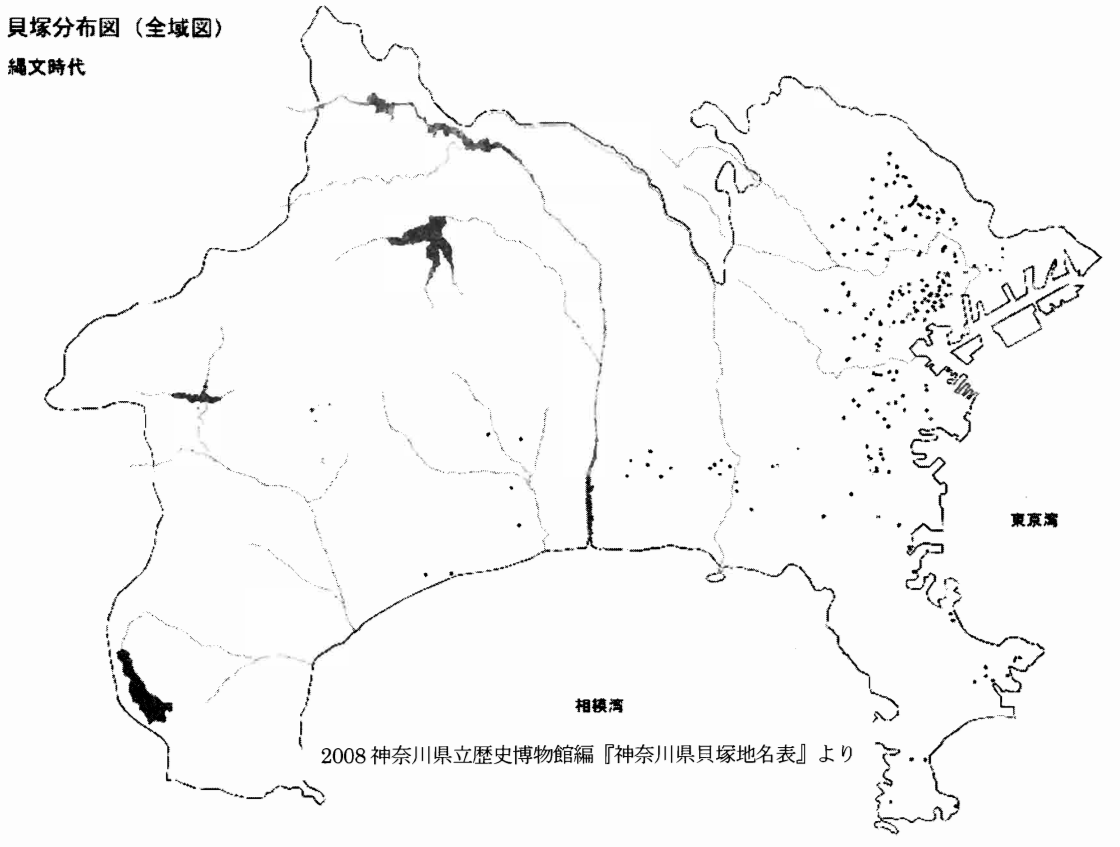
1959「日本貝塚地名表」で取り上げた神奈川県の貝塚は 196 遺跡あった。2008「神奈川県貝塚地名表」段階では 292 遺跡を数える。新たに発見された貝塚もあれば、確認できなかった貝塚、同一遺跡になる可能性がある貝塚などさまざまな問題が挙がった。個々の遺跡の内容については、次のステップで詳述する予定で、今準備にとりかかっている。

ここでは、縄文時代以降の貝塚については別項にゆずり、食糧採集経済期とした縄文時代の貝塚

について概観してみたい。時期が判明している貝塚の内訳をみると、早期 18 遺跡、前期 73 遺跡、中期 41 遺跡、後期 88 遺跡、晩期 4 遺跡の計 224 遺跡を数える。この中には、複数の時期にまたがる遺跡も含まれ、該当する各時期別にカウントしているので、この総和がそのまま貝塚数ではないが、同時に存在した貝塚の数ではある。前期と後期に貝塚数が増加していることがわかる。前期は黒浜~諸磯式期に、後期は堀之内式期に集中しており、ともに縄文海進拡大期から高位安定期にあたる。

各時期の分布図に合わせて、今回はもう少し時間をスライスして検証してみるために、土器形式時間軸に編年表を作成してみた。早期貝塚は東京湾西岸域のみに分布し、最古の貝層は三浦半島の夏島貝塚・平坂貝塚で確認されている。これは、千葉県西ノ城などと並んで、日本でも最も古い段階に形成された貝層である。その後、鶴見川流域でも貝層の形成がはじまる。前期は縄文海進がピークを迎えると、貝塚は鶴見川流域に集中し湾の奥深くまで分布する。相模湾でも貝塚形成が始まる。海退期にあたる中期では、加曽利Ｅ式期の貝塚が最も多く、前期と似た分布域を形成するが、海退とともに、やや東京湾よりに集中箇所の移動がみられる。後期は堀之内式期に分布のピークを迎え、湾岸沿いの台地上に分布している。晩期になると、鶴見川流域・相模湾岸では貝塚は姿を消し、帷子川・大岡川の中流域と低地の砂丘上に形成されていたが、やがて縄文時代の貝塚は終焉を迎える。

貝塚は、食糧の残滓物だけでなく、生活用具等も含むため、個々の貝層は、土器形式で分けるよりさらに細分したタイムスケールとなり、その情報量は多い。まさに「貝塚は生活の総体」といえる。分析を通して「人々の行為を復元」し、当時の人々の思い（＝貝塚観）に触れることで貝塚に学び、未来を見つめていきたいと考えている。



2008 神奈川県立歴史博物館編『神奈川県貝塚地名表』より

≪早期≫

2008『神奈川県貝塚地名表』より作成

神奈川における貝塚編年表　1　早期

編年	川崎	横浜	三浦・湘南
夏島式			夏島 第1貝層 平坂 西貝塚 混土貝層 東貝塚
平坂式			平坂 西貝塚 純貝層
田戸上層式		面滝	夏島 第2貝層
子母口式	子母 A～E	権田原 D39号炉穴 大口坂	夏島 第3貝層
野島式		野島 南貝塚	夏島 第3貝層
鵜ヶ島台式			夏島 第3貝層 E地点
茅山式		宮の原 北貝塚 第3貝層 菩神台（西） 二本木	吉井 第1・2貝塚 下部貝層
茅山下層式		野島 南貝塚 東貝塚	夏島 第3貝層 茅山 下部貝層
茅山上層式	子母 C地点（粕畑）		茅山 上部貝層 吉井 第1・2貝塚 下部貝層
下吉井式		神之木 A・B貝塚	鴨居小学校内（一本松式）二次堆積 高坂 B貝塚 下部貝層 下吉井
≪早期≫ 時期不明		宮の原 東貝塚 大豆戸 中道	岩井口

≪前期≫

神奈川の貝塚編年 2 前期①

編 年	川 崎	横 浜
花積下層式	新作八幡台 C地点 D地点 野川東耕地	下組 西・東・南地点 下田東？ 第3貝塚
關山式	有山台	
黒浜式	南加瀬 北加瀬金山 伊勢山台 新作八幡台 A地点	宮ノ台 矢上谷戸 酒詰仲男調査 下田東 第1～4貝塚 高田 江坂輝弥地点 箕輪 酒詰仲男地点 駒林 酒詰仲男地点 南綱島?
諸磯式	伊勢山台 影向寺台 酒詰第2地点 379番地 新作八幡台 A地点 久本 東北斜面 西南斜面	矢上谷戸 酒詰仲男調査 井田(南) 高田 谷川磐雄地点 大山柏地点 箕輪 谷川磐雄 酒詰仲男地点 駒林
諸磯a式		矢上谷戸 横浜市調査 下田東 第1～4貝塚 高田 江坂輝弥地点
諸磯b式	影向寺台 362番地 新作八幡台？ B地点 新作大原 第2号住居址	高田 江坂輝弥地点 南綱島
諸磯c式		
十三菩提式		
≪前期≫		矢上下町 井田(北)

神奈川の貝塚編年 2 前期③

編 年	横 浜
花積下層式	
関山式	菩神台(西)　入江町　白幡浦島丘 6号土坑
黒浜式	富士塚　篠原町八幡神社　上菅田　上末吉不動堂貝塚？　上台　寺ノ谷　風早台　東寺尾白幡神社　二本木　間門平台
諸磯式	富士塚 酒詰西地点　下菅田 A～E貝塚　寺ノ谷　風早台　東寺尾白幡神社 酒詰調査地点　二本木 酒詰1地点　面滝　仏向町　南永田山王台
諸磯a式	供養塔　上菅田　風早台 A地点 C地点　横浜南太田　清水ケ丘 住居址　間門平台 岡野地点 横浜市・神奈川県
諸磯b式	上菅田　風早台 A地点 C地点　面滝　清水ケ丘 住居址　間門平台 神奈川県調査地点
諸磯c式	
十三菩提式	式　大口台　元町 北斜面
≪前期≫	東寺尾中台　鳥越町

神奈川の貝塚編年 2 前期③

編 年	横 浜
花積下層	
関山	菩神台(西)　入江町　白幡浦島丘 6号土坑
黒浜	富士塚　篠原町八幡神社　上菅田　上末吉不動堂貝塚？　上台　寺ノ谷　風早台　東寺尾白幡神社　二本木　間門平台
諸磯	富士塚 酒詰西地点　下菅田 A～E貝塚　寺ノ谷　風早台　東寺尾白幡神社 酒詰調査地点　二本木 酒詰1地点　面滝　仏向町　南永田山王台
諸磯a	供養塔　上菅田　風早台 A地点 C地点　横浜南太田　清水ケ丘 住居址　間門平台 岡野地点 横浜市・神奈川県
諸磯b	上菅田　風早台 A地点 C地点　面滝　清水ケ丘 住居址　間門平台 神奈川県調査地点
諸磯c	
十三菩提	大口台　元町 北斜面
≪前期≫	東寺尾中台　鳥越町

神奈川の貝塚編年 2 前期④

編 年	横浜	三 浦・湘 南
花積下層		鴨居小学校内 二次堆積
関山		高坂 B貝塚 上部貝層　茅山 SI01住居址内　羽根尾 3C区 1～3・6号貝　5区 1・3号貝層
黒浜		高坂 B貝塚 上部貝層　諸磯 北地区（住居址内？）　3トレンチ内 住居址　西方 住居址内　万田 第9次調査 2～6貝塚　羽根尾 3C区 1・2号貝塚　5区 1・3号貝層
諸磯	横浜学園	荏柄天神前
諸磯a		諸磯
諸磯b	峰道跡群隣接	諸磯　立石 住居址内
諸磯c		（諸磯）
十三菩提		
≪前期≫		善行坂？

≪中期≫

神奈川の貝塚編年 3 中期①

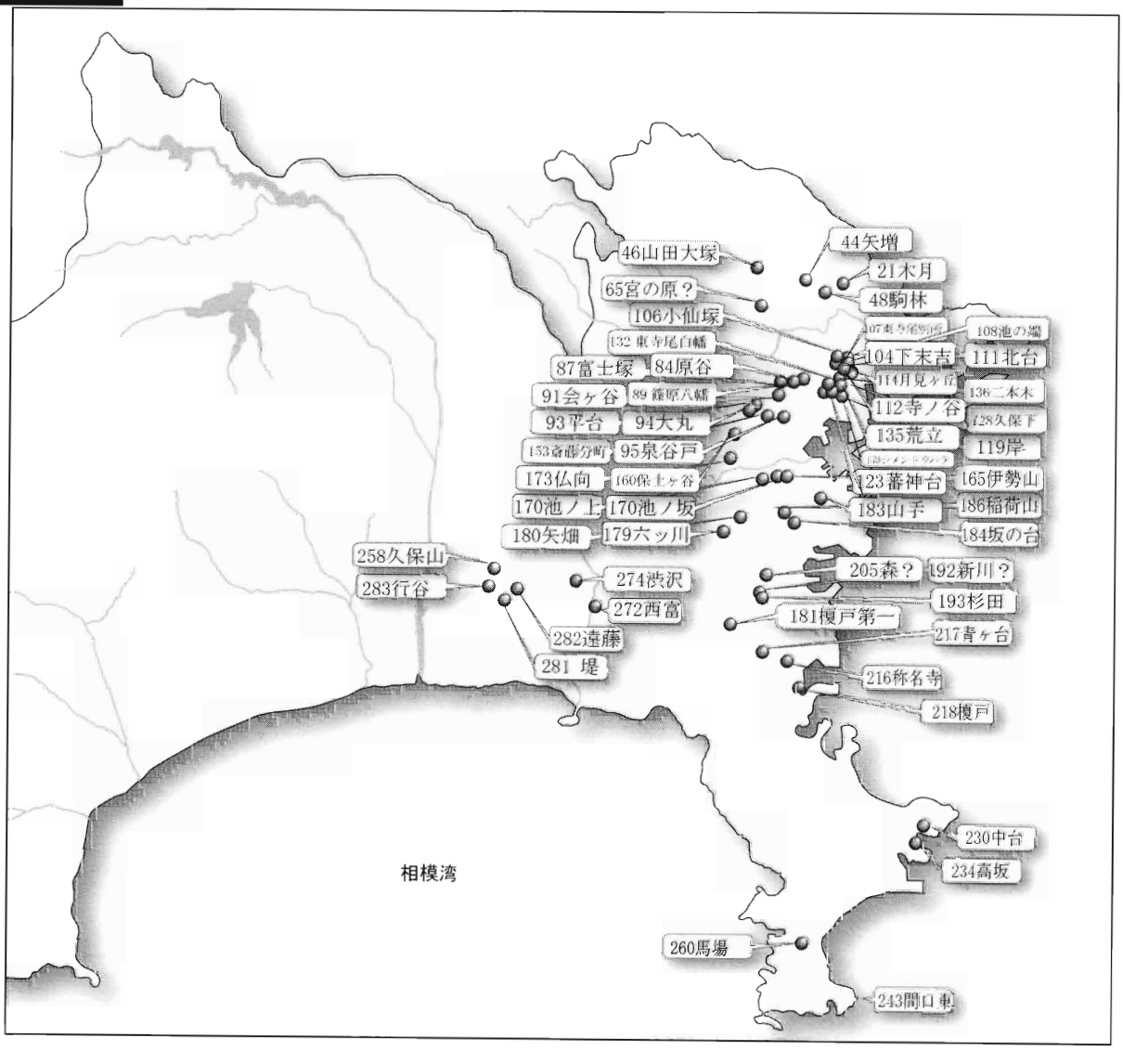
編年	川崎	横浜											
五領ヶ台				宮ノ原 北貝塚 第2貝層	源東院 A・B貝塚	池辺							大口台
勝坂	椚坂	野川 原ノ観音	高田 谷川磐雄地点 大山柏地点		大熊仲町 住居址内	加賀原 住居址内	師岡 2A～E区 Ⅳa層	会ヶ谷 (篠原大原) 石野瑛 篠原団地内	平台	宿根西 12号住居址	荒立(台上) 第1貝塚		
阿玉台							師岡 2A～E区 Ⅳa層						
加曽利E			下田西 酒詰・芹沢地点安 藤安平地点	日吉中駒	宮ノ原 北貝塚 第1貝層		平台	樽	会ヶ谷 (篠原大原) 石野瑛 篠原団地内	平台	篠原町 八幡神社	松蔭寺傍	荒立(台上) 第1貝塚 第2貝塚	大口台 1・3号住居址
加曽利EⅠ					北川 J51住居址	中ノ窪							大口台 14号住居址
加曽利EⅡ		井田(北) 92号住居			北川 J56住居址 J71住居址 P88土坑						泉谷戸 中段東斜面		
加曽利EⅢ											菅田利 Fトレンチ		
加曽利EⅣ				吉田町 5513									
≪中期≫		川崎河港？		東根？				会ヶ谷 (篠原大原) 20号住居址 34号住居址 79号住居址				渋沢	

神奈川の貝塚編年 3 中期②

編 年	横 浜	三 浦 ・ 湘 南
五領ヶ台式	元町（南斜面・北斜面）　山手	五領ヶ台（A～C貝塚）
勝坂式	杉田（早稲田調査）　称名寺（石野瑛地点）	岡田（38号住居址）　八幡台
阿玉台式		江戸坂（横原政職地点）
加曽利E式	神大寺（北）　長山　六ッ川（南ケ）　坂ノ台　杉田（早稲田調査）	深田　中台（南貝塚）　江戸坂（横原政職地点）　吉井（第2貝塚 上部貝層）　向川名　平戸山　善行　八幡台
加曽利EⅠ	杉田（盤古堂調査）　青ヶ台（第2）	
加曽利EⅡ	岡村三殿台（10-B号住居址）　杉田（盤古堂調査）　青ヶ台（第2）	江戸坂（2丁目地点）
加曽利EⅢ式	南永田　山王台（北・南地点）　杉田（盤古堂調査）　青ヶ台（第1 第3）	江戸坂（2丁目地点）　吉井（第1貝塚 上部貝層）
加曽利EⅣ	杉田（盤古堂調査）　称名寺（A貝塚 I貝塚）　青ヶ台（第1 第3）	中台（北貝塚）　吉井（第1・2貝塚 上部貝層）
≪中 期≫	笹下2丁目　笹下（台地西斜面）　上倉田　鉢ヶ台？	渋沢

2008「神奈川県立歴史博物館『神奈川県貝塚地名表』より作成

≪後期≫



神奈川の貝塚編年 4 後期①

編 年	川崎	横 浜
称名寺		会 ケ 谷（篠 原 大 原）2号住居址 2023・26・32・35・50土坑 1～4号貝塚
称名寺1		
称名寺2		
堀之内式	木月 低地	矢増 南斜面 駒林 神隠(北) 吉田平台（神隠丸山）東斜面 原谷 式 富士塚 松下胤信・酒詰南C1A地点 榎本 篠原町八幡神社 片倉町 大丸 台地北斜面 下末吉 愛宕社
堀之内1式		山田大塚 15号土坑 富士塚 池田・斎藤地点 会 ケ 谷（篠 原 大 原）2号住居址 2023・26・32・35・50土坑 1～4号貝塚 石野瑛地点 篠原団地内 平台 泉谷戸 中段東斜面
堀之内2式		
加曽利B式		吉田平台（神隠丸山）43号住居址 64号住居址 平台 片倉町 大丸 台地北斜面
加曽利B1式		
加曽利B2式		
加曽利B3式		
曽谷式		
安行式		
安行Ⅰ式		
安行Ⅱ式		
≪後期≫		獅子ケ鼻 会ケ谷（篠原大原）34号住居址

神奈川の貝塚編年 4 後期②

編 年	横 浜
称名寺式	
称名寺1式	
称名寺2式	
堀之内式	小 仙 塚 大場磯雄地点 A・I～K地点 東寺尾別 池の端 倉畑 北台 中段斜面 寺ノ谷 月見ヶ丘 岸 中段斜面 善神台 台地東斜面 久保下 低地 東寺尾白幡神社 シメンドウハラ 荒立（台上） 第1・2貝塚 松岡六郎・酒詰地点 荒立（台上） 第1・2貝塚 松岡六郎・酒詰地点
堀之内1式	
堀之内2式	小 仙 塚 C・D地点 横A・C区
加曽利B式	小 仙 塚 A地点 北台 中段斜面 月見ヶ丘 荒立（台上） 荒立（台上）
加曽利B1式	
加曽利B2式	
加曽利B3式	
曽谷式	
安行式	
安行Ⅰ式	
安行Ⅱ式	
≪後期≫	帷子峯 初頭～前葉 帷子峯 初頭～前葉

神奈川の貝塚編年　4　後期③

編年	横浜
称名寺式	杉田 盤古堂調査
称名寺1式	南永田 山王台 北地点 青ヶ台 第1 第2
称名寺2式	称名寺 B貝塚E貝塚 青ヶ台 第1 第2
堀之内式	二本木 酒詰2・3地点 斉藤分町 台地中段 神大寺 北・西・東地点 保土ケ谷 A 第1地区 伊勢山 池ノ坂 松下胤信地点 酒詰仲雄地点 179番地地点 大谷戸 台地西南部 池ノ上 六ッ川町 坂ノ台 稲荷山 第3・4貝塚 (下部貝層) (上部貝層) は or 加曽利B 岡村三殿台 西側貝塚 新川？ 杉田 早稲田調査
堀之内1式	三ッ澤 稲荷山 第1(第5貝塚)第2(第1貝塚) 杉田 盤古堂調査 称名寺 B貝塚 C・E?貝 青ヶ台 第1 第3
堀之内2式	大口台 丸山次雄地点 三ッ澤 矢畑 稲荷山 第1(第5貝塚)第2(第1貝塚) 杉田 盤古堂調査 森 称名寺 B貝塚 C貝塚 青ヶ台 第1 第3
加曽利B式	長山 池ノ坂 酒詰仲雄地点 179番地地点 榎戸第1 森
加曽利B1式	矢畑 杉田 盤古堂調査
加曽利B2式	仏向 B貝塚 (住居址内) 杉田 盤古堂調査
加曽利B3式	仏向 B貝塚 (住居址内) 称名寺 D貝塚
曽谷式	仏向 B貝塚 (住居址内) 称名寺 D貝塚
安行式	池ノ坂 酒詰仲雄地点 179番地地点 山手
安行Ⅰ式	仏向 A貝塚 岡村三殿台？ 311号住居址 杉田 盤古堂 森 称名寺 D貝塚
安行Ⅱ式	仏向 A貝塚 山手 貝殻坂 杉田 盤古堂 森 称名寺 D貝塚
≪後期≫	小谷戸 仏向 C・D・E・F貝塚 稲荷山 第1・2貝塚

神奈川の貝塚編年　4　後期④

編年	三浦・湘南
称名寺式	榎戸 A貝塚 B貝塚 中台 北貝塚 松輪 間口東洞穴
称名寺1式	
称名寺2式	
堀之内式	万田 第1 (八幡一郎) 第3 (酒詰仲男)
堀之内式	榎戸 A貝塚 B貝塚 中台 北貝塚 馬場 竪穴柱穴内 善行 堤 W貝塚 行谷 久保山A
堀之内2式	榎戸 A貝塚 中台 北貝塚 西富 第Ⅰ～Ⅴ貝層 堤 E貝塚 W貝塚 遠藤 行谷 木月 久保山A
加曽利B式	松輪 間口東洞穴
加曽利B1式	中台 北貝塚 堤 W貝塚 行谷 久保山A
加曽利B2式	
加曽利B3式	
曽谷式	松輪 間口東洞穴
安行式	
安行Ⅰ式	高坂 A貝塚 松輪 間口東洞穴
安行Ⅱ式	
≪後期≫	渋沢 堤 N貝塚

≪晚期≫

神奈川の貝塚編年　5　晚期

編年	横浜
安行Ⅲa式	仏向 A貝塚 杉田 盤古堂調査 森 称名寺 D貝塚
安行Ⅲb式	仏向 A貝塚 森
安行Ⅲc式	仏向 A貝塚 森 称名寺 D貝塚
安行Ⅲd式	仏向 A貝塚
大洞A式	称名寺 D貝塚
≪晚期≫	仏向 B・E・F貝塚

記念講演

神奈川における縄文時代の自然環境

－貝類群集からみた縄文海進－

松島義章(放送大学)

Ⅰ．鎌倉に縄文海進の海岸線を探る

・鶴ヶ岡八幡宮境内で約6000年前の海岸線を見つける
・鎌倉大仏は約6000年前の干潟に立地する
・古鎌倉湾は滑川低地に形成された入江
・神奈川における縄文海進最盛期の海岸線
・復元された東京湾西岸～相模湾沿岸の縄文の海

Ⅱ．貝類群集から古大船湾を復元する

・柏尾川低地に存在した古大船湾
・湾奥に分布するマガキ主体の干潟群集
・湾央～湾奥の砂地に分布する内湾砂底群集
・内湾～沿岸における貝類群集区分と生息環境
・古大船湾と古鎌倉湾の貝類群集の分布

Ⅲ．横浜港周辺域における完新世の相対的海面変化曲線

・完新世の海面上昇と貝類群集の垂直変化
・完新世の海面変化と貝類群集の変遷
・横浜港を中心とする約１万年前以降の相対的海面変化曲線
・復元された東京湾西岸～相模湾沿岸の縄文の海

Ⅳ．海面上昇に伴なう横浜港周辺の環境変遷

・約１万年前の海岸線
・約7500年前の海岸線
・6500～5500年前の海岸線
・4500～3500年前の海岸線
・2500～2000年前の海岸線
・約1500年前の海岸線

Ⅴ．貝塚出土貝類から推定する採貝活動域について

・横浜市港北区の菊名貝塚(東京湾)
・平塚市の万田貝殻坂貝塚(相模湾)
・大磯丘陵の羽根尾貝塚(相模湾)
・茅ヶ崎市の西方貝塚(相模湾)

Ⅵ．海底に埋没した縄文早期の２遺跡が示す旧汀線

・知多半島内海低地の先苅貝塚遺跡
・房総半島南端の館山沖ノ島遺跡

記念講演

三浦半島の縄文貝塚に魅せられて

－赤星直忠先生と夏島貝塚、縄文銛頭とヤスそしてイルカの碑－

金子浩昌

1　表　題　三浦半島の縄文貝塚に魅せられて

三浦半島の縄文貝塚とその文化には、縄文人の力強い生き方を感じさせるものがあるのですが、それはこの地の多様な、しかしきびしい自然に対応しようとした縄文人の活動力によって育まれてきたものと考えています。そうしたことを教えてくれる貝塚に魅せられてきました。その様な中で感じたこと、調べてみたことの一つをお話ししてみたいと思います。

2　内　容

（1）はじめに

石器時代研究を力強く押し進められた先覚赤星直忠先生の「『先史時代の三浦半島』1950 に寄せて」と題して、先生の夏島貝塚への思いをのべます。

（2）横浜市称名寺貝塚から千葉県館山市鉈切洞窟遺跡へ－浦賀水道を越えて拡がる縄文漁撈骨角器文化－

（3）福島県いわき地方に伝えられた縄文銛頭とヤス－福島県いわき市大畑貝塚の資料との検討－

（4）イルカの碑、18 世紀小田原城郭にあったマイルカ 3 個体の遺骸発掘、2007 年

3　赤星直忠先生『先史時代の三浦半島』1950 に寄せて

今回の講演を依頼され、三浦半島の貝塚のことを考えたときに、この書物のことが思い浮かびました。かつての先生の熱い思いを改めて感じています。

第 1 図
1950『先史時代の三浦半島』表紙と中扉
三浦半島研究会（市立図書館内
三浦半島研究叢書第 1 編　39 頁）
昭和 25 年 11 月 1 日印刷
11 月 10 日初版発行
中央堂書店　頒価 45 円
表紙版画　赤星直忠　製作。

土偶は神奈川県中屋敷出土品－晩期の容器形土偶（h26.7cm）－を写したもの、それと打製石斧、黒く彩りされ、重厚な感じを出しています。

中扉　栗の果実を鉢に入れる縄文女性　**貝製の装身具を着けています。**

絵に書かれた栗の実は表現上の技法にもよるかと思いますが、大きな実です。この栗の実にどのような思いを託されたのでしょうか。栗の実は手をかけると結構大きくなります。栗の栽培を考えられていたかも知れません。親交のあった酒詰仲男氏もこのことを述べられていますが、その後、氏は日本の原始農業を論じて、先ず栗が栽培対象であったろうといっています。(酒詰仲男、1956、日本原始農業試論　考古学雑誌　42-2)

4　横須賀市夏島貝塚

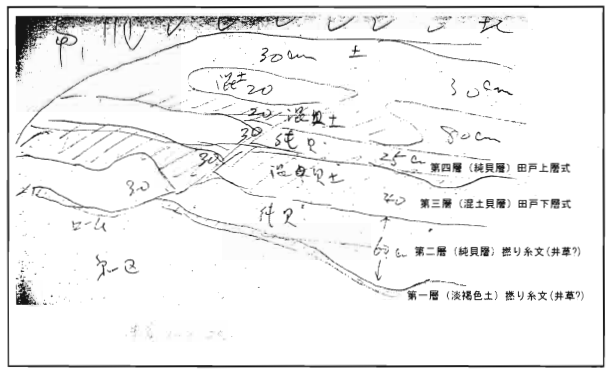
夏島貝塚　夏島山頂にある貝塚の断面。三層の貝層と其上下及び中間と合せて七層からなり稲荷台式、田戸下層式、田戸上層式、子母口式、茅山式など縄紋式早期の土器が夫々の層から順に見出された。(昭和25年1月)

第2図　**先史時代の三浦半島**』巻頭写真
赤星先生撮影　写真説明の末尾に昭和25年1月とありますが、これは誤記で2月です。

赤星ノート、2月20日のくだりには、まず貝層断面のスケッチがあり、貝層の分布と層序の様子を次のように記しています。

「夏島貝塚

島の東端山頂に現存する。山頂から北の斜面に向かって傾斜している。山頂東端部が防空壕天井の落盤に伴って陥没し幅（北南）5m 許の貝層を露出していた（第一区)。此の部では貝層が二カ所断層をなしてクイちがっていた。純貝層二層（2及4層）間に混土貝層（第三層）を



第3図　夏島貝塚貝層断面スケッチ図　『赤星ノート』より

挿む、北半にては更に上に薄い貝層が断続した。第一貝層下は約 10cm の淡褐色土葬（第一層）で、以下ローム層となる」。この後、層序の時期についての記述があり、そして最後に

「　25,2,20,（晴）明大後藤教授よりの通知により参加す。（中略）9 時 30 分迎えのバスにより夏島に至る。午後 4 時終了。」とたんたんと述べられています。

杉原、芹沢報文 1957、「昭和 25 年 2 月 20 日、わたくしたちはダウンズ大尉の案内で、夏島に登る。（中略）おそらく考古学者の夏島に入ったのは、これが最初であったろう。」

第 2 図巻頭写真の貝層断面前に立つのは御子息劍二氏です。背景は冬枯れの様子。貝層断面の右手はまだ未発掘の状態がみられ、発掘の初期の様子を見せています。この写真はむかし「横須賀市史」に小さく載ったことがあるということです。

横須賀市夏島貝塚は明治大学考古学研究室によって発掘が行われ、縄文早期初頭の編年が層位的に明らかになりました。このことを杉原荘介先生は後刊の報告書中で感慨を込めて書かれていますが、赤星先生もまた自らの写真と説明の記事から夏島貝塚に対する熱い思いを込められています。というのは先生もまた夏島貝塚の調査を計画されていましたが、実行出来なかったという経緯があるのです。

赤星ノートの再録に当たっては赤星資料館の劔持輝久氏にいろいろ御教示、御配慮をいただきました。有り難うございました。

5　『先史時代の三浦半島』

高橋恭一さんは「序」のなかで、三浦半島は日本考古学界の大切な自然の一大博物館であり、昨今此の方面の研究熱も漸く高まってきたが、こうしたなかで、若い人達に我等の郷土の先史時代の遺蹟や遺物についてよく知ってもらいたいという強い願いから書いていただいたものであるとのべています。そして赤星さんは「**考古学徒のメッカとも称すべき三浦半島**」への訪問者のために、「考古学上の遺蹟と遺物について説明する」と述べ、さらに「三浦半島の市町村は各々に所在する重要な遺蹟の保存ということを今から考えていないと数年後には全く遺蹟が失われてしまうことになる。」とも書いています。赤星さんの文章は遺蹟の訪問者に対してのものでしたが、今はそれを上回る勢いで開発による遺蹟の消滅が進んでいるのが現実です。

6　遺跡分布図

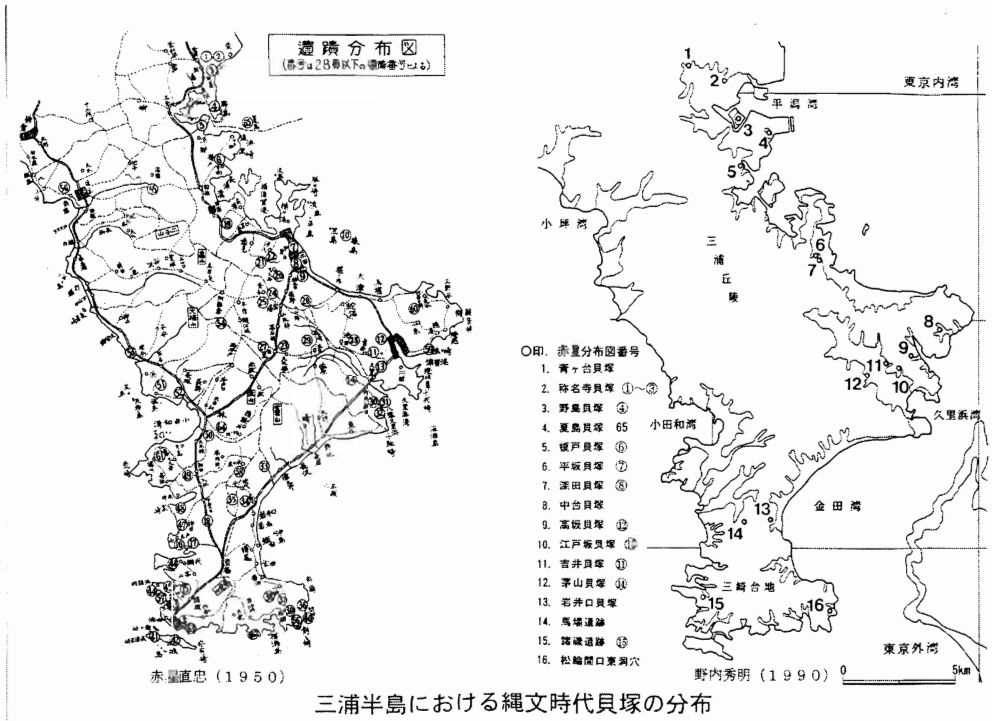
縄文時代の主要遺蹟については文献などもあげ遺物の内容にもふれている。

野島、平坂、田戸、吉井、茅山、諸磯　三戸などの遺蹟については、特に詳しく説明され、報告、研究文献をあげている。赤星さんが縄文遺跡について深い関心と調査をおこなってきたことがわかります。

ここには縄文～弥生期までの 68 遺跡が載せられていますが、参考に最新の分布図を掲載します

（野内秀明 1999）。赤星遺跡図にはない 8；中台貝塚、13；岩井口貝塚、14；馬場遺跡、16；松輪間口東洞穴などが加わりますが、いずれも小規模で開発中の発見でした。

1999　野内秀明　『諸磯遺跡発見 100 年記念シンポジュウム記録集　貝塚から見た縄文時代の漁撈活動』



三浦半島における縄文時代貝塚の分布

第４図　三浦半島における縄文時代貝塚の分布　　左：赤星 1959　右：野内 1999

7　三浦半島周辺海域と対岸房総半島をみる

三浦半島には漁労に適した出入りの多い海岸地形、岩礁底質の発達し、そこに住む人々が海へのかかわりを深めていきます。漁具などにみるように伝統性も生かされていましたが、時代を経て変わっています。

重要なことは**多様な働きかけがあったことで**、外海、内湾域へと活動の領域をひろめ、東京湾東西両岸域のそれぞれの自然的な環境に対応しつつ活動しました。

早期初頭；広大な旧平潟湾を中心とした漁労が発達し、早期末葉期には大規模な貝塚を形成するほどになりましたが、内、外水両水域での漁労の活動をおこなっていました。

前期；鶴見川谷に漁撈の集団が移ったのは、この地域に砂底性の海浜が発達して、貝採集の好条件ができたことによるのでしょうが、漁撈の積極的な活動を目指したようです。

中期；もっとも注目されるのは横浜市称名寺貝塚の出現で、平潟湾はなおひろい入り江として残り、北側には砂州が発達して人々の集落の形成を可能にしたようです。称名寺貝塚といわれる貝塚が点在形成されます。湾の西側の奥には青ヶ台貝塚ができます。イルカの群れが近づくことがあったようです。湾内に入ってきたイルカを仕留めるには銛漁法が有効です。併せてヤスを使うことにも積極的でした。均斉のとれた大形の銛頭やヤスが、本州ではじめてこの地でつくられます。

後期前葉期；称名寺貝塚の骨角器文化はさらに機能性を高めた形をつくりあげ、海を渡り、北上します。いっときも止まることはなかったようです。太平洋岸域にはこれを迎える仲間がいたようです。もちろん近接した地域の横浜市稲荷台貝塚では、称名寺貝塚骨角器文化－縄文銛頭－の最高のものがつくられています。

後期後葉期は漁労関係の骨角器にもかつてのような多様さ、鋭さがみられなくなります。変革のきざしがみられるのかもしれません。

8　称名寺貝塚の発掘について

1951　昭和26年のはじめ吉田　格氏は称名寺貝塚資料が縄文文化編年上新資料であるとの知見を得、その年2月　日本考古学協会縄文部会にて発掘した。　A、B貝塚である。

1957　昭和32　第二次調査　C貝塚と江戸時代貝塚を発掘している。

骨角器の写真が一般書に掲載されるが、もっとも鮮明な写真はかなり後になってからである。

＊1955　骨器、角器　日本考古学講座　第1巻　河出書房　＊1990　立正大学学園『吉田至コレクション考古図録』

刺突具についてこんな説明をしています。ヤスはカギの有無で大別され、カギのあるものには紐止、紐溝をもつものがあり、紐をかけてモリのように使用された。モリは「燕形モリ頭」のことを指す。ここでは称名寺貝塚のヤス、モリについて直接言及していませんが、称名寺貝塚出土品を意識していると思われます。紐止、紐溝をもつものを私は「単純銛頭」とよんでいます。

＊1959「世界考古学大系　日本1」漁撈文化の展開　縄文後、晩期文化　吉田　格

鮮明な図版で称名寺貝塚の骨角器が紹介されていますが、説明は簡略でした。

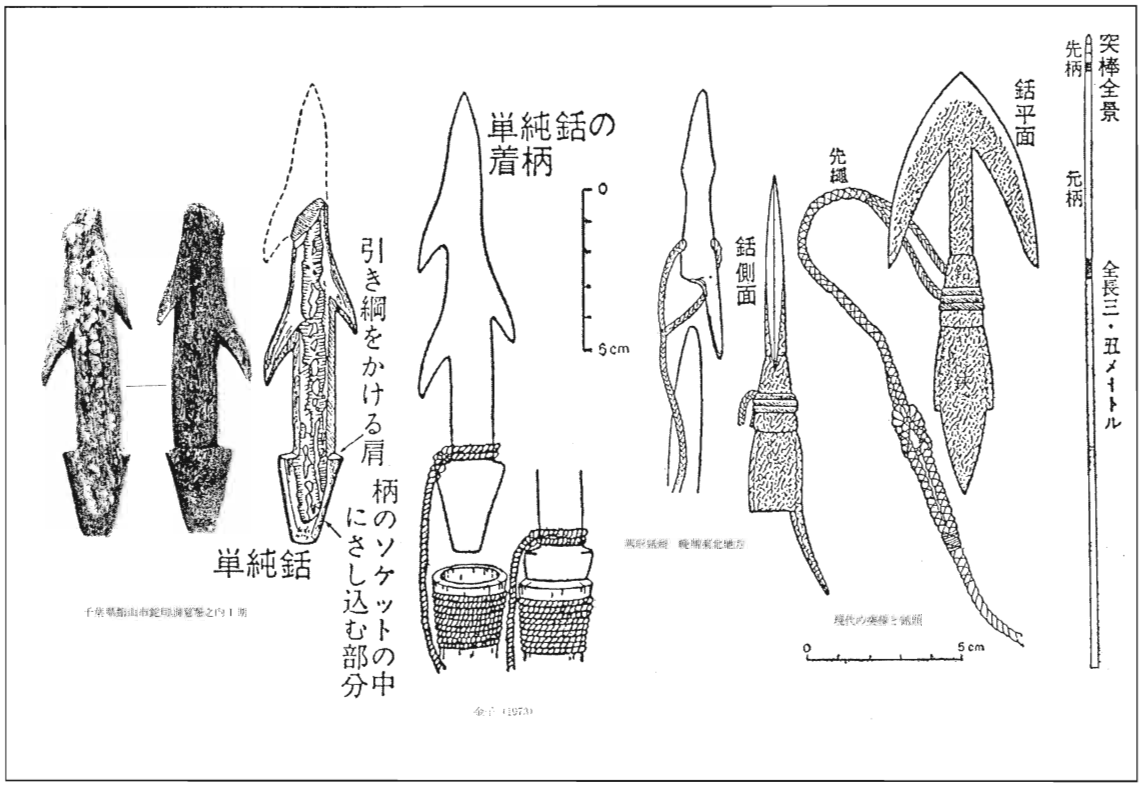
1960　昭和35、東京都武蔵野郷土館調査報告書　第1冊　－横浜市称名寺貝塚－が刊行。

ここでは骨角器の銛、ヤスの分類について、「ここでいう銛は逆刺のあるものを一応銛とし」「ヤスの如く数本組み合わせて使用されたものも含んでいる」と大変広く扱っています。

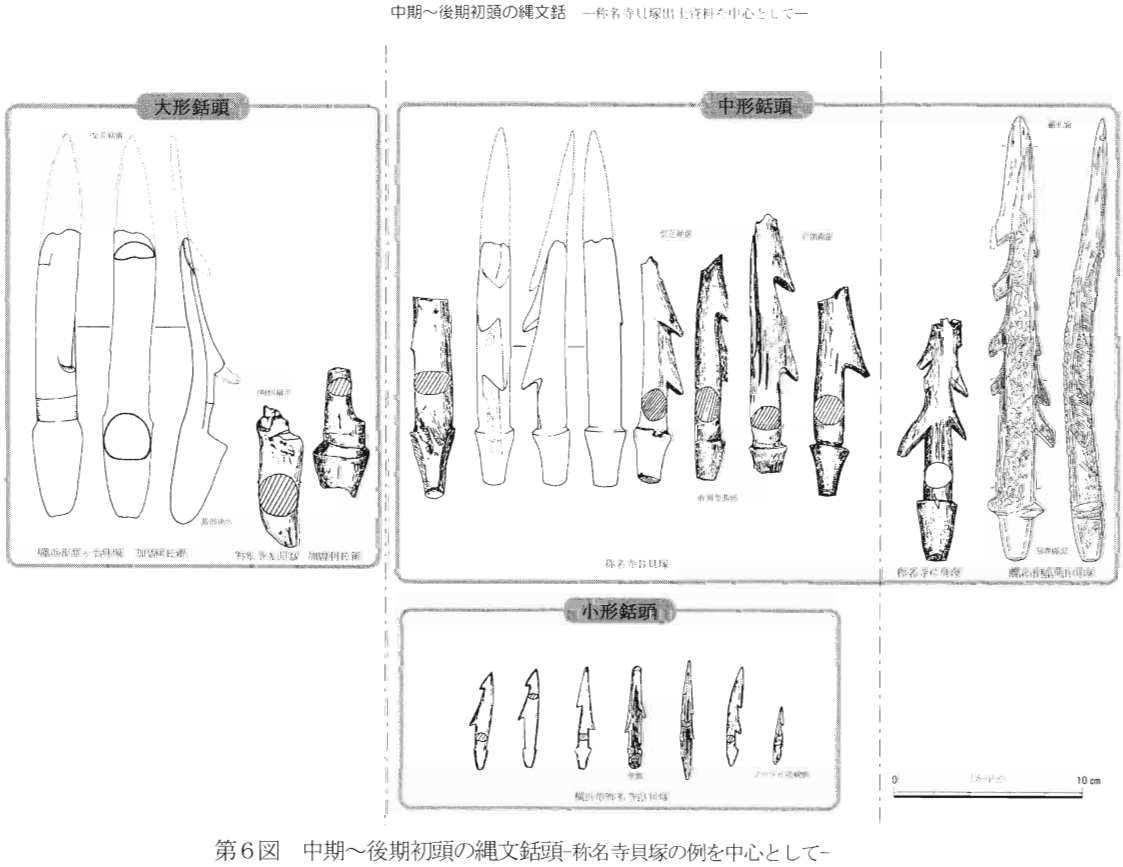
9　銛頭とヤスあるいはやす状刺突具についての説明

銛頭（harpoon）とヤス（fish－spear）は大切な道具で、民族学、考古学の資料ではそれぞれを区別して扱います。かつて未開といわれた人々の間でも、この両方をつくっていました。

銛頭とヤスの区別は、刺突具先端部を柄とどのように着装するかということで区別されます。柄と着脱が可能のものが銛頭です。もっとも簡単なものは、柄の方に切り込みをつけて、先の部分を挟んだり、さし込んだりすればよいわけです。根本に紐をしっかりと結び抜け落ちないようにします。単純な着装法なので「単純銛頭」といいます。もう一つ銛頭のかたちは、柄の先端を銛頭につくったソケットの中にさし込んで着装する方法で、銛頭にちょっと手のこんだ細工が必要になります。これは簡単につくれなかったかも知れません。日本の考古学上の名称は「燕形銛頭」といい、東北地方の晩期以降になって多くつくられます。単純銛頭の方は関東地方の縄文前期に出現し、中



第５図　鉈切洞窟出土単純銛とその着柄想定図　（比較：資料燕形銛頭, 現在の銛頭）



第６図　中期～後期初頭の縄文銛頭-称名寺貝塚の例を中心として-

期後葉期には称名寺貝塚A貝塚のように整った形のものがつくられます。さらに地域によって違う形のものもつくられました。なお、「燕形銛頭」には「閉窩式」、「開窩式」などの違いがあります。銛頭の分類、名称は研究者によって違いがあります。

１０　称名寺貝塚の縄文銛頭

称名寺貝塚の骨角器は漁猟関係の製品が大部分で、銛頭とヤスと鏃に大別されます。まず、「銛頭」についてみてみます。

基本的には吉田分類に準拠し、それをもとに筆者のなづける部位名称、形態名称とその変化の過程を図示してみました。

全長による区別；大形、中形、小形。　大形と中形はすべて鹿角が素材として使われています。小形の製品は鹿角、獣骨、鳥骨、魚骨など多様な素材でつくられ、もっとも小さいのはクロダイの臀鰭棘で、長さは3cm足らずです。

器体；扁平、幅狭。真直、反り、よじれ。鹿角の自然の形に支配される。

逆刺の付き方と形：　片側、　両側、　後面（海綿質側）。　交互鋸歯状、片側鋸歯状。翼状逆刺；逆刺間隔の広狭、長短。数は次第に減る。

基部（肩をつくる部分）；長形、短広型、後面（海綿質側）**抉り**。緻密質の両則を抉り、**肩をつくる**。切り込み方に**浅・深**ができる。**隆起帯に変わる。**

中期の末葉（称名寺貝塚A）、**後期の初頭**（称名寺貝塚B）、**後期前葉**（称名寺貝塚C,堀之内１期）

１１　1956　昭和31、の千葉県館山市鉈切（神社）洞窟遺跡の発掘

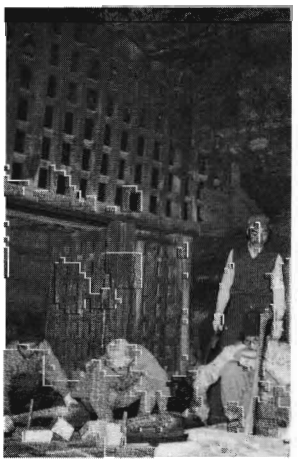
水産千葉県（今は変わってしまいましたが）の文化振興を目的、館山市船越鉈切神社洞窟の総合調査を行います。考古、地理、歴史、民俗、洞窟環境、動物生態学の各分野が集まりました。考古では鉈切洞窟遺跡がはじめて調査されることになりましたが、この洞窟についてはこれまでに調査がなく、どのようなものなのか、全く不明でした。現在では神社の建立で原形を失っていましたが、表土を削除した程度であったようです。千葉県教育委員会は赤星先生を招聘し、三浦半島洞窟遺跡との比較をお願いしました。先生の報告が掲載されています。

洞窟は基盤である凝灰岩質泥岩層が侵食されてできた海蝕洞穴、標高約25m,奥行き37m

洞内の堆積層は薄く、前期末十三菩提式、五領ヶ台式土器が最下層にあった。

第Ⅰ層　堀之内１期そして銛頭の出土

第Ⅱ層　称名寺２期　多くの骨角器と海産、陸産の動物遺体を多数



第７図　鉈切洞窟と赤星先生

検出し、称名寺貝塚文化の直接的な波及をまざまざとみたのであった。
1年の整理期間後に報告書をまとめるが、土器については当時
東京大学人類学教室におられた山内清男先生、称名寺貝塚の調
査者である吉田　格先生から教示を得、和田　哲氏とともに報告書を刊行しました。この報告者の作製のために関東を中心に、骨角器の資料をいろいろ集めました。

１２　福島県いわき市大畑貝塚の銛頭に出会う

1960（昭和 35）年、岡本　勇さんから茨城キリスト教学園の志田淳一氏（日立市郷土博物館長）を紹介され、氏から福島県いわき市大畑貝塚採集の骨角製品を提示されました。それは同学園考古クラブの生徒諸君が貝塚の探査中に採集されたものでした。志田さんとは明治大学考古学研究室でお目にかかりましたが、それは間違いなく称名寺貝塚、鉈切洞窟遺跡出土の銛頭と同じ形態のものでした。そのときにみたのは先端部分を失っていました
が、その後筆者と生徒諸君とで現地調査をした時、幸運にも先端を貝層断面から採集することができました。堀之内１式併行期の製品です。

＊福島県いわき市大畑Ｂ地点貝塚、綱取Ｃ地点貝塚

いわき地方は東北地方南部の外海系貝塚分布地域として知られ、骨角器の多く出土することでも知られていますが、後期初頭の頃はまだそうした文化の波及を見ないのです。

大畑Ｂ貝塚で採集された銛頭は、その形態からみて、おそらく東京湾湾口域あるいはその近域でつくられ、小名浜まで運ばれたものと思われます。

この地の主要貝塚である大畑、綱取、寺脇などの縄文後期初頭から晩期の貝塚は、南の八崎と北の三崎に囲まれた旧小名浜湾に臨んで形成されますが、その海岸線は称名寺貝塚を育んだ旧平潟湾よりも遙かに広く、館山湾の海岸線がそれに匹敵するかも知れません。このような小名浜地方に規模の大きな貝塚のできたことは当然でしたが、後期初頭には北上する骨角器文化の影響を受けました。

＊ いわき市大畑、綱取貝塚の発掘

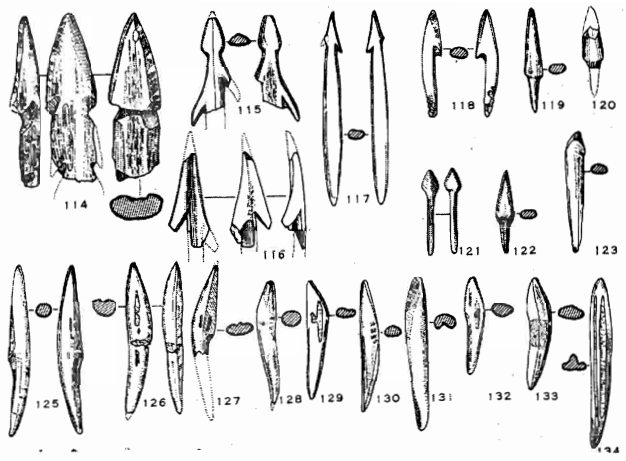
1961年　　大畑貝塚Ｅ地点（大木 8b 期）の発掘調査

1962年　　綱取貝塚Ｃ地点（後期初頭、綱取 1）の発掘調査

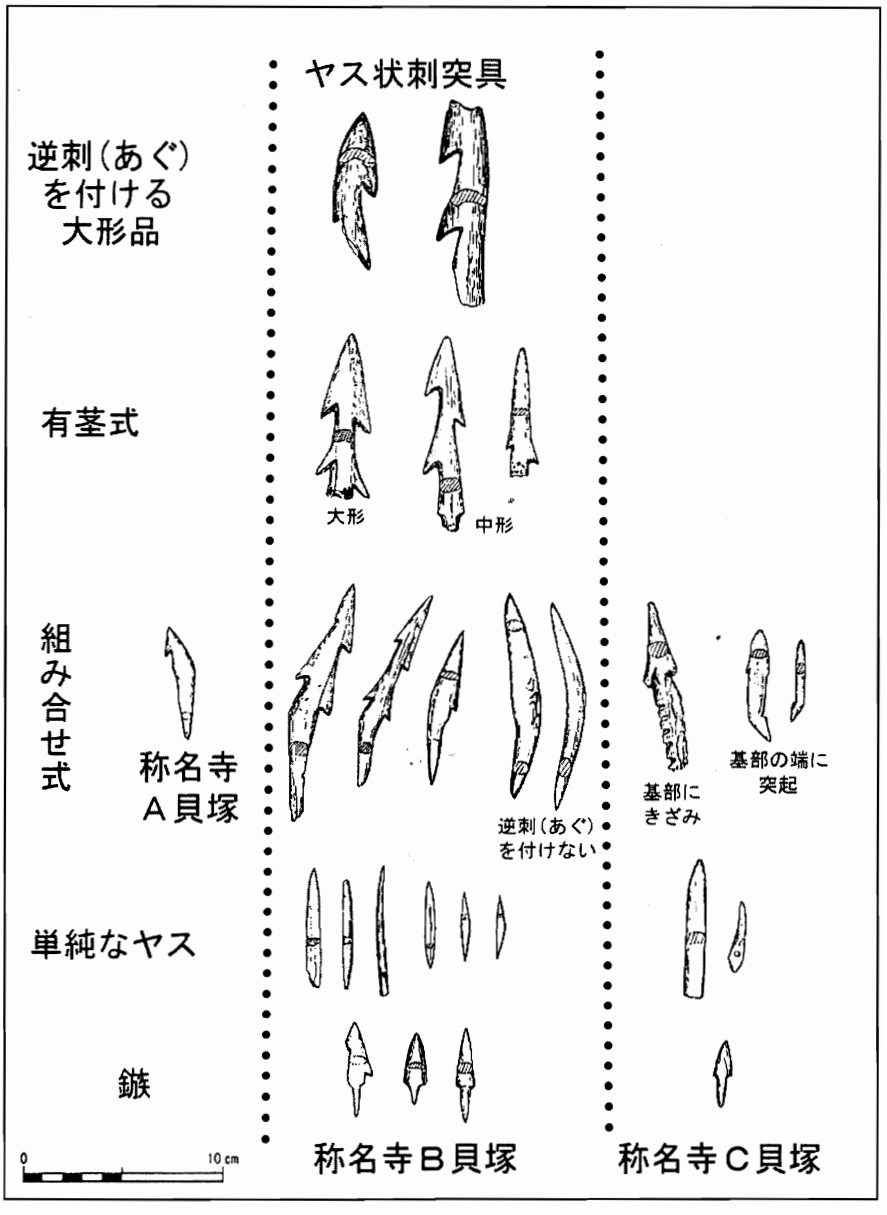
1970～72 年　大畑貝塚各地点の発掘　いずれもいわき市教育委員会

＊ 大畑貝塚Ｂ地点での称名寺貝塚、鉈切洞窟系の銛頭。

Ｂ地点は後期前葉期の貝塚が形成されていた地点です。かつて筆者らが銛頭を採集した地点であり、同じ形態の銛頭の出土が予想されましたが、それを検出することは出来ませんでした。おそらく私たちが見つけた銛頭は房総半島、鹿島灘を経由してここまで運ばれてきたものでしょう。なお類似した小さい製品があり、それらはここでつくられたものかも知れません。



第８図大畑貝塚Ｂ地点出土骨角器



第９図　称名寺貝塚出土骨角器

１３　もう一つの骨角製漁具；ヤス

称名寺貝塚骨角製品のもう一つの漁具にヤスがあり、銛頭と同様にいくつもの形がつくられています。中期末から後期前葉期に、この種の漁具をこれほどいろいろな形でつくっている例はほかにはありません。

大形品（基部形状不明）、有茎式、組み合わせ式、単純なヤス、鏃（狩猟具）が基本形。

さらに逆刺（あぐ）の付き方、基部のかたちで違いがあります。特に組み合わせ式は好んでつくられたようです。均斉のとれた形の製品がつくられました。逆刺のつく製品よりも簡単な形のものが多くつくられています。これが鉈切洞穴でもみられ、さらに大洗町吹上貝塚でみられ、いわき市大畑Ｂ貝塚で多数つくられていました。横浜市内貝塚では三沢貝塚、稲荷山貝塚（堀之内期）の出土例がありますが、量的にはごくわずかです。

大畑Ｂ地点貝塚の製品を称名寺Ｂ貝塚製品と比べると、組み合わせ式のなかのもっとも形の簡単な製品が多く、逆刺を付ける製品はわずかです。これは漁撈の対象によるのではないかと思われ、この遺跡でのイルカ類の出土は減少し、代わりにカジキ類、アンコウなどがみられるようになります。

小名浜を離れてさらに北、宮城県との境に近い相馬郡新地町三貫地小川貝塚では、逆刺の付いたヤス、組み合わせ式の簡単なヤスを出土しています。それはやがて仙台湾地方へも伝えられることがあったと考えています。

１４　関東地方の遺跡にみるイルカ漁撈

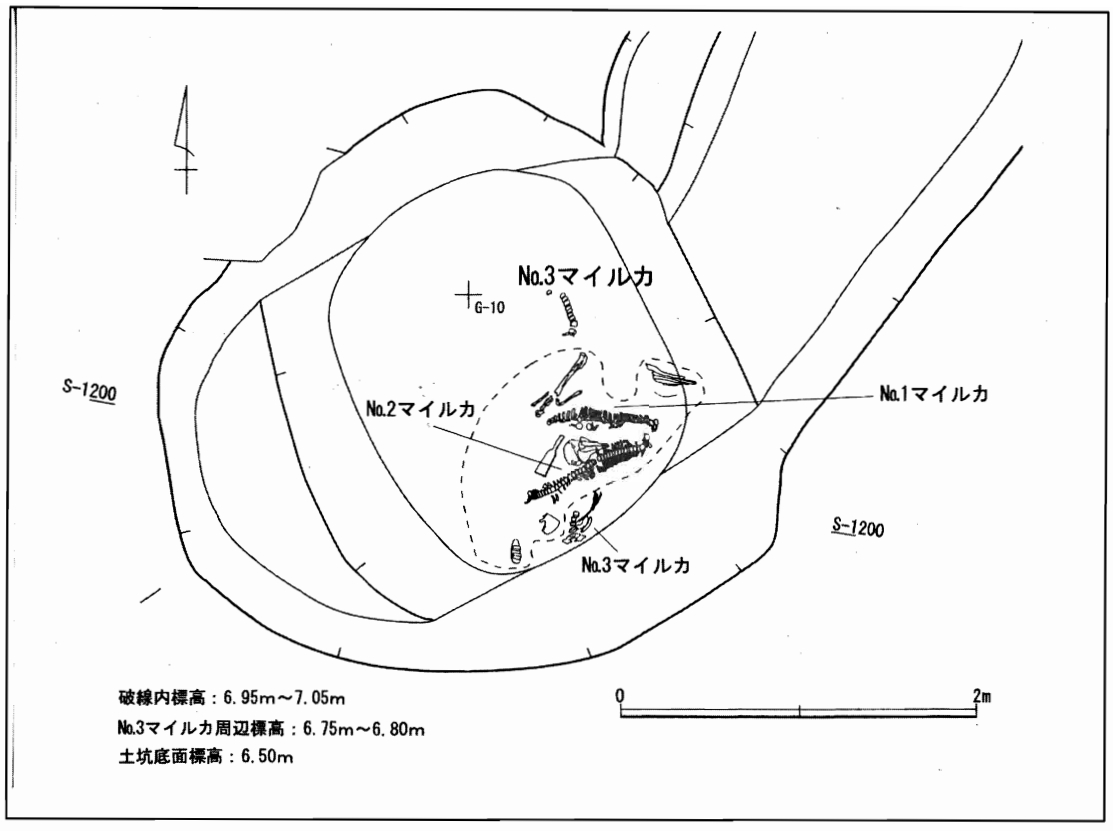
称名寺貝塚、鉈切洞穴の骨角器のことをお話しし、その銛漁撈の主たる対象がイルカ類に対してであることをお話しする余裕がないのですが、その後にも相模湾沿岸域ではイルカの捕獲が盛んにおこなわれてきたことは御承知の通りです。中世鎌倉の遺跡から出土するイルカの遺骸をみると骨まで利用していることがわかります。

しかし一方では、次ぎに述べるような出土例が近世小田原城の発掘調査でありました。

2006 年多摩川文化財研究所による発掘調査で、小田原城藩政期－第Ⅲ面－江戸期前期（17 世紀代）の遺構が検出されましたが、その中にマイルカの遺骸が 3 頭搬入されていました。なお、発掘を担当された小山祐之さんによると、当時のその場所の所有者を確かめることはできなかったということです。

遺構 230 土坑。礫群があり、不整形、規模は 6.0×3.2m、陶磁器（17 世紀前半代）、羽子板 1、下駄 2 点と鳥獣骨類。

2008　小山祐之、小林義典、太田雅晃、伊藤貴宏、金子浩昌、『小田原城三の丸　杉浦平太夫邸第Ⅳ地点、大久保弥六朗邸跡第Ⅲ地点－（仮称）城下町ホール建設に伴う発掘調査－』
小田原市、玉川文化財研究所



第１０図　小田原城三の丸（杉浦平太夫邸第Ⅳ地点、大久保弥六朗邸跡第Ⅲ地点）
マイルカ出土状況（２００８　小山他）

遺構内にはマイルカ３頭の遺骸が中央に搬入されていました。No.3 マイルカが最下底に胴骨を横たえ、No.２，３が方向を揃え並んで出土。頭部ははずされて、位置を変えて置かれていました。頭蓋骨１点は完存し、歯も残っていました。別の頭蓋骨は切断された吻端が残されていました。胴体は環椎以下が残され、椎骨には肉を切り取る際の刃跡が一直線についていました。棘突起も切断されている部分がありました。

四肢骨の大部分はなく、尾に近い部分もありませんでした。つまり、頭と胴体部のみが搬入されていることになります。搬入後に肉を切り落とし、この場所に置いたのでしょう。シカの四肢骨などもありましたが、細かく割られた状態ではありませんでした。ゴミ穴廃棄とは異なる様相であったと思います。ここは骨塚の観を呈していたのです。イルカの遺骸はここに集められ、供養されたのではないかと考えています。

縄文時代においてもイルカ類に対する祭祀的な行為を見ることが出来ます。称名寺貝塚の発掘で頭蓋骨の単独出土例があり、さらに奥には 60m の台上にある青ヶ台貝塚でも頭蓋骨が出土しています。特別な扱いがあったのではないでしょうか。

マイルカは現在では少なくなった種類です。沿岸性のイルカであったために、これまでに多く獲

られてしまったことが、原因ではないかと云われています。長期間にわたって、捕獲がつづいたためでしょうか。ただ、縄文時代のことを考えると、イルカ漁は中期後葉期から後期前葉期位の間のことで、短い期間でしたし、捕獲も近代の漁法に比べれば、ごく少ないものだったと思っています。鉈切洞窟の後期の層全体で推定された個体数は 37 個体（環椎の総数）でした。それで充分だったのでしょう。それでも内湾の貝塚に比べれば遙かに多いと思います。

おわりに

骨角器を中心としたお話になりましたが、ここでお話した遺跡の他に、例えば千葉県館山市にはさらに多くの遺物を出土した大寺山洞窟遺跡があり、三浦半島には榎戸貝塚が早く知られ、青ガ台貝塚が称名寺貝塚からさらに谷奥にあり、相模川谷の堤貝塚でもほぼ同じ時期の骨角器が知られています。いずれも同じ骨角器文化に由来すると考えられます。東京湾沿岸域への広まりもすでに指摘されてきたところです。

三浦半島とその周辺地域の縄文時代には、今の言葉でいう時代を先取りするような技術や文化をみることができるのではないかと思っています。それがどのように育まれてきたのか、またそれを可能にした自然や文化的な背景はどのようなものだったのか、これからも考えていくことができればと思っているのですが。

参考文献（本文中掲載外の文献）

中村若枝　神奈川県下の縄文時代貝塚を概観して　1994　考古論集　神奈川　第３集
佐野大和、西田泰民編　横浜市金沢区青ヶ台貝塚　（1967、1968　の発掘）1994
劔持輝久　三浦半島における縄文時代の漁撈活動について　諸磯遺跡発見 100 年シンポジュウム　貝塚からみた縄文時代の漁撈活動　記録集　1999
小川祐久、野内秀明　有形文化財（考古資料）榎戸貝塚出土骨角器　51 点　2000　横須賀市教育委員会
岡本東三　館山市大寺山洞穴台３洞出土の骨角器、考古学ジャーナル、490,2002
松田光太郎　東京湾沿岸貝塚における縄文後期前葉の骨角器、考古学ジャーナル、490、2002
松田光太郎編　稲荷山貝塚　　かながわ考古学財団調査報告書 131　2002
松浦宥一郎、安藤広道、金子浩昌　東京国立博物館図版目録　縄文遺物編骨角器 2003
松田光太郎　縄文時代後期前葉の東京湾における漁労活動の様相－魚類獲得活動を中心として－神奈川考古、No.41、　2005、
金子浩昌　三沢貝塚と東京湾岸貝塚－横浜市とその近域の縄文貝塚のなりたちと海湾へのひろまり－、石心鄭永和教授停年退任記念　天馬考古学論叢　2007
金子浩昌　日本の石器時代貝塚遺跡と動物遺体　徳永重元博士献呈論集、2007

謝　辞

今回の講演に当たっては、当会副会長中村若枝さんには終始お世話になりました。また文献と資料作製に当たり玉川考古学研究所の小山祐之氏、坪田弘子氏、赤間和重氏、赤星直忠博士文化財資料館の劔持輝久氏の皆様にもお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

縄文時代早期

海進初期から海水面上昇期の貝塚　－夏島貝塚・吉井貝塚など－

野内秀明

１．はじめに

関東地方における縄文時代早期の貝塚は前半の撚糸文土器群の時期に形成が始まり、貝塚があまり発見されていない中葉の沈線文土器群の時期を経て、後半の条痕文土器群の時期に貝塚数が急増するとともに分布域が拡大する。そして、早期末葉の擦痕文土器群の時期を迎えると貝塚数は減少しながらも、分布域はさらに拡大するといった現象が見られる。撚糸文土器群の時期のいくつかの貝塚、拡大期に分布域の最奥部に位置する貝塚は汽水域に生息するヤマトシジミを優先種とするが、それ以外の貝塚はマガキ・ハイガイ・ハマグリ・アサリなど干潟から内湾の砂質底に生息する貝で構成されているものが多い。

神奈川県の早期の貝塚も同様の現象が認められるが、一方で撚糸文土器群～擦痕文土器群までの各時期を通して貝塚が残されること、三浦半島の貝塚は規模の大きな斜面貝層を形成すること、特に半島南部の貝塚では干潟・内湾砂質底に生息する貝に加えてサザエ・レイシ・クボガイなど沿岸水域の岩礁に生息する貝が組成し、魚類とともに種数が多いなど他地域の様相と違いがある。

２．関東地方の縄文時代早期の貝塚

撚糸文土器群の時期の貝塚は利根川下流域に千葉県西之城貝塚・鴇崎貝塚、茨城県花輪台貝塚、東京内湾では湾口に近い三浦半島東部に神奈川県夏島貝塚、平坂貝塚、湾奥の江戸川下流域に千葉県谷ツロⅡ遺跡などが知られている。

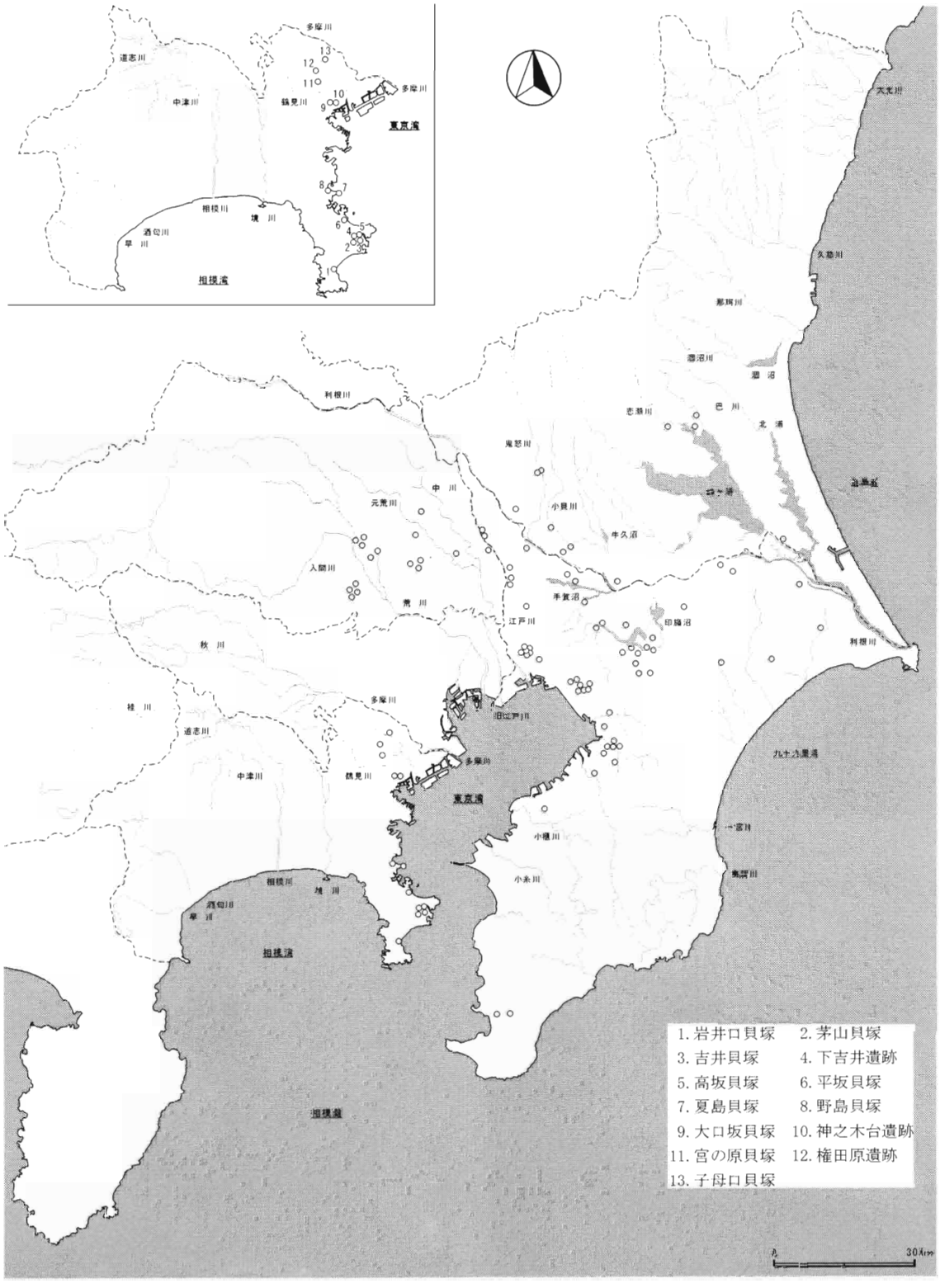
利根川下流域の西之城貝塚は撚糸文土器群初頭の井草式期、花輪台貝塚、鴇崎貝塚は撚糸文土器群後半～終末に形成されたもので、いずれもヤマトシジミが圧倒的優先種でわずかにハマグリ、マガキ、タニシなどが組成する。東京内湾の平坂貝塚（東貝塚）、夏島貝塚（第１貝層）は井草式土器に続く夏島式期、谷ツロⅡ遺跡は稲荷台式期、平坂貝塚（西貝塚）は平坂式期に形成されたもので、谷ツロⅡ遺跡がハマグリ・アサリ・サルボウ・ハイガイなど干潟群集種・内湾砂底群集種、夏島貝塚（第１貝層）ではヤマトシジミの多い層も存在するが、平坂貝塚（東・西貝塚）ともいずれもマガキ・ハイガイを優先種とし、利根川下流域の貝塚群と組成が異なっている。また、撚糸文土器群前葉の貝塚は利根川の河口、東京内湾の湾口に近接して存在しているが、谷ツロⅡ遺跡・花輪台貝塚はそれらより奥まって位置することから、撚糸文土器群の中葉以降に海水面上昇にともなって海水域の拡大が進行していたと推定される。

沈線文土器群の時期の貝塚は少なく、利根川下流域に千葉県城ノ台貝塚と東京内湾の夏島貝塚が知られているに過ぎない。城ノ台貝塚は沈線文土器群の田戸上層式～条痕文土器群の鵜ケ島台式土

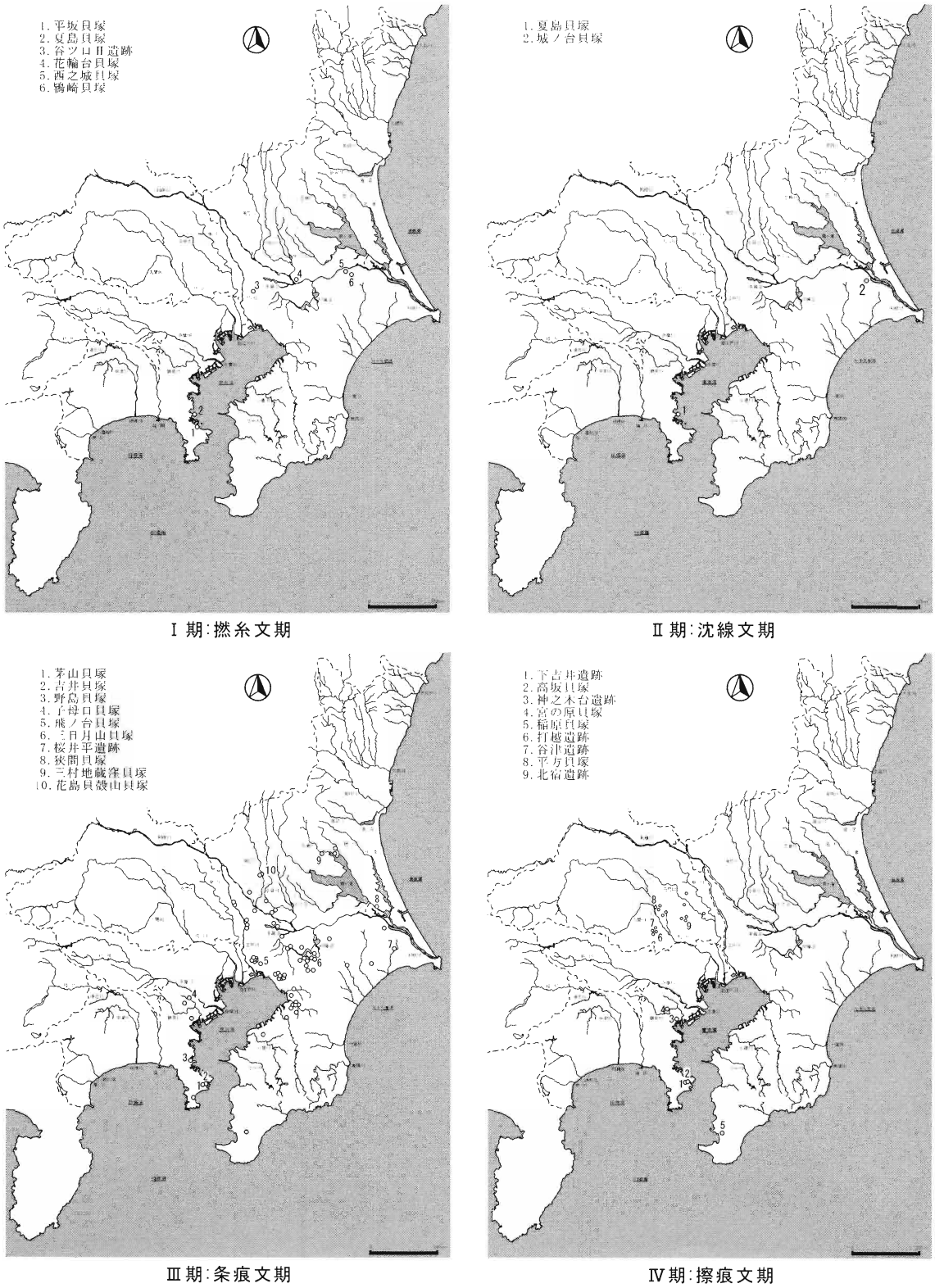
器にかけて形成された複数の貝層が存在し、第５層が田戸上層式期の貝層である。利根川下流域の撚糸文土器群の時期の貝塚がヤマトシジミを優先種としたのに対して、ハマグリ・マガキを優先種とし、オキシジミ、マテガイなどが見られ、その組成が大きく変化している。夏島貝塚では夏島式期の第１貝層が干潟群集種であるマガキ・ハイガイを優先種としたのに対して、田戸下層式期（第１混土貝層・第２貝層）では優先種はハマグリ・アサリ・オニアサリなど内湾砂質底群集に変化している。沈線文土器群の時期には、利根川下流域、東京湾湾口部において海進初期に出現した海域環境が大きく変化していたことと思われる。

条痕文土器群の時期には貝塚数が急増し、その分布域は利根川流域、東京内湾とも大きく拡大し、新たに三浦半島南部や房総半島南部など東京外湾に面した貝塚、九十九里平野に面した貝塚が出現する。利根川流域の貝塚は下流域から霞ヶ浦北岸の高浜ノ入、小貝川・鬼怒川流域、印旛沼・手賀沼周辺に広く分布する。これらの貝塚の多くはハマグリ・ハイガイ・マガキ・オキシジミなど干潟群集種・内湾砂底群集種のいずれかを最優先種とする貝類組成であるが、分布域の最奥部の鬼怒川流域に存在する茨城県花島貝殻山貝塚などはヤマトシジミを主体としている。茨城県三村地蔵窪貝塚・狭間貝塚などは規模の大きな斜面貝層を形成するが、多くは竪穴住居址や炉穴、土坑などの中に廃棄された小規模な貝塚である。東京内湾では三浦半島東部から鶴見川周辺、江戸川流域、江戸川河口付近から小櫃川にかけての地域に広く分布する。三浦半島東部の神奈川県野島貝塚がマガキを主体として、コシダカガンカラ・イボニシ・カリガネエガイなど岩礁性の貝を組成する以外はハマグリ・ハイガイ・マガキ・オキシジミなど干潟群集種・内湾砂底群集種のいずれかを最優先種とする。西岸の神奈川県子母口貝塚、大口坂貝塚、野島貝塚がやや規模の大きな斜面貝塚を形成する。東京外湾に面する三浦半島南部の神奈川県茅山貝塚・吉井貝塚では、厚さ２mに達する規模の大きな斜面貝層が形成される。マガキ・ハイガイの干潟群集種を優先種として、サザエ・イボニシなど外海岩礁性群集種が組成し、魚類では沿岸回遊性のマダイ、内湾性のクロダイ・ボラなどが出土している。ともに種も豊富で貝類 40 種以上、魚類 20 種以上が検出されている。九十九里平野に面した地域では、桜井平遺跡で鵜ヶ島台式期の規模の大きな斜面貝層が形成されている。貝類組成はマガキ・ハマグリ・オキシジミなど干潟群集種・内湾砂底群集種が優先種であるが、魚類ではイルカ類・カツオ類・サメ類・エイ類など外洋性の種が検出されている。

擦痕文土器群の時期には以前の時期の分布域に加えて、大宮台地から荒川流域の武蔵野台地東縁に貝塚が形成される。武蔵野台地に位置する埼玉県打越遺跡、谷津遺跡は打越式期、北宿遺跡は下吉井式期で、埼玉県山室遺跡、平方貝塚なども擦痕文土器群の時期でよいと思われる。他の貝塚は詳細な時期認定の難しく、埼玉県篠山貝塚などは茅山上層式の新しい段階までさかのぼる可能性がある。この地域の貝塚の多くは茅山上層式の新しい段階以降擦痕文土器群の時期を中心に形成されたものと思われる。貝類組成は荒川流域の貝塚群はヤマトシジミを主体とし、他はマガキ・ハイガイ・オキシジミなど干潟群集種・内湾砂底群集種が優先種である。



第１図　関東地方における縄文時代早期の貝塚を伴う遺跡の分布



I 期:撚糸文期　　II 期:沈線文期

III 期:条痕文期　　IV 期:擦痕文期

第２図　縄文時代早期における貝塚を伴う遺跡の分布の変化

３．神奈川県の縄文時代早期の貝塚

神奈川県において確実に縄文時代早期に形成された貝塚は13遺跡を数えるが、ひとつの遺跡の中でも貝層が複数の地点に分かれ、複数の時期の貝層が重層していることが多い。地理的な分布に偏在が認められ、三浦半島南部の東京外湾に面した地域、半島東部の東京内湾に面した地域、鶴見川周辺に分布する海域環境の異なる３群が存在する。これらの時間的･空間的分布を表１に示したが、同一遺跡内において連続する土器型式に属する貝層も含めて30の貝層が存在することになる。

三浦半島南部に存在する貝塚は岩井口貝塚・茅山貝塚・吉井貝塚・下吉井遺跡・高坂貝塚で、貝層の形成時期は条痕文土器群後半と擦痕文土器群末葉の時期に限られる。茅山貝塚・吉井貝塚が茅山下層式～茅山上層式期、岩井口貝塚が条痕文期、下吉井遺跡、高坂貝塚が下吉井式期である。岩井口貝塚が炉穴内に廃棄された小貝塚である以外、規模の大きな斜面貝層を形成し、マガキ・ハイガイなどの干潟群集種を優先種として、外海岩礁性種が組成する。下吉井遺跡は貝がわずかに検出されているだけで、詳細は不明である。

三浦半島東部に存在する貝塚は平坂貝塚・夏島貝塚、野島貝塚で、貝層の形成時期は断続的ではあるが撚糸文土器群～条痕文土器群の時期にわたり、規模の大きな斜面貝層を形成している。平坂貝塚は東貝塚純貝層と西貝塚混土貝層が夏島式期、西貝塚純貝層が平坂式期である。夏島貝塚は明治大学によって発掘調査が行われた第１貝塚とその西方に位置する第２貝塚が存在するが、ともに重層した複数の貝層が存在している。第１貝塚第１貝層は夏島式期、第１混土貝層と第２貝層は田戸下層式期、第２混土貝層は子母口式期、第３貝層は野島式～茅山下層式土器のいずれかの時期に形成されたものである。第２貝塚は露出した断面で少なくとも３層の貝層が認められ、周辺から採集されている土器から田戸上層式～鵜ケ島台式土器にかけての時期に形成された可能性が高い。野島貝塚は南貝塚が野島式期、東貝塚が茅山下層式期、北貝塚は条痕文期である。夏島貝塚の夏島式期の貝層はマガキ・ハイガイなど干潟群集種に感潮域群集種であるヤマトシジミが組成するが、平坂貝塚の同時期の貝層はほとんどがマガキで占められ、ハイガイなど他種はきわめて少ない。平坂貝塚の平坂式期の貝層もマガキを優先種とするが、夏島貝塚の田戸下層式期の貝層はハマグリ・アサリ・オニアサリなど内湾砂底群集が優先種でマガキ・ハイガイはきわめて少ない。野島貝塚の野島式期の貝層はマガキを優先種とするが、ハイガイがきわめて少ないことが注意される。

鶴見川周辺に存在する貝塚は大口坂貝塚・神之木台遺跡・宮の原貝塚・権田原遺跡・子母口貝塚で、貝層は条痕文土器群～擦痕文土器群の時期にきわめて断続的に形成される。権田原遺跡が炉穴内に廃棄された小貝層で、他の遺跡は斜面貝層を形成するが、三浦半島の貝塚と比べて規模は小さく、また混土率も高いと考えられる。詳細が不明な貝塚が多いが、マガキ・ハイガイなど干潟群集種を優先種とする貝塚（子母口貝塚・宮の原貝塚・神之木台遺跡Ａ貝層）とハマグリ・アサリ・シオフキなど内湾砂底群集種を優先種とする貝塚（大口坂貝塚・神之木台遺跡Ｂ貝層）が存在する。内湾砂底群集種を優先種とする貝塚は東京内湾に面する貝塚に限られる。

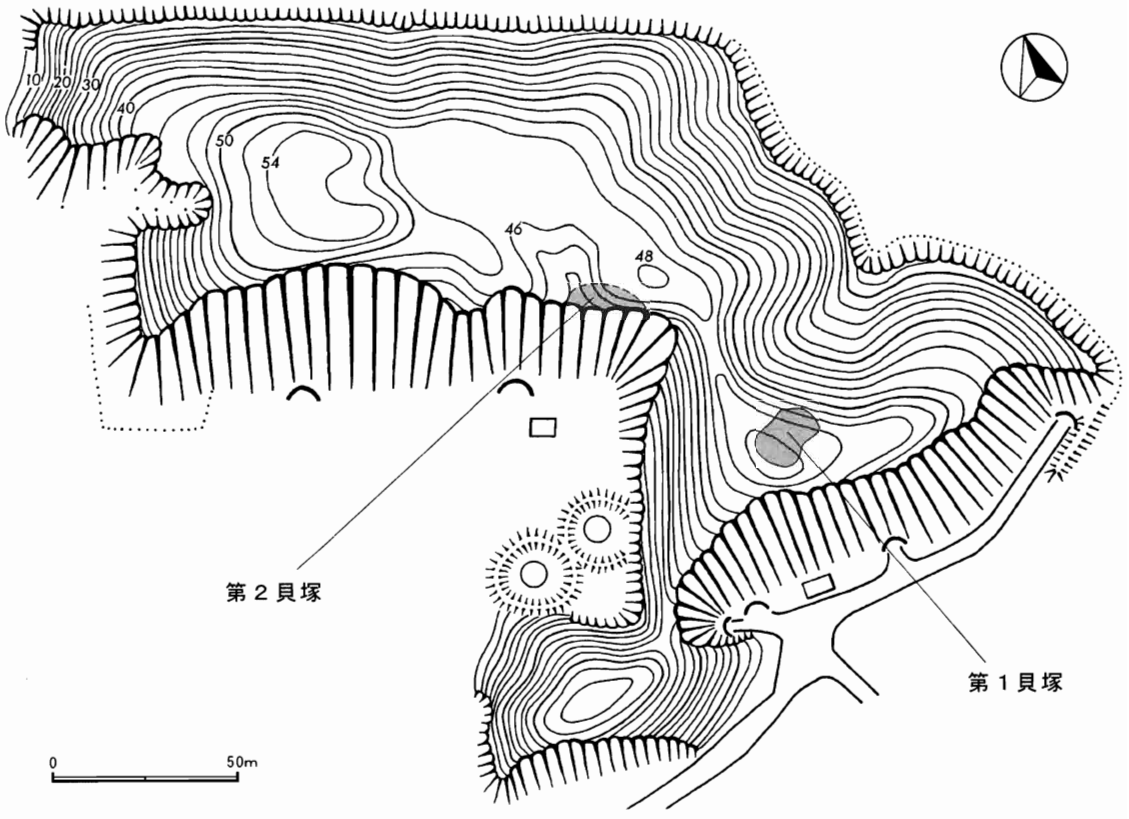
表１　神奈川県における縄文時代早期貝層の地理的・時間的分布

エリア	型式群・土器型式 / 貝塚名・地点・層位			Ⅰ期：撚糸文土器群					Ⅱ期：沈線文土器群			Ⅲ期：条痕文土器群					Ⅳ期：擦痕文土器群					
				井草・大丸	夏　島	稲荷台	大浦山	平　坂	三　戸	田戸下層	田戸上層	子母口	野　島	鵜ケ島台	茅山下層	茅山上層	＋	＋	＋	打　越	神之木台	下吉井
三浦半島南部	岩井口貝塚	炉　穴										↔	↔	↔	↔	↔						
	茅山貝塚		下部貝層												○							
			上部貝層													○						
	吉井貝塚	第１貝塚	下部貝層													○						
		第２貝塚	下部貝層													○						
	下吉井遺跡																					○
	高坂貝塚	Ｂ貝塚	下部貝層																			○
三浦半島東部	平坂貝塚	西貝塚	混貝土層		○																	
			純貝層					○														
		東貝塚			○																	
	夏島貝塚	第１貝塚	第１貝層		○																	
			第１混土貝層							○												
			第２貝層							○												
			第２混土貝層								↔	↔										
			第３貝層										↔	↔	↔							
		第２貝塚	第１貝層								↔	? ↔										
			第２貝層									↔	? ↔									
			第３貝層										↔	? ↔								
	野島貝塚	南貝塚											○									
		東貝塚													○							
		北貝塚											↔	↔	↔							
鶴見川周縁	大口坂貝塚											○										
	神之木台遺跡		Ｂ貝層																		○	
			Ａ貝層																			○
	宮の原貝塚	北貝塚	第３貝層														○					
	権田原遺跡	炉　穴										↔	↔	↔	↔	↔						
	子母口貝塚	Ａ貝塚																				
		Ｂ貝塚																				
		Ｃ貝塚																				
		Ｄ貝塚										○										

４．海進初期の貝塚－夏島貝塚の夏島式期の貝層－

夏島貝塚は第１貝塚と第２貝塚の２地点に分布し（第３図）、おのおの複数の時期の貝層が重層して存在している（第４図）。第１貝塚最下層の第１貝層が夏島式土器の時期に形成されたもので、井草式土器を出土した千葉県西之城貝塚に次ぐ海進初期に相当する時期の貝層である。第１貝層上には第１混土貝層、第２貝層、第２混土貝層、第３貝層が堆積するが（第４図）、安定した土器の包含状況、各貝層から出土する貝を含む動物遺存体にはおのおの特徴的な変化が存在することから、貝層の残された地形の傾斜が緩やかなこととあわせて、各貝層は下部堆積層からの混入が少ない良好な包含状況を示していたと考えられる。

第１貝塚第１貝層はマガキ・ハイガイを圧倒的優先種とするものであるが、調査区のある部分では貝層内の堆積状況に細かな変化が認められ、最上層では褐色をおびた混貝土層、以下 10～15 cmの炭化物を多く含む貝層、約 30 cmのカキ貝層、約 10 cmの腐食土混じりの貝層、10～15 cmのシジミを比較的多く含有するカキの貝層が存在したことが報告されている。また、第１貝層下にヤマトシジミの小ブロックが存在したことが岡本勇によって指摘されていることから、夏島貝塚において海進初期に採取された貝類の主要種組成はヤマトシジミ→マガキ・ヤマトシジミ→マガキ・ハイガイといった変化が想定される。同時期の平坂貝塚（東貝塚）の貝層はほとんどマガキだけで構成されて



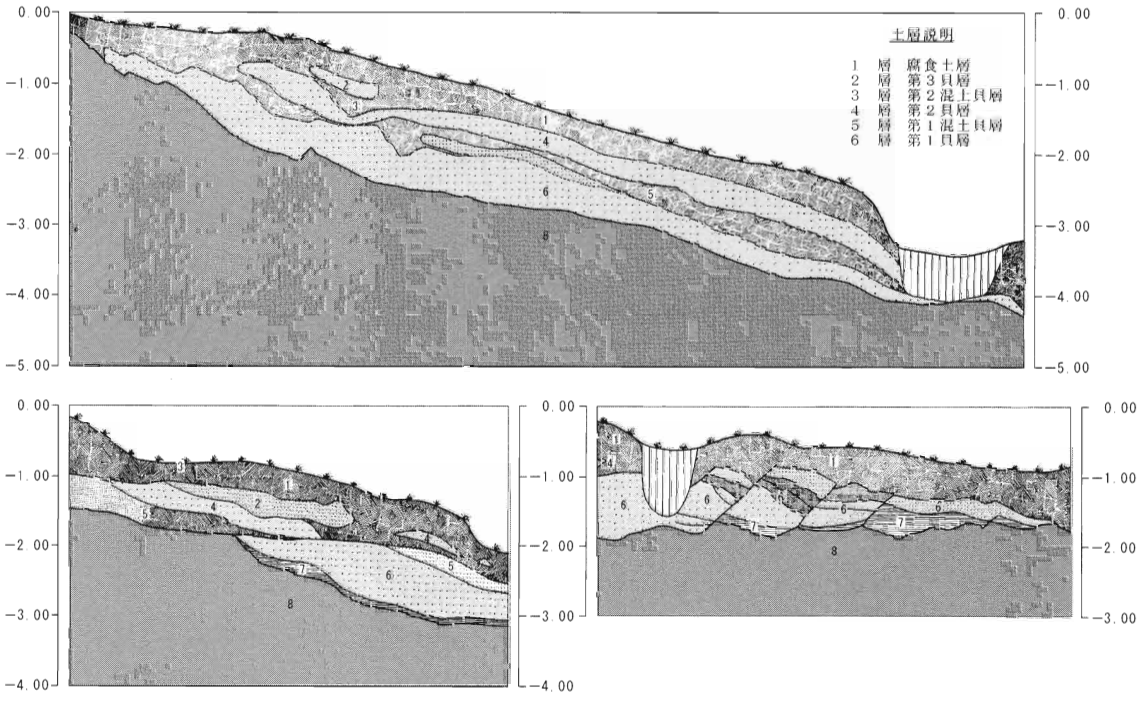
第３図　夏島貝塚の地形と貝層の分布（岡本, 1978を一部改変）

いるといってよいもので、利根川下流域の撚糸文土器群の貝塚がその後半期の花輪台貝塚、鴇崎貝塚でもヤマトシジミを優先種としているのに対して大きな差異を示している。これは陸水の供給の豊富な利根川下流域の海域環境に対して、陸水の供給のない小規模な谷底平野に出現した海域において汽水域から干潟域へ環境変化が急速に進んだことを示していると思われる。

出土した魚類は外洋回遊性のマグロ・カツオ、沿岸回遊性のマダイ、内湾性のクロダイ・ボラなどが多く、漁労対象海域はかなり広範にわたっていたものと思われる。しかしながら、これらがすべて一時期の漁労対象ではなく、外洋水のより大きな影響を受けるなどの海域環境変化に伴う時間を異ならせたものだった可能性も考えられる。また、骨製の釣針、釣針未製品、ヤス先あるいは磯ガネなどの用途を想定させる骨角器類（第７図）が出土していることは、厚く堆積した貝層とともに海産資源へ依存度の高さが伺える。

出土した陸棲哺乳類ではイノシシ・タヌキ・ノウサギが多く、ニホンジカが少ない。また、キジ・ヨシガモなど鳥類が多く出土している。三浦半島の他の貝塚では鳥類はきわめて少ないことから、これらの現象は夏島式期の狩猟活動の大きな特徴となっている。

同時期の平坂貝塚（東貝塚）でも夏島貝塚出土の骨製釣針と近似した形状・大きさの釣針が採集されているが、三浦半島東部に生活の場を求めた集団は東京内湾の湾口部に出現した海進初期の海域環境とその急激な変化の中で、海域環境を含む自然への知識の深化とともに、漁具と漁労技術を発展させて完成度の高い漁労文化を成立させていったものと考えられる。

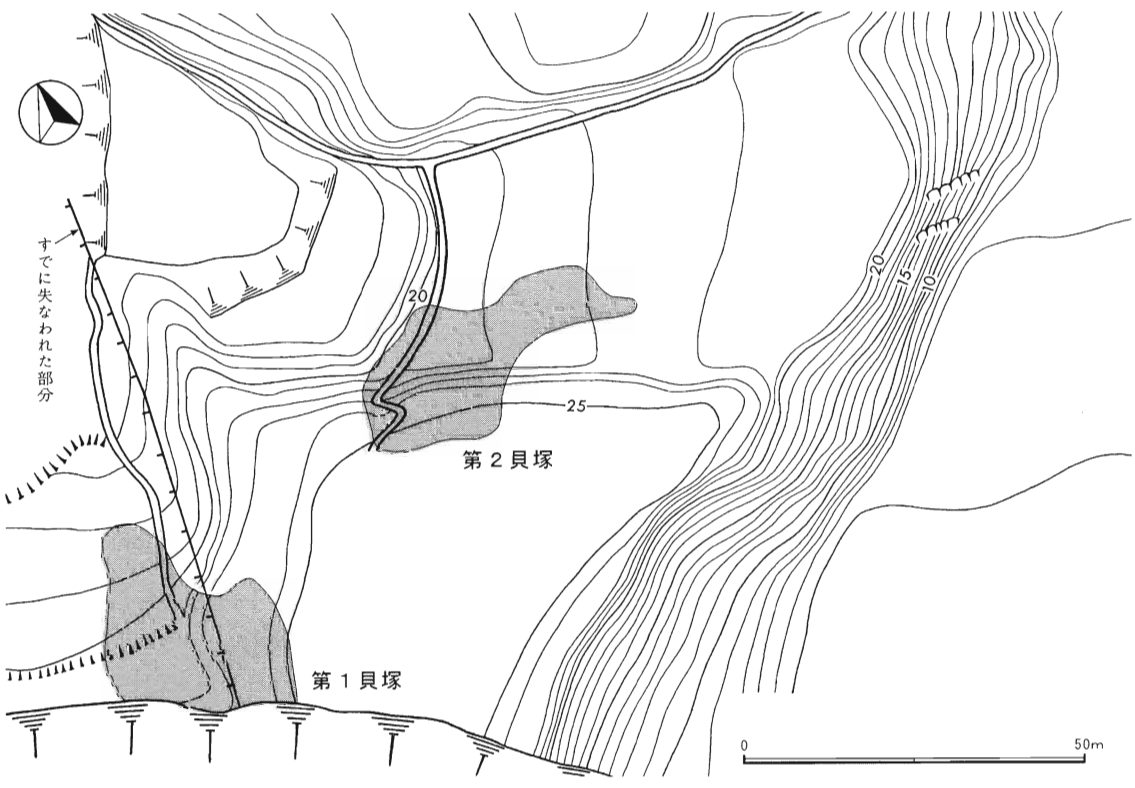


第４図　夏島貝塚（第１貝塚）の貝層堆積状況（杉原・芹沢，1957を一部改変）

5．海水面上昇期の貝塚－吉井貝塚の茅山上層式期の貝層―

吉井貝塚は第１貝塚と第２貝塚の２地点に分布し（第５図）、おのおの混貝土層を挟んで下部貝層と上部貝層が存在する（第６図）。上部貝層は縄文時代中期後半の貝層で、第１貝塚と第２貝塚の下部貝層が早期後半の茅山上層式土器の時期に形成された貝層である。第１貝塚下部貝層の方が貝層の発達がよく、最も厚いところで約２ｍの層厚を持っている。第１貝塚下部貝層出土土器は口縁部文様帯を持ち、沈線文、刺突文などで格子目文、連続山形文などのモチーフが描かれるものが存在するが、第２貝塚下部貝層ではそのような土器は少なく、波状口縁が発達して刺突文列による文様が描かれる土器が多い。茅山上層式土器でも前者より後者の様相が新しいものと考えられる。

第１貝塚下部貝層を構成する貝はマガキが圧倒的な優先種で、同じ干潟群集種のハイガイ、内湾砂底群集種のハマグリ・オキシジミ・アサリ、外海岩礁性群集種のサザエ・カリガネエガイ・レイシなどで組成されていた。貝層の下部と上部で貝類組成・大きさなどに変化が認められ、貝層下部では大型のマガキが多く、伴出する種も豊富でその大きさも比較的大きく、貝層上部となると大型のマガキは稀になり、ハマグリ・アサリなどは減少し、特にハイガイが目立って減少したこと、この現象は第１貝塚下部貝層全体を通して観察されたことが報告されている。第２貝塚下部貝層の貝類組成はマガキが 88.42%で圧倒的優先種、イガイが 3.78%、スガイが 2.43%で準優先種を構成しているが、ハイガイ、アサリ、ハマグリは出現率 0.33%、0.30%、0.20%できわめて少ない。マガキの殻高は4.92～17.40ｃｍの範囲に分布し、7.00～11.00ｃｍの個体が多く、第１貝塚下部貝層のサン



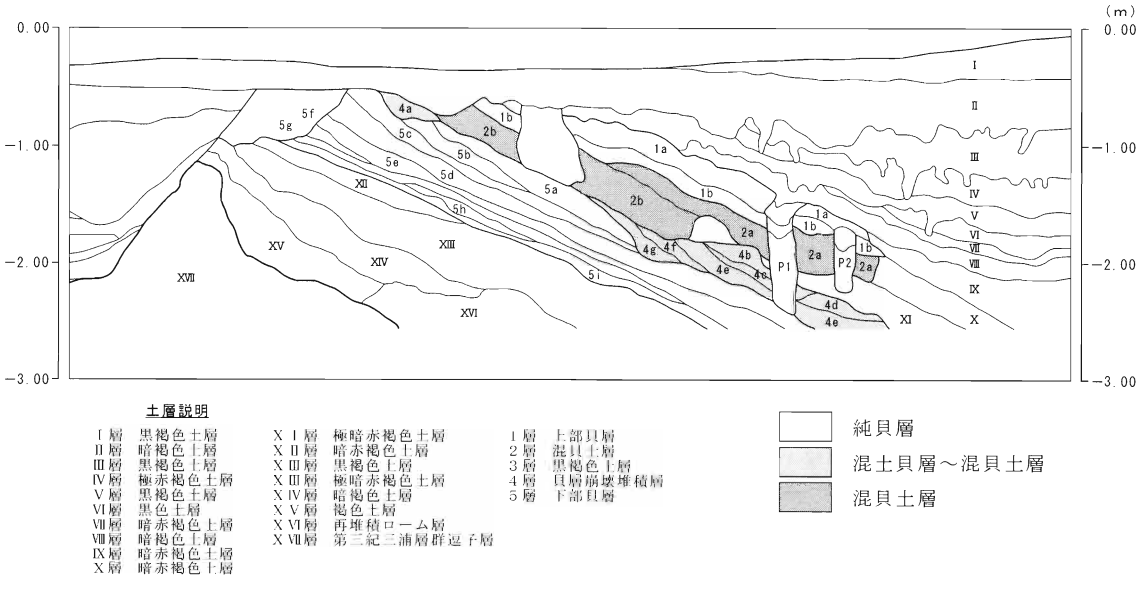
第５図　吉井貝塚の地形と貝層の分布（神奈川県, 1978を一部改変）

プルと比べて小型である。第２貝塚下部貝層の貝類組成・大きさの様相は第１貝塚下部貝層の上部の様相と近似し、これは茅山上層式土器の変化とも対応するもので、第２貝塚が時間的に遅れて形成されたことを示しているものと思われる。

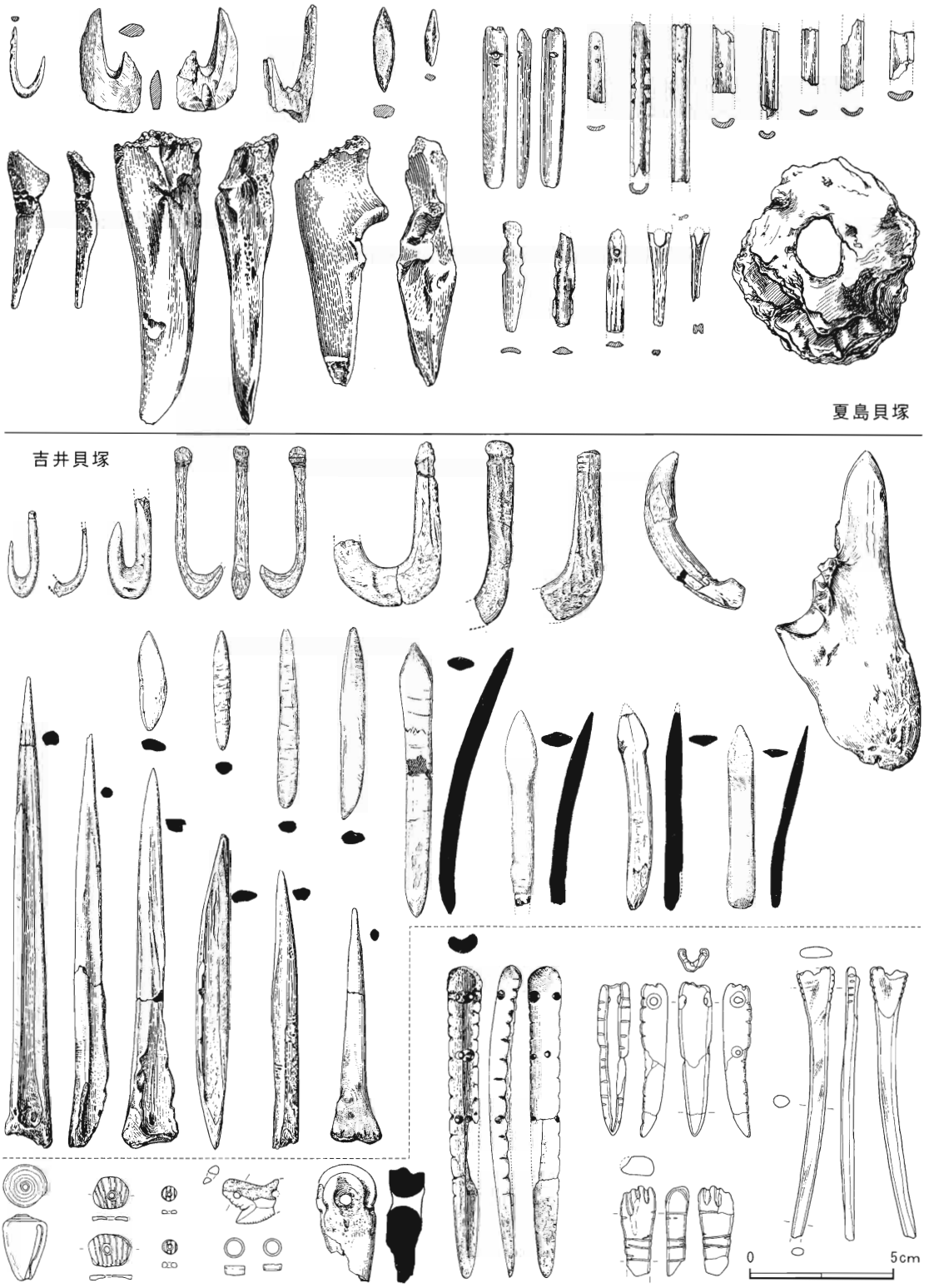
第１貝塚下部貝層から出土した魚類は沿岸回遊性のマダイ、内湾性のクロダイが圧倒的に多く、他にボラ・スズキなど28種が検出されている。第２貝塚下部貝層ではボラが約36%で最も多く、マダイが約26%、クロダイが約14%で、サバ属、イワシ類、スズキ、アジ属がこれらに次いでいる。第１貝塚と第２貝塚の差異はサンプリングの問題で、マダイ・クロダイ・ボラが多く捕獲されていることは共通しているが、マダイ・クロダイの頭骨は第１貝塚下部貝層のサンプルと比較して小型であることが指摘されている。第２貝塚下部貝層の細分層ではマダイとボラの出現率が逆転する現象がみられたことは、捕獲時期、捕獲手段などの変化を示している可能性がある。

吉井貝塚に隣接する茅山貝塚は茅山下層式期、茅山上層式期の貝層が形成されるが、漁具の出土例は少ない。それに対して、吉井貝塚第１貝塚下部貝層では大きさの分化した釣針・刺突具、組合式釣針、組合式刺突具と考えられるペン先形角器など豊富な骨角器（第７図）が出土している。これは海水面上昇期に平作川流域に出現した内湾とその周辺海域を漁労域とした集団の漁労体系の発展過程を示し、さらに第１貝塚下部貝層上部、第２貝塚下部貝層に見られる貝類組成の乏しさ、小型化、魚類の小型化などは捕獲圧の問題も含めてその終焉期の様相を示しているものと思われる。

また、吉井貝塚の早期の貝層からは、漁具など労働用具とともに髪針と考えられる頭部に線刻を持つ角製品、大小のサイズの側縁に線刻を持つ有孔角製品、牙製垂飾、頭部に穿孔されたイモガイ、ハイガイ製有孔小円盤、赤塗されたツノガイ輪切製品、イタボガキ・オオツタノハ・ベンケイガイ製貝輪など豊富な装身具（第７図）が出土しており、物質文化だけではなく精神文化の充実した漁労を中心とした社会生活が営まれていたと考えられる。



第６図　吉井貝塚（第２貝塚）の貝層堆積状況（野内・釼持他，1999を一部改変）



第７図　夏島貝塚第１貝塚第１貝層・吉井貝塚下部貝層出土の骨角器・貝製品

６．さいごに

神奈川県の縄文時代早期の貝塚の特徴は、特に三浦半島において海進初期から海水面上昇期にかけて規模の大きな貝塚が残されたことで、そこから得られる情報から高度に発達した漁労体系にもとづいて精神性豊かな文化が展開していたことを知ることができる。吉井貝塚に見られる八ツ崎Ｉ式土器、粕畑式土器など東海地方に分布する土器が多量に出土する現象も、このような社会基盤を前提としたものかもしれない。貝塚から得られる豊富な情報をもとに、複数の文化事象を総合的に検討することで、縄文文化がより具体的に描かれるものと思われる。

最後になりましたが、本稿をまとめるにあたり、小倉　均・斉藤弘道・西野雅人氏には多くのご教示をいただきました。感謝いたします。なお、夏島貝塚の第１貝塚・第２貝塚の名称は記述の便宜上仮称したもので、各貝塚の地点名称は神奈川県貝塚地名表（川口他，2008）に従った。

参考・引用文献

杉原荘介・芹沢長介　1957．神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚．明治大学文学部研究報告，第二冊．明治大学考古学研究室．

赤星直忠　1962．横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報（一）．横須賀市博物館研究報告（人文科学），第６号．横須賀市博物館．

岡本　勇　1978．夏島貝塚．神奈川県文化財図鑑　史跡名勝天然記念物篇．神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課．

岡本　勇　1978．吉井貝塚を中心とした遺跡．神奈川県文化財図鑑　史跡名勝天然記念物篇．神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課．

野内秀明・剣持輝久他　1999．吉井城山－神奈川県指定史跡「吉井貝塚を中心とした遺跡」史跡整備事業に伴う確認調査の記録－．横須賀市文化財調査報告書，第34集．横須賀市教育委員会．

川口徳治朗他　2008．神奈川県貝塚地名表．神奈川県立歴史博物館．

縄文時代前期

環状集落の成立と貝塚

松田光太郎

1．神奈川県内における縄文時代前期の貝塚数

『神奈川県貝塚地名表』(神奈川県立歴史博物館 2008)を参考に、神奈川県内の縄文時代前期貝塚を集成すると、やや不確実なものを含め77遺跡ほどある。その内訳は第1表に示した。土器の細別時期毎の数をグラフ化したものが第1図である。

時期的な数量推移を見ると、県内では前期初頭の花積下層式期から同前葉の関山式期にかけて一旦貝塚数が減少し、その後、前期中葉の黒浜式期にかけて増加し、諸磯式期にピークをむかえる。そして前期末葉の十三菩提式期には3例に激減する。東京湾沿岸(1都5県)貝塚では、花積下層式から関山式へかけて増加し、黒浜式期でピークを向かえ、諸磯式期に減少に転じ、十三菩提式期で激減するという傾向がみられ(松田 2006)、神奈川県ではピークの時期がやや遅れる傾向にある。

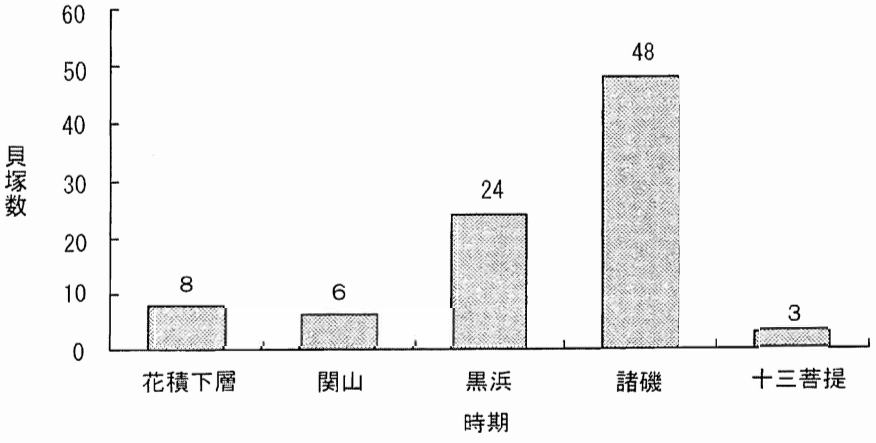
2．神奈川県内における貝塚分布と貝種組成

次に県内貝塚の分布を時期別に見てみる。貝塚分布は多摩川流域、鶴見川流域、帷子川流域、大岡川流域、三浦半島海岸部、相模湾沿岸部に分けられるので(川口 2006)、そうした地域別に見てみたい。また貝塚の貝種は周辺の自然環境を反映するので、貝種組成についても触れる。

前期初頭の花積下層式期(第2図)では、多摩川流域に2(新作八幡台貝塚等)、鶴見川流域に4(下組貝塚・北川貝塚・梶山貝塚・菊名貝塚)、帷子川流域付近に1、三浦半島に1貝塚がある。ほとんどがハマグリやハイガイなどの鹹水性貝類を主体とし、三浦半島の鴨居小学校内貝塚は岩礁性貝類に富む。

前期前葉の関山式期では多摩川流域に1、帷子川流域付近に3、三浦半島に1(茅山貝塚)、相模湾沿岸部に1貝塚(羽根尾貝塚)がある(第3図)。多摩川流域の有山台貝塚では汽水性のヤマトシジミ、帷子川流域に近い白幡浦島丘遺跡ではハイガイ・オキシジミ、三浦半島の茅山貝塚では岩礁性のスガイやアサリが主体をなす。相模湾沿岸の羽根尾貝塚では外洋性のダンベイキキサゴと汽水性のヤマトシジミが主体をなす。

前期中葉の黒浜式期で

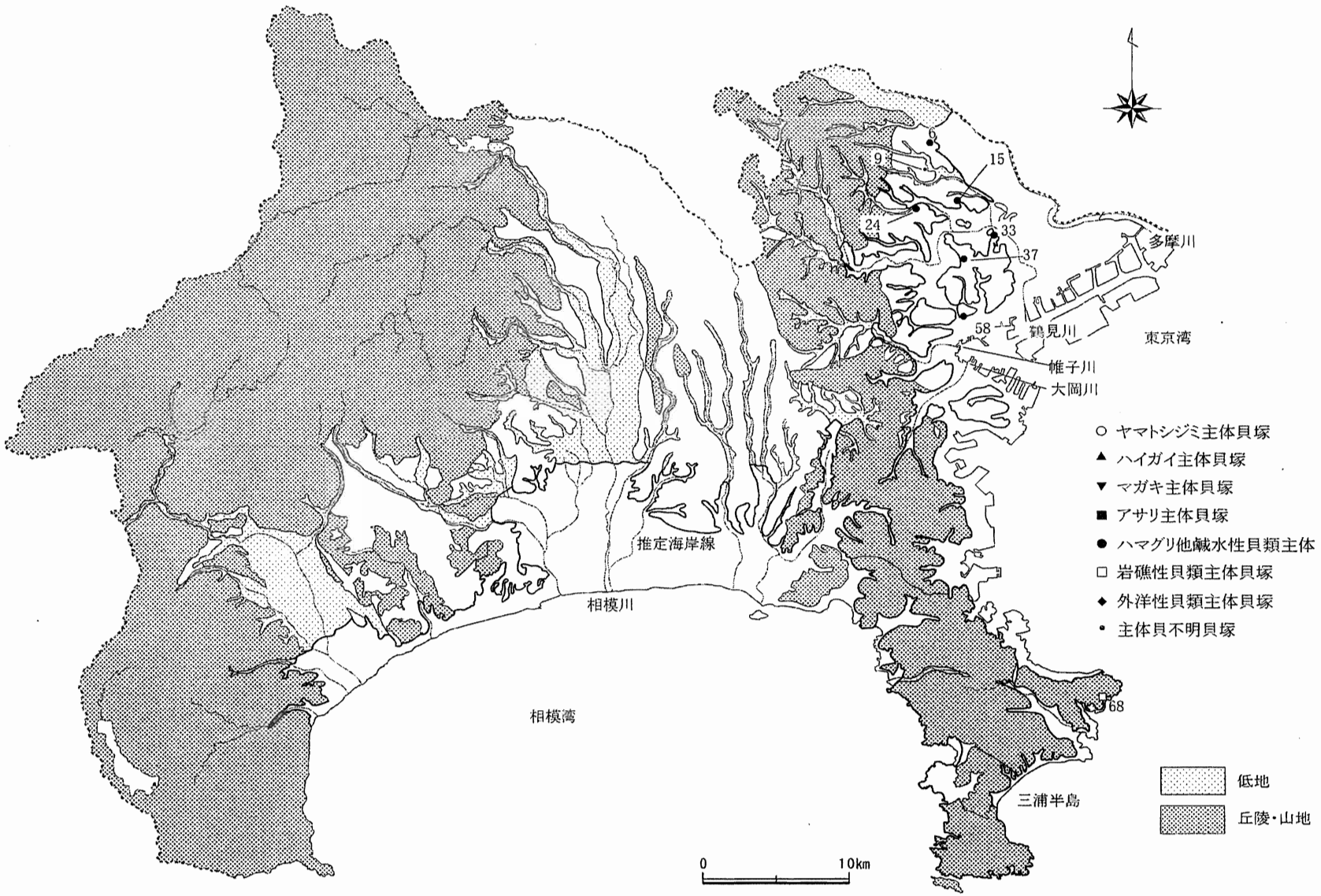


第1図　神奈川県内における縄文時代前期の貝塚数

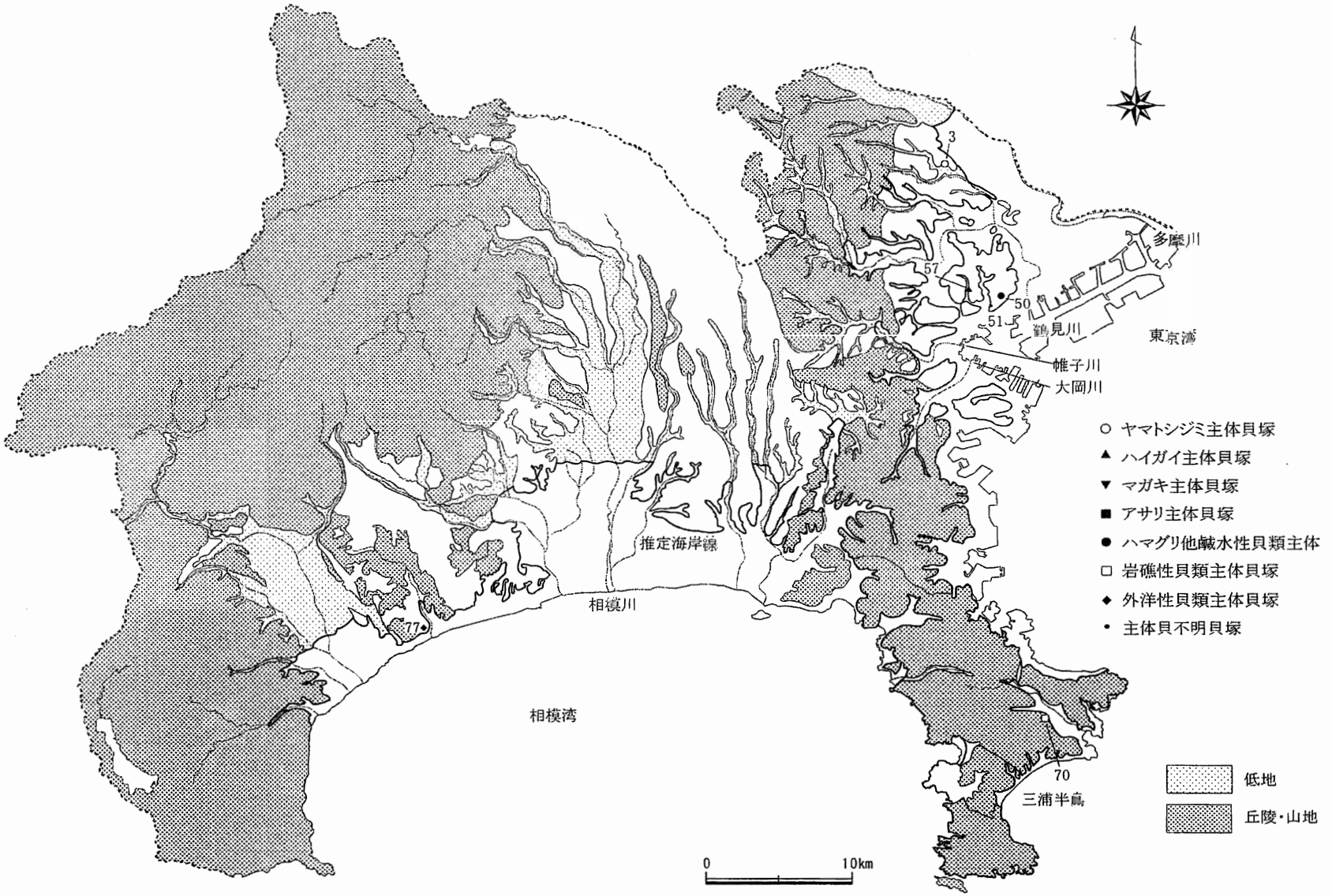
第１表　神奈川県内における縄文時代前期貝塚一覧

	市町村	遺跡名	貝塚の時期	立地・種別	主体貝種	魚類(種類数)	獣類	鳥類
1	川崎市	南加瀬	黒		ﾊﾏｸﾞﾘ			
2	川崎市	北加瀬金山	黒	台地(斜面)	鹹水性			
3	川崎市	有山台	関	台地(斜面)	ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ			
4	川崎市	伊勢山台	黒-諸	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ			
5	川崎市	影向寺台	諸b	台地	ﾊﾏｸﾞﾘ	外洋1 内湾6 淡水1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ	
6	川崎市	新作八幡台	花/諸	台地(斜面)	鹹水性/鹹水性	外洋3 内湾5/	ｲﾉｼｼ・ｼｶ	
7	川崎市	新作大原	諸b	台地(住居)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ			
8	川崎市	久本	諸a・b	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ｼｼﾞﾐ	内湾2	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ﾀﾇｷ等	
9	川崎市	野川東耕地	花	台地(斜面)				
10	川崎市	井田(北)	(前期)	台地(斜面)	鹹水性	内湾1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ﾉｳｻｷﾞ	
11	川崎市	井田(南)	諸	台地	鹹水性			
12	横浜市	宮ノ台	黒	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ			
13	横浜市	矢上下町	(前期)	台地(斜面)				
14	横浜市	矢上谷戸	諸a	台地	ﾊﾏｸﾞﾘ	内湾3	ｲﾇ・ｱｽﾞﾏﾓｸﾞﾗ	
15	横浜市	下組(西)(東)	花	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ｲｿｼｼﾞﾐ等	外洋4 内湾12 淡1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ｲﾇ等	ｷｼﾞ
16	横浜市	下田東	諸a	台地(住居)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ｶｶﾞﾐｶﾞｲ	内湾2	ｼｶ	
17	横浜市	下田西	諸	台地	鹹水性		ｼｶ	
18	横浜市	高田	諸a	台地(住居)	ﾊﾏｸﾞﾘ	外洋2 内湾1	ｲﾉｼｼ・ｲﾙｶ	
19	横浜市	箕輪	黒-諸	台地	ﾊﾏｸﾞﾘ		ｲﾉｼｼ・ｼｶ	
20	横浜市	駒林	黒-諸	台地	ﾊｲｶﾞｲ			
21	横浜市	南綱島	諸b	台地				
22	横浜市	南堀	黒/諸a	台地(斜・住)	ﾊｲｶﾞｲ・ｶｷ・ｵｷｼｼﾞﾐ・ﾊﾏｸﾞﾘ	内湾1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ	
23	横浜市	西ノ谷	諸a	台地(住・土)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｲｶﾞｲ・ﾏｶﾞｷ等	外洋2 淡水1	ｼｶ・ｲﾙｶ	
24	横浜市	北川	花/諸a・b	台地(住居)	鹹/ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｲｶﾞｲ等	外洋1 内湾5 /内湾3	ｼｶ・ｲﾇ等/ｲﾉｼｼ・ｲﾇ	ｷｼﾞ/
25	横浜市	茅ヶ崎	黒/諸a・b	台地(斜・住)	鹹水性 /鹹水性	内湾1 /内湾5	/ｲﾉｼｼ・ﾊｸﾁｮｳﾐ等	/ｶﾓ・ｽｽﾞﾒ
26	横浜市	境田	諸a	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｲｶﾞｲ			
27	横浜市	京塚	諸b	台地(土坑)	鹹水性			
28	横浜市	吉田貝塚	黒-諸	低地				
29	横浜市	新吉田町	諸b？		ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ			
30	横浜市	北新羽(新羽)	諸	台地	ﾊｲｶﾞｲ			
31	横浜市	折本	諸a・b	台地(住居)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｲｶﾞｲ・ﾏｶﾞｷ等		ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ﾃﾝ	
32	横浜市	折本西原	黒/十三	台地(住/土)	ﾏｶﾞｷ /ﾊｲｶﾞｲ・ﾏｶﾞｷ	/内湾1		
33	横浜市	梶山	花	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ	内湾4	ｲﾉｼｼ・ｼｶ	
34	横浜市	駒岡北	諸	台地(斜面)				
35	横浜市	駒岡	諸a-b	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ｵｷｼｼﾞﾐ	外洋1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ	
36	横浜市	師岡	黒/諸b	台地(斜面)	ﾊｲｶﾞｲ /ﾊｲｶﾞｲ	内湾1 /内湾2	/ｼｶ	
37	横浜市	菊名	花/諸	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｲｶﾞｲ・ｵｷｼｼﾞﾐ/	外洋1 内湾5/	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ﾉｳｻｷﾞ等	カモ/
38	横浜市	原谷	(前期)	台地	ｱｻﾘ			
39	横浜市	大豆戸	(前期)	台地				
40	横浜市	表谷(東)	諸a	台地(住居)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｲｶﾞｲ・ｵｷｼｼﾞﾐ			
41	横浜市	富士塚	黒-諸	台地(緩斜面)	鹹水性			
42	横浜市	篠原町八幡神社	諸	台地				
43	横浜市	下菅田	諸a・b	台地(斜・住)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｲｶﾞｲ	内湾1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ﾀﾇｷ	
44	横浜市	供養塔	諸a	台地(斜面)	鹹水性			
45	横浜市	上菅田(笹山)	黒-諸	台地(緩斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｲｶﾞｲ・ﾏｶﾞｷ			
46	横浜市	上末吉不動堂	黒？	台地	ﾊﾏｸﾞﾘ・ｶｷ・ﾊｲｶﾞｲ			
47	横浜市	上台	黒	台地(住居)	ﾊﾏｸﾞﾘ			
48	横浜市	寺ノ谷	黒-諸	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ｲﾎﾞｷｻｺﾞ	内湾1 /内湾1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ｷﾂﾈ等	
49	横浜市	風早台	諸a	台地	ﾊﾏｸﾞﾘ・ｷｻｺﾞ・ｱｶﾆｼ等		ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ｲﾙｶ	
50	横浜市	蕃神台(西)	関	台地(斜面)	鹹水性			
51	横浜市	入江町	関	台地(斜面)				
52	横浜市	東寺尾白幡神社	黒-諸	台地(斜面)	鹹水性			
53	横浜市	二本木	黒-諸	台地	鹹水性			
54	横浜市	東寺尾中台		台地	鹹水性			
55	横浜市	面滝	諸	台地(斜面)	ｱｻﾘ・ｷｻｺﾞ			
56	横浜市	大口台	十三	台地(斜面)				
57	横浜市	白幡浦島丘	関	台地(土坑)	ﾊｲｶﾞｲ・ｵｷｼｼﾞﾐ			
58	横浜市	白幡西	花	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ﾊｲｶﾞｲ	外洋2 内湾10 淡1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ｲﾙｶ等	
59	横浜市	鳥越町						
60	横浜市	仏向町	諸	台地	ﾊｲｶﾞｲ			
61	横浜市	横浜南太田	諸a	台地(住居)	ﾊｲｶﾞｲ			
62	横浜市	濃水ヶ丘	諸a・b	台地(斜・住)	鹹水性			
63	横浜市	南永田山王台	諸	台地(斜面)	鹹水性			
64	横浜市	元町	十三	台地(斜面)	ｱｻﾘ・ﾊﾏｸﾞﾘ			
65	横浜市	間門平台	諸a・b	台地(斜面)	ﾊﾏｸﾞﾘ・ｵｷｼｼﾞﾐ・ｶｶﾞﾐｶﾞｲ	外洋4 内湾13 淡1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ｸｼﾞﾗ等	
66	横浜市	横浜学園	諸	台地	ﾊｲｶﾞｲ			
67	横浜市	峰遺跡群隣接	諸b	台地	ﾊｲｶﾞｲ			
68	横須賀市	鴨居小学校内	花	低地	ﾏｶﾞｷ・ﾊｲｶﾞｲ・ﾚｲｼ	外洋1 内湾2 淡1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ｲﾙｶ	
69	横須賀市	高坂	黒	台地(斜面)	ﾁｮｳｾﾝﾊﾏｸﾞﾘ	外洋1 内湾1	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ｲﾙｶ等	
70	横須賀市	茅山	関	台地(住居)	ｽｶﾞｲ・ｱｻﾘ・ｺｼﾀﾞｶｶﾞﾝｶﾞﾗ	内湾2	ｼｶ・ｲﾙｶ	
71	三浦市	諸磯	黒/諸	台地(住居)	ｱﾜﾋﾞ・ｻｻﾞｴ等 /	外洋2 内湾8	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ｲﾙｶ等	
72	鎌倉市	荏柄天神前	諸b	低地				
73	藤沢市	立石	諸b	台地(住居)	鹹水性	内湾5	ｲﾉｼｼ	
74	藤沢市	遊行坂	黒？	台地(斜面)				
75	藤沢市	西方	黒	台地(住居)	ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	外洋1	ｲﾉｼｼ	
76	平塚市	万田	黒	台地(斜面)	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺ等	外洋2 内湾4	ｲﾉｼｼ・ｼｶ・ｲﾇ等	ﾃﾎｵﾄﾞﾘ・ｽｽﾞﾒ
77	小田原市	羽根尾	関/黒	台地(斜面)	ﾀﾞﾝﾍﾞｲｷｻｺﾞ・ﾔﾏﾄｼｼﾞﾐ	外洋1 /外洋1	ｲﾉｼｼ・ｲﾙｶ	カモ

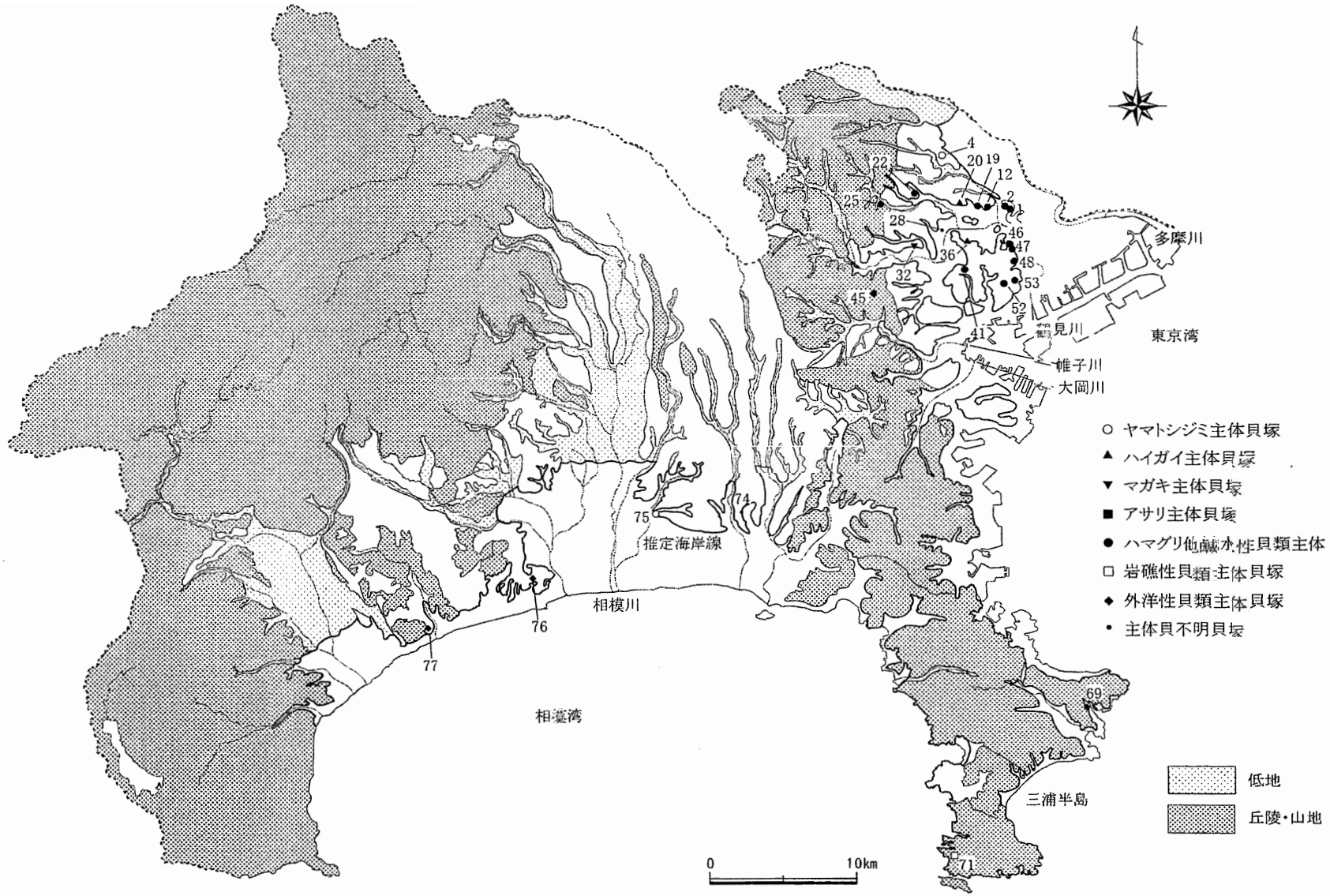
※1 貝塚の時期の項の太字は貝塚の時期が確実なもの。-はorまたはand、/はandを示す。
※2 貝塚の時期略称　花:花積下層、関:関山、黒:黒浜、諸:諸磯式、十三:十三菩提式
※3 魚類、外洋:外洋性魚類、内湾:内湾性・広域性魚類、淡水:淡水性魚類



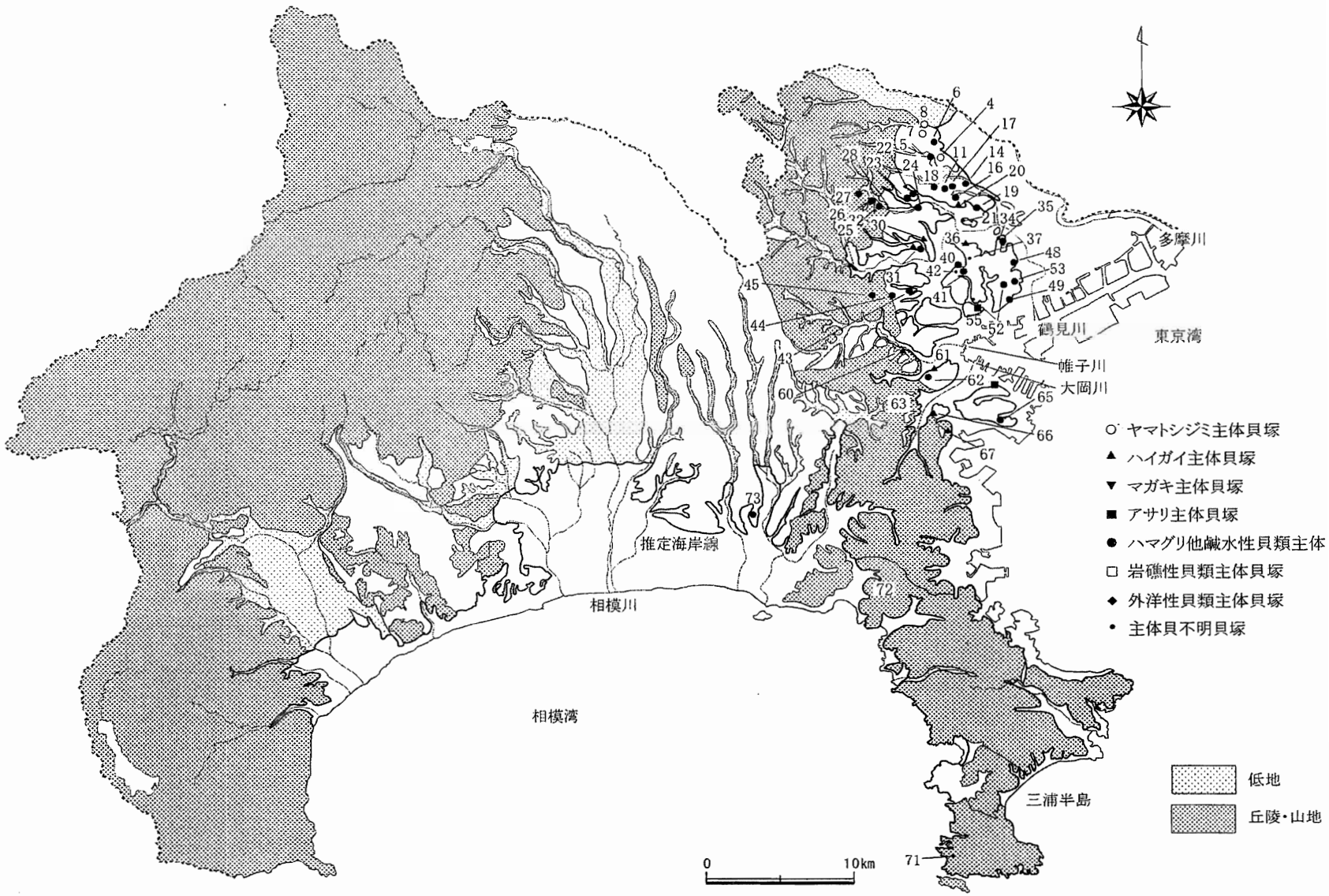
第2図　神奈川県内の縄文時代前期貝塚の分布（1）（前期初頭 花積下層式期）　推定海岸線は松島 2006 による。



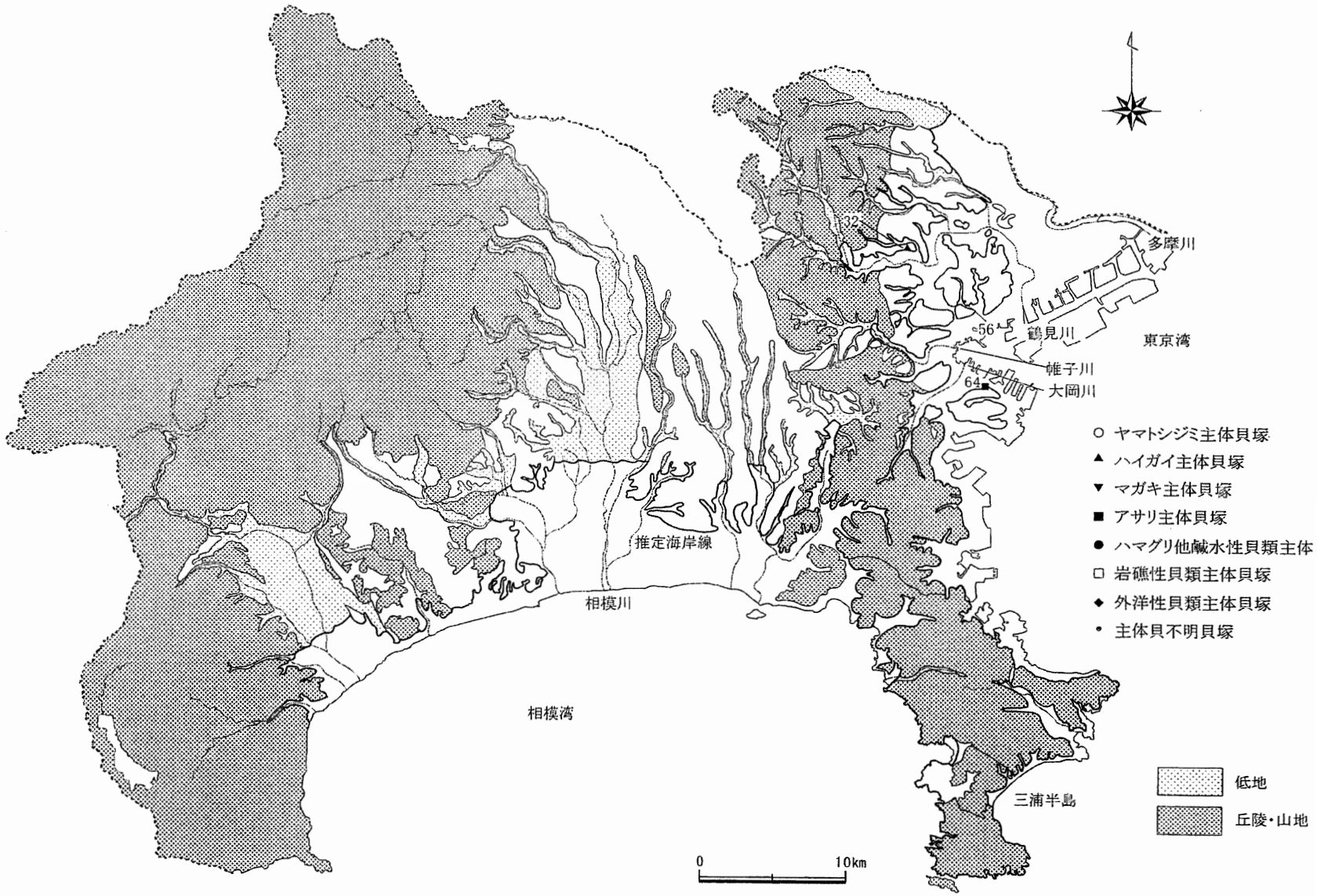
第３図　神奈川県内の縄文時代前期貝塚の分布（２）（前期前葉: 関山式期）



第4図　神奈川県内の縄文時代前期貝塚の分布（3）（前期中葉 黒浜式期）



第５図　神奈川県内の縄文時代前期貝塚の分布（４）（前期後葉 諸磯式期）



第６図　神奈川県内の縄文時代前期貝塚の分布（５）（前期末葉　十三菩提式期）

は鶴見川流域の貝塚が多く、南堀貝塚・茅ヶ崎貝塚・上台貝塚などがある(第4図)。諸磯式期に連続する貝塚が目立つ。ハマグリなどの鹹水性貝類を主体とするが、師岡貝塚ではハイガイ、折本西原遺跡ではマガキが主体をなしていた。三浦半島海岸部には高坂貝塚・諸磯貝塚があり、外洋、岩礁性貝類を主体とする。相模湾沿岸部では万田貝塚がダンベイキサゴ、羽根尾貝塚がダンベイキサゴ・ヤマトシジミ主体で、外洋性貝類が中心であるが、西方貝塚は汽水性ヤマトシジミを主体とする。ヤマトシジミの生息は湘南砂丘の最古砂丘列の形成が前期中葉に溯り、ラグーンが存在したことを示唆している(松田 1999)。

前期後葉の諸磯式期では諸磯ａ・ｂ式期の貝塚しかないが、多摩川・鶴見川流域に多い(第5図)。多摩川流域ではヤマトシジミを主体貝にもつ貝塚がある(新作大原貝塚等)。鶴見川流域では北川貝塚・南堀貝塚・西ノ谷貝塚・茅ヶ崎貝塚・折本貝塚といった規模の大きな貝塚を含め、多くの貝塚が濃密に分布する。貝種はハマグリ・ハイガイ・マガキ・オキシジミなどの鹹水性貝類からなるが、北新羽貝塚や師岡貝塚ではハイガイが目立っていた。また寺ノ谷貝塚や風早台貝塚ではイボキザゴが多かった。帷子川や大岡川流域ではハイガイ主体貝塚が多く、砂泥質の海浜環境の存在が予想される。三浦半島海岸部・相模湾沿岸部では貝塚の形成は低調で、確実なものは相模湾沿岸部での立石遺跡くらいである。前期末葉の十三菩提式期では貝塚が激減する(第6図)。鶴見川流域の折本西原遺跡にはハイガイ主体の貝層がある。元町貝塚では該期貝層は不明瞭で、主体は中期初頭である。

3．前期貝塚の立地と貝層の種類

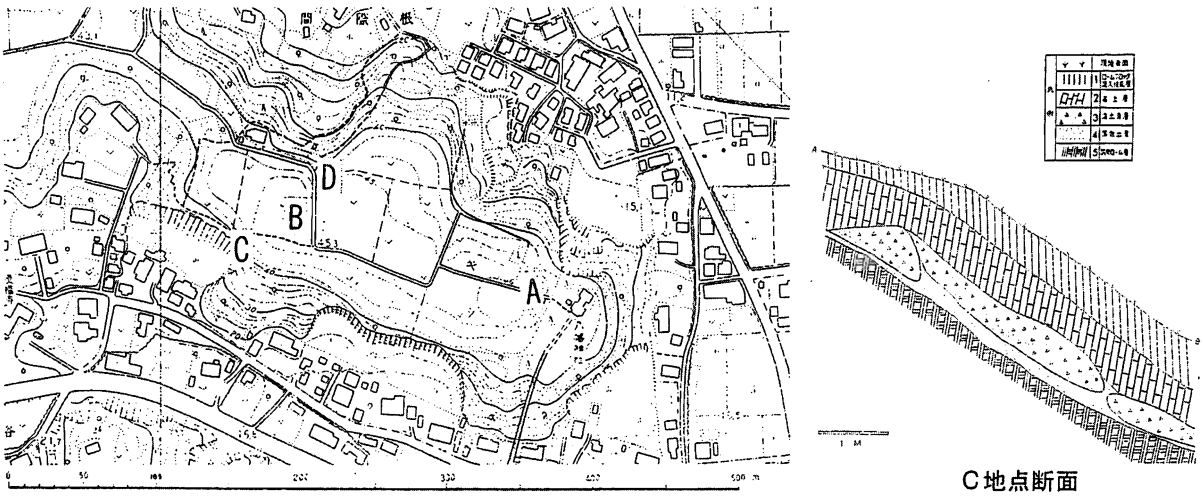
県内における縄文時代前期の貝塚の立地は大部分が台地上に位置する(第1表)。低地の貝塚は標高が6～12m位に位置する。縄文海進時の海面高度は現在より3～4m高いので、今後発掘調査によってその存在の有無を確認する必要がある。貝塚(貝層)の種別についてであるが、前期初頭は斜面貝層(新作八幡台貝塚・第7図1)が多い。前期前葉には斜面貝層の他に住居址内貝層(茅山貝塚・同図2)、土坑内貝層があり、前期中葉・後葉には住居址内貝層(同図3)が増加するが、斜面貝層(同図4)・緩斜面貝層もある。前期末葉は貯蔵穴と思われる土坑に入った土坑内貝層がある(第9図3)。

4．貝塚から見た縄文時代前期の生業

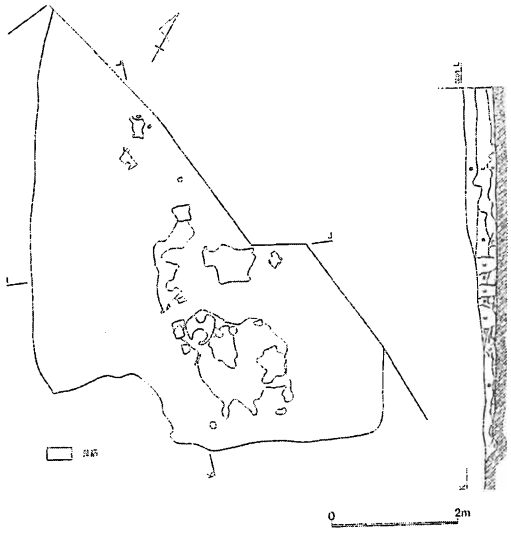
前期貝塚は後期貝塚に比べると獣魚骨の出土は少ない傾向にある。魚類では全時期通じてクロダイ・スズキといった内湾性魚類が多く獲られていた(第1表)。淡水魚類は少ない。マグロやマダイなどの外洋性魚類もあり、特に花積下層式期に多い傾向がある。花積下層式期に特徴的な大形釣針との関係が考えられよう。獣類はイノシシ・シカを中心にウサギ・タヌキなどの小動物、イルカ・クジラ(海獣)などを捕獲していた。イヌも出土している。鳥類は少なく、後期貝塚と異なる傾向と言える。

5．神奈川県内における環状集落の成立と貝塚

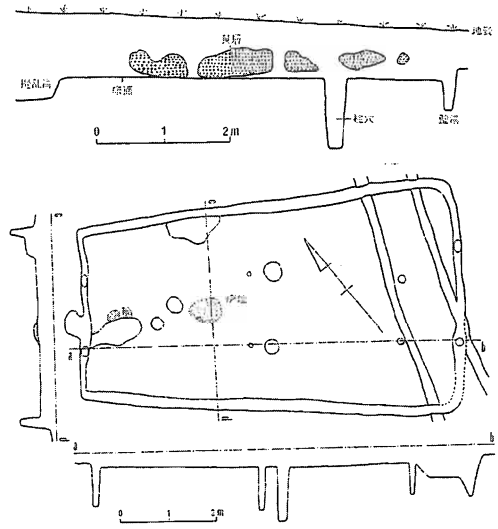
縄文時代前期は環状貝塚の成立期に当たる。前期初頭は相模原市下溝上谷開戸遺跡で環状集落の可能



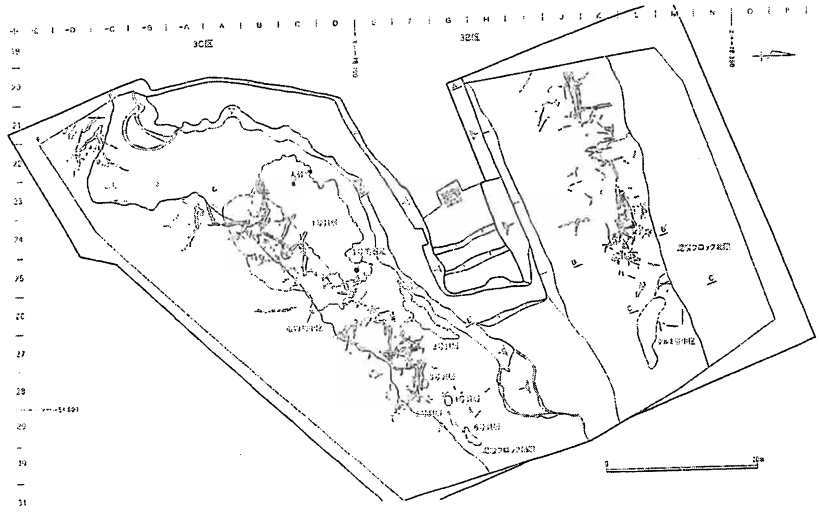
1．川崎市高津区新作八幡台貝塚（A・B：諸磯式期、C・D：花積下層式期）



2．横須賀市茅山貝塚　4号住居址（関山式期）

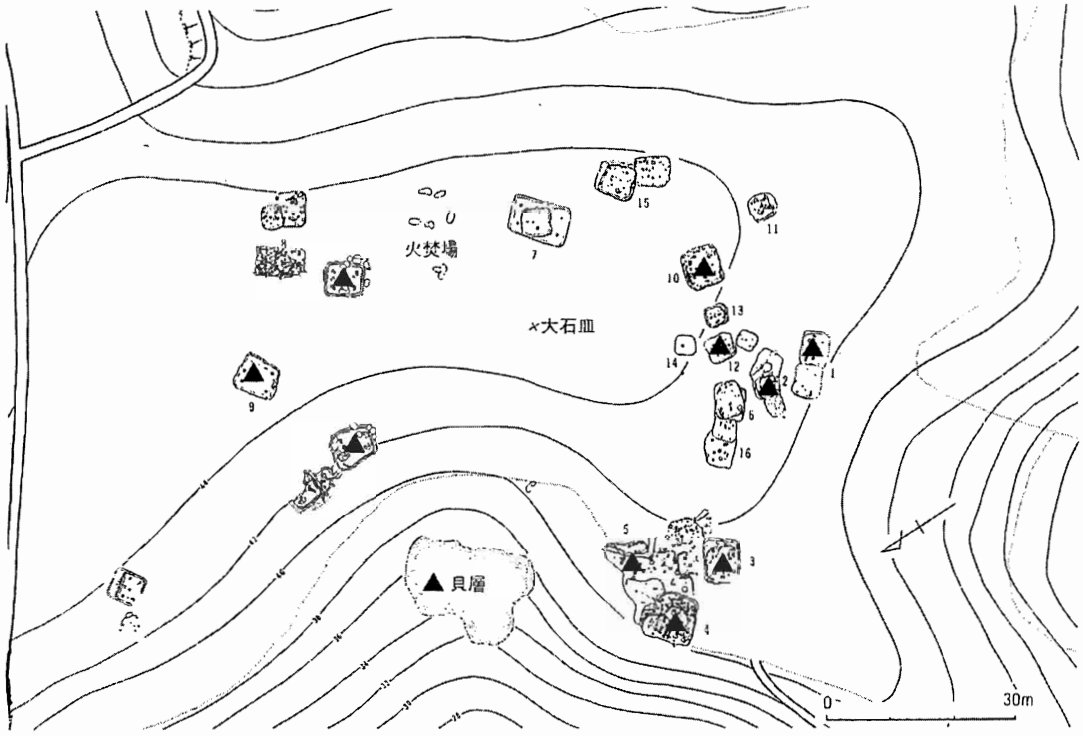


3．茅ヶ崎市西方貝塚（黒浜式期）

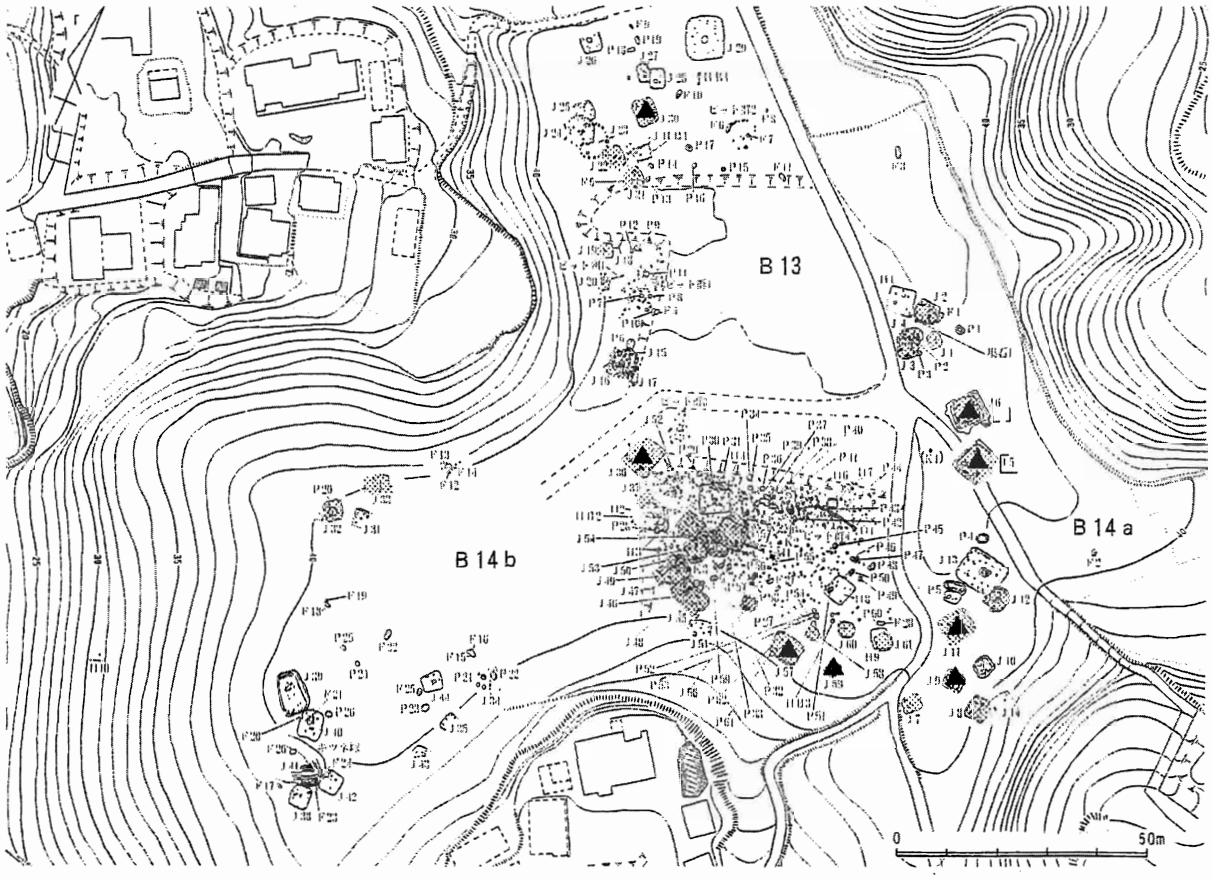


4．小田原市羽根尾貝塚
（関山式・黒浜式期）

第７図　神奈川県内の縄文時代前期貝塚（１）

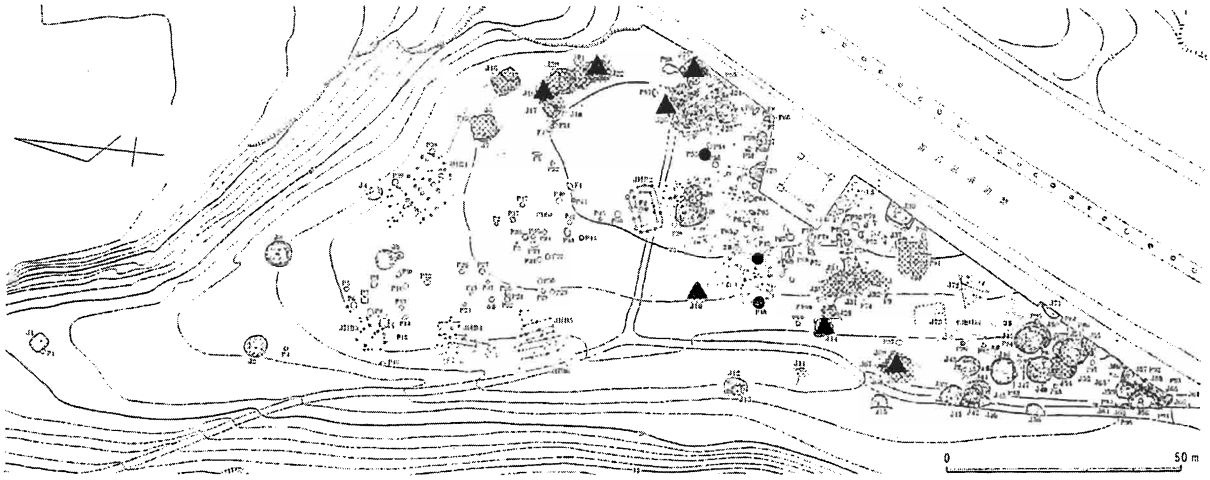


1．横浜市都筑区南堀貝塚（黒浜式・諸磯式期、▲：貝層）

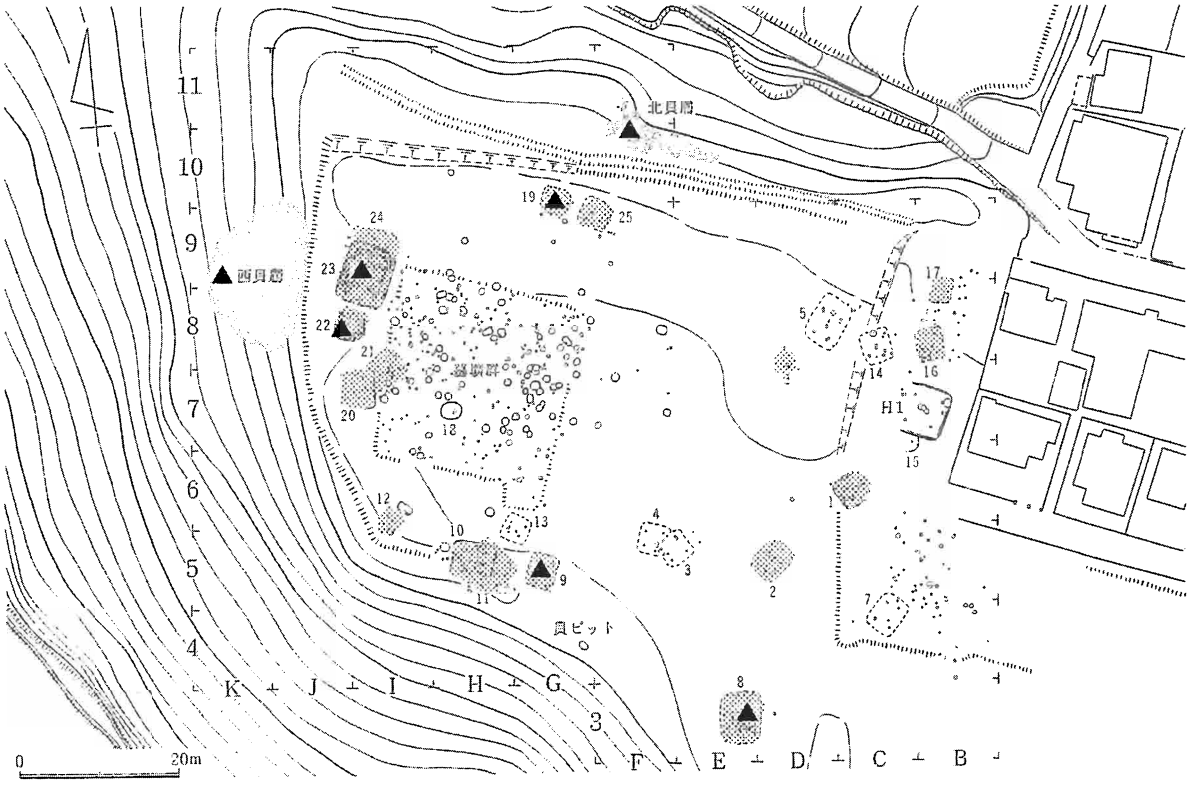


2．横浜市都筑区西ノ谷貝塚（網：諸磯式期、▲：貝層）

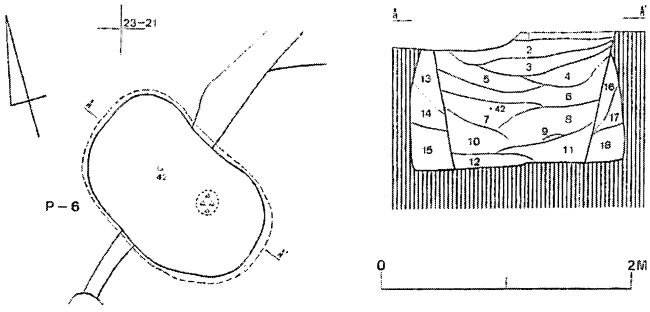
第８図　神奈川県内の縄文時代前期貝塚（２）



1．横浜市都筑区北川貝塚（網：諸磯式期、▲：貝層、●：墓壙）



2．横浜市都筑区茅ヶ崎貝塚（網：諸磯式期、▲：貝層）



3．横浜市都筑区折本西原遺跡
6号土坑（十三菩提式期）

第９図　神奈川県内の縄文時代前期貝塚（３）

性がある集落が見つかっているが、小規模な集落が多く、貝塚も斜面貝層が殆どで、北川貝塚で平坦地に築かれた住居址状の遺構面から貝層が検出された以外、集落との関係は明らかになっていない。前期前葉は茅山貝塚で住居址内貝層が検出されているが、県内集落は小規模なものが主で、横浜市能見堂遺跡では住居址が直線状配置をとる等、環状集落は未検出である。前期中葉は遺跡数が増え、小規模集落と住居址の多い拠点的集落があり、後者には広場を中心に半弧状に住居址が巡る環状集落が出現し(西ノ谷貝塚南西部、第８図２)、南堀貝塚では貝層も伴う(第８図１)。前期後葉も小規模集落と拠点的集落が存在し、後者には広場を中心に住居址が半弧状・環状に巡る環状集落がある。環状集落は内陸部では貝層は伴わないが(川崎市鷺沼遺跡)、海浜部では貝層を伴う(南堀貝塚、西ノ谷貝塚、茅ヶ崎貝塚　第９図２)。また北川貝塚は住居址が弧状に分布し、貝層が伴う(第９図１)。これら拠点集落の貝層を見ると南堀貝塚・茅ヶ崎貝塚では斜面貝層と住居址内貝層、西ノ谷貝塚・北川貝塚では住居址内貝層をもつ。住居址内貝層は集落内の度重なる居住の表れと評価できる。これらの遺跡では住居址分布が環状や弧状をなすので、貝層分布も環状や弧状をなす。また中央広場には墓域(墓壙)をもつ遺跡がある(茅ヶ崎貝塚・北川貝塚)。小規模集落では住居址内に貝層があるが、環状をなさない。前期末葉は住居址が減少し、集落も小規模のもののみとなる。前期後葉の拠点的集落も大部分が断絶する。茅ヶ崎貝塚は前期末葉に住居址と墓域は残るが、住居址は 2 軒で環状配置は崩れ、貝層もない。貝塚で明確なものは折本西原遺跡の土坑内貝層くらいである。海進が海退に転じ、海域環境が変化した事が貝塚減少の一要因と考えられる。

引用・参考文献

岡本　勇　1964『神奈川県西方貝塚』立教大学考古学研究室(茅ヶ崎市文化財資料集８に再録)

神奈川県立歴史博物館 2008『神奈川県貝塚地名表』

川口徳治朗 2006「神奈川県の遺跡調査をめぐる 30 年　縄文時代」『第 30 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』

坂詰秀一　1963『川崎市新作貝塚調査報告』川崎市文化財調査報告書２　川崎市教育委員会

坂本彰・中村若枝・忍沢成視他 2003『西ノ谷貝塚』横浜市ふるさと歴史財団

小宮恒雄・忍沢成視他 2001『茅ヶ崎貝塚』横浜市ふるさと歴史財団

小滝　勉・金子浩昌・中村若枝他 1988『折本西原Ⅰ』折本西原遺跡調査団

坂本　彰他 2007『北川貝塚』横浜市ふるさと歴史財団

佐藤明生・剱持輝久 1992『茅山貝塚』横須賀市文化財調査報告書 23　横須賀市教育委員会

武井則道他 2008『南堀貝塚』横浜市ふるさと歴史財団

戸田哲也・坪田弘子他 2003『羽根尾貝塚』玉川文化財研究所

松島義章　2006『貝が語る縄文海進－南関東＋２℃の世界』有隣堂

松田光太郎 1999「相模湾北部沿岸貝塚形成に関する考察」『神奈川考古』35　神奈川考古同人会

松田光太郎他 2001「神奈川県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会

松田光太郎 2006「縄文時代前期の東京湾における漁労の様相」『神奈川考古』42　神奈川考古同人会

渡辺誠・村田文夫 1956「川崎市新作Ｄ貝塚発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』２川崎市教育委員会

(図表の作成に際しては古川真弓・門間大輔氏の協力を得た。)

縄文時代　中期から晩期

環状集落と貝塚

中村若枝

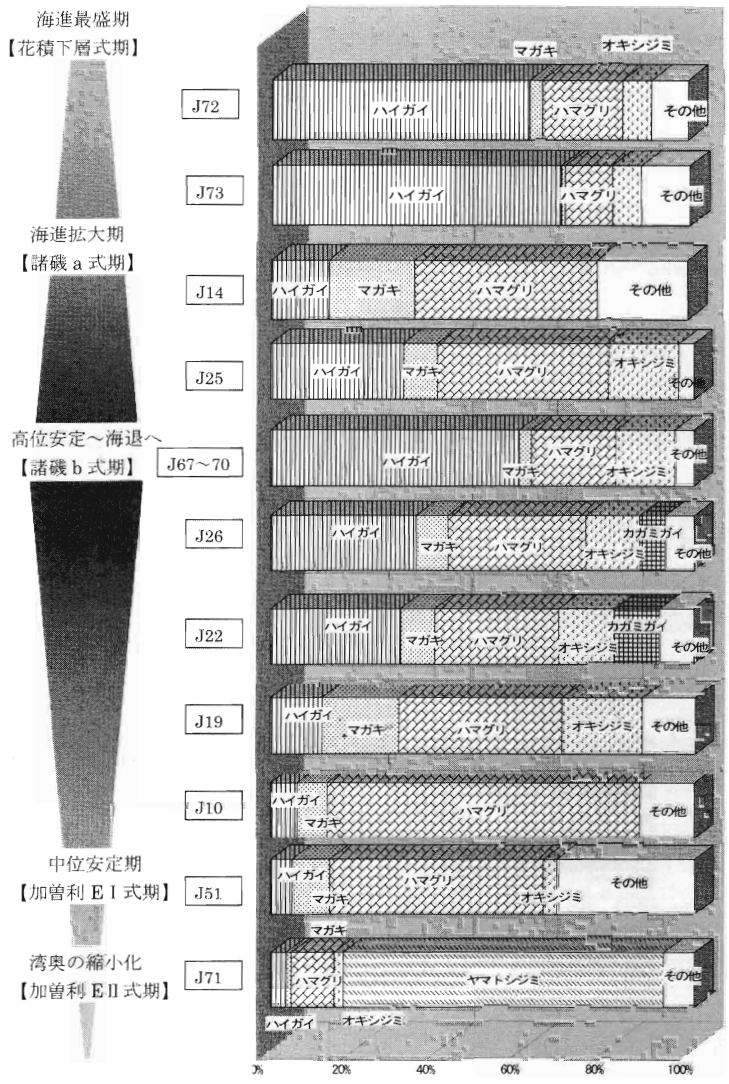
1.海退期の貝塚　・・・・・縄文時代中期（5500年前～4500年前）
2.小海進期の貝塚・・・・・縄文時代後期（4500年前～3300年前）
3.終焉期の貝塚・・・・・・縄文時代晩期（3300年前～2800年前）

1.海退期の貝塚・・・縄文時代中期

（1）中期貝塚の概要

中央に広場と集団墓地を設け、これを取り囲むように環状あるいは同心円形状に竪穴住居を配置した集落の形態は中期も引き継がれ、より整備した形態になる。しかし、最初から住居が環状に配置されていたのではなく、長期にわたる営みの結果として環状になったといわれている。この使わなくなった住居址内に貝塚を形成した結果、環状あるいは馬蹄形貝塚となる。千葉県加曽利貝塚はその典型である。

県内でも横浜市都筑区三の丸遺跡のように270件の住居址、20件の掘立柱建物址をもち地域の拠点となった最大級の環状集落が知られている。しかし、前期に盛んに貝塚を形成した古鶴見湾エリアをみても、貝塚形成はあまり活発とは言えない。早期末の海進最高期に伴って発達した内



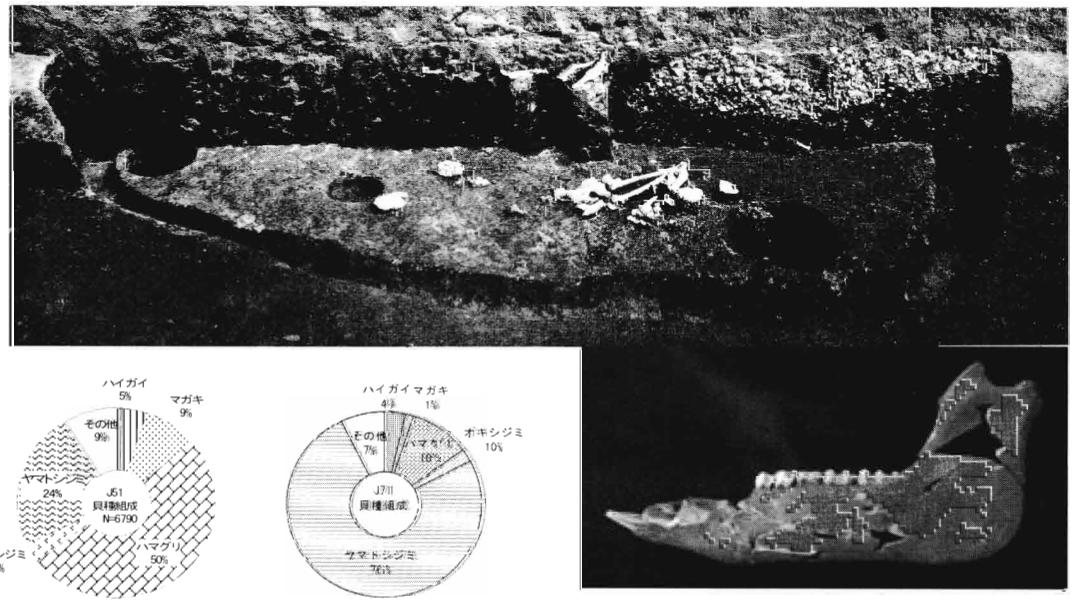
第１図　北川貝塚における貝塚規模の変化と貝種組成の変遷
（中村 2007）

湾が、海退とともに次第に縮小し、貝の生息できる環境が失われていったためである。

縄文時代前～中期にかけ貝塚形成が確認された横浜市都筑区の北川貝塚(坂本 2007)の例をみると、このことが良くわかる。第１図の左の側の図は、各時期の貝塚の規模を示している。およそ 9000 年前からはじまる海面の上昇は、縄文時代早期末から前期初頭にかけてピークをむかえる。海がもっとも陸地の奥まで入りこんだ頃、湾奥部に位置した北川貝塚でも人々は盛んに貝を採っていた。前期の貝塚は、住居址覆土内貝塚 13 ヵ所、土坑１ヵ所の他、下部に遺構を伴わない平地貝塚約 30 ヵ所が確認されている。サンプルとして採集された貝の総量はコンテナ 600 箱をこえていた。これに対し、5000 年を境に海退が始まる中期になると、貝塚の規模も数も激減し、検出された貝塚は住居址覆土内貝塚３ヵ所、土坑１ヵ所だけとなる。内訳は加曽利ＥⅠ式期（住居址覆土内貝塚１ヵ所)、加曽利ＥⅡ式期（住居址覆土内貝塚２ヵ所､土坑覆土内１ヵ所）である。北川貝塚は中期においても、とりわけ勝坂式期に最大規模となる集落を構成していた。貝塚はこの中期中葉期には存在せず、後葉の加曽利Ｅ式期に再現する。貝の種類についてみると、前期初頭は湾奥砂泥底に生息するハイガイを主体としている。さらに上流域に存在する西ノ谷・南堀貝塚の周辺でも貝が採れるようになると、湾央に生息するハマグリの比率が高くなる。中期後葉に急速に海退し、汽水域に生息するヤマトシジミ主体の貝塚となる。

（２）中期の人々の貝塚観

中期の人々にとって貝塚とは何であったのだろう。同じ北川貝塚の事例で考えてみたい。中期の貝塚うち加曽利ＥⅠ式期 J51 号住居址および加曽利ＥⅡ式期 J71 号住居址は、「廃屋墓」と言われている、住まなくなった家に死者を埋葬する風習が確認された。J51 号住は、床面から２個体、覆土中に形成された貝ブッロックａ・ｂ・ｈの３ヵ所に、頭部・手・肩の部分が含まれており、少なくとも３個体分の人骨が発見されている。北川貝塚の採貝活動の最終段階の貝層である。ヤマトシジミを主体とする純貝層が 180×80cm、厚 50cm と混土貝層は 180cm が検出されている。床面からは、頭部を住居の中央に向け、膝を曲げた「横臥屈葬人骨」が検出された。両住居址とも、イノシシの頭部



第２図　廃屋墓（J71）と貝塚より出土したイノシシの下顎骨　および貝種組成（中村 2007）

・下顎骨が出土していた。集落の中央に墓域を設け、それを取り囲むように集落を形成する縄文人の意識の基底にある死への深い思いは、再生への願いとともにあったはずである。「廃屋墓」に貝塚が形成されたということは、人間・イノシシ・貝といった生命あるものに同一の意識を持っていたことの証である。

第１表　神奈川県中期貝塚編年と構成貝種　　(2008「神奈川県貝塚地名表」より作成)

NO	地域	貝塚名	時期	地点	主要構成貝類
65	横浜	宮の台貝塚	五領ケ台Ⅰ式	北貝塚	マガキ・ハイガイ主体
			五領ケ台Ⅱ式	第２貝層	ハマグリ・オキシジミ・ウミニナ類・スガイ・イボニシ
40	横浜	下田西貝塚	五領ヶ台式	横浜市	アサリ・ハマグリ主体
74	横浜	東方町源東院貝塚	五領ヶ台式	A 貝塚	ヤマトシジミ・ニホンシジミ主体ハイガイ他(計６種)
			五領ヶ台式	B 貝塚	ヤマトシジミ・ニホンシジミ主体ハイガイ他(計６種)
75	横浜	池辺貝塚	五領ヶ台式		ハイガイ・カキ・サルボウ・カガミガイ
182	横浜	元町貝塚	五領ヶ台式	横須賀考古	ハマグリ・アサリ・イタボガキ・オオノガイ他(計 10 種)
287	平塚	五領ヶ台貝塚	五領ヶ台式	A 貝塚	ダンベイキサゴ主体
			五領ヶ台式	C 貝塚	ハマグリ・カキ・サザエ・アカニシ・キサゴ・バイ他(計６種)
			五領ヶ台式	C 貝塚	ダンベイキサゴ主体
235	横須賀	江戸坂貝塚	阿玉台式	４丁目	スガイ・ハマグリ・サザエ他 (計６種)
146	横浜	大 口 台貝塚	阿玉台式 加曽利ＥⅡ式	丸山次雄	シオフキ・サルボウ・ハマグリ・カガミガイ・アサリ・オオノガイ・キサゴ・イボニシ(計８種)
235	横浜	江戸坂貝塚	阿玉台式～加曾利Ｅ	(榊原政職)	ハマグリ・カキ・レイシ他(計 13 種)
30	川崎	椚坂貝塚	勝坂式		シジミ類・ハマグリ・アサリ
31	川崎	野川 原ノ観音貝塚	勝坂式		シジミ・アサリ・シオフキ・サルボウ・ヤマタニシ
77	横浜	加賀原遺跡	勝坂式	住居址	ヤマトシジミ主体ハイガイ他(計９種)
100	横浜	宿根西遺跡	勝坂式	12 号住	ヤマトシジミ主体
82	横浜	師岡貝塚	勝坂式	2A～E 区	ハイガイ主体
			阿玉台式	Ⅳa 層	ハマグリ・アサリ・シオフキガイ・オキシジミ他(計 22 種)
			勝坂式	5・6 区	サルボウ・ハマグリ・オキシジミ・アカニシ・ツメタガイ他(計 15 種)
			阿玉台式	Ⅲ層	
193	横浜	杉田貝塚	勝坂式 加曽利ＥⅠ～Ⅳ式	(盤古堂)	ハマグリ主体 アサリ・シオフキ・ツメタガイ他(調査時所見)
288	伊勢原	八幡台遺跡	勝坂式 加曽利Ｅ式		アサリ・シジミ
91	横浜	会ヶ谷貝塚	勝坂式 加曽利Ｅ式	20 号住 79 号住 34 号住	イボキサゴ・ハマグリ主体他 ハマグリ主体 イボキサゴ主体
193	横浜	杉田貝塚	勝坂式 加曽利Ｅ式	(早稲田大学) 西	ハマグリ主体 他(計 27 種)
135	横浜	荒立貝塚	勝坂式 加曽利Ｅ式	第１貝塚 (酒詰仲男)	ツメタガイ・アカニシ・バイ・カキ・ハイガイ・サルボウ・ハマグリ・カガミガイ・シオフキ(計９種)
71	横浜	中ノ窪貝塚	加曽利Ｅ古式		ハイガイ・カキ主体他(計 22 種)
146	横浜	大 口 台貝塚	加曽利Ｅ古式		ハマグリ(計１種)

193	横浜	杉田貝塚	加曽利E古式	(酒詰仲男)	ハマグリ・マガキ他(計44種)
40	横浜	下田西貝塚	加曽利E式	佐藤安平	ハマグリ・カガミガイ・ハイガイ他
				酒詰・芹沢	ハイガイ・ハマグリ他(計33種)
230	横須賀	中台貝塚	加曾利E式	南貝塚	レイシ?
238	横須賀	吉井貝塚	加曾利E式	第2貝塚 上部貝層	ハイガイ・カリガネエガイ・オキシジミ・スガイ・レイシ・イボニシ・アカニシ・サザエ他(計30種)
268	鎌倉	平戸山貝塚	加曾利E式		サルボウ・ハイガイ・アサリ・キサゴ他(計14種)
267	鎌倉	向　川　名貝塚	加曽利E式		ハマグリ・ダンベイキサゴ主体
146	横浜	大 口 台貝塚	加曽利E式	塚田 1・4号住居址	ハマグリ・アサリ・オキシジミ・シオフキ・オオノガイ・サルボウ・ハイガイ他
65	横浜	宮の台貝塚	加曽利E式	北貝塚 第1貝層	ハイガイ・マガキ主体ハマグリ・オキシジミ
54	横浜	東　根 貝塚	加曽利E式?	貝塚に学ぶ会	マガキ・ハイガイ主体
179	横浜	六ッ川町貝塚	加曽利E?式	2地点	
135	横浜	荒立貝塚	加曽利E式	第2貝塚 第1区	キサゴ・イボキサゴ・スガイ・イボウミニナ・ウミニナ・ヘナタリ・アラムシロ・ナミギセル・ミスジマイマイ・サルボウ・ハイガイ・カキ・イタボガキ・ハマグリ・カガミガイ・シオフキ・オオノガイ他(計24種)
57	横浜	北川貝塚	加曽利EⅠ式	J51住居址	ハマグリ・ヤマトシジミ他(計19種)
146	横浜	大 口 台貝塚	加曽利EⅠ式	横浜市14号住	イボキサゴ・アサリ・マガキ・カガミガイ他
57	横浜	北川貝塚	加曽利EⅡ式	J56住居址	ヤマトシジミ
				J71住居址	ヤマトシジミ主体ハマグリ他(計5種)
				P88土坑	ハマグリ主体他(計3種)
187	横浜	岡村三殿台貝塚	加曽利EⅡ式	10-B号住居址	詳細不明
				北側貝塚	アサリ・サルボウ・アカニシ・ツメタガイ・アカガイ・ハマグリ(計6種)
235	横須賀	江戸坂貝塚	加曾利EⅡ式 加曾利EⅢ式	2丁目	マガキ・スガイ・イシダタミ・レイシ・イガイ・バカガイ・サザエ他
96	横浜	菅田利倉遺跡	加曽利EⅢ式	Fトレンチ	ハマグリ・オキアサリ・シオフキ・バカガイ・イボキサゴ・ウミニナ・アカニシ・レイシ・サルボウ・ハイガイ・イタボガキ・マガキ・ヤマトシジミ(計13種)
178	横浜	南 永 田 山王台貝塚	加曽利EⅢ式	北	ハイガイ主体
238	横須賀	吉井貝塚	加曽利EⅢ式 加曽利Ⅳ式 加曾利EⅣ式	第1貝塚 上部貝層 第2貝塚 上部貝層	イシダタミガイ・スガイ・カリガネエガイ他(計44種) スガイ主体 コシダカガンガラ・イボニシ他(計55種)
68	横浜	新吉田町5513貝塚	加曽利EⅣ式		ヤマトシジミ主体ハマグリ
230	横須賀	中台貝塚	加曾利EⅣ式～ 加曾利B1式	北貝塚	スガイ・イシダタミガイ・レイシ・イボニシ・コシダカガンガラ・カリガネエガイ・クマノコガイ・クボガイ・アカニシ・サザエ・テングニシ・マガキ・ハイガイ・オキシジミ・マテガイ他(計28種)
276	藤沢	善 行　貝塚	加曾利E式 堀之内1式		ヤマトシジミ・ハマグリ
135	横浜	荒立貝塚	中期	(中川直亮)	シオフキ・カキ・アカガイ・サルボウ・バイ・マテガイ・ツメタガイ・キサゴ・アサリ(計10種)

135	横浜	荒立貝塚	中期	第2貝塚 第2区	〈下層〉サルボウ・ハイガイ・カキ・イタボガキ・ハマグリ・カガミガイ・オキシジミ・アサリ・シオフキ・マテガイ他(計29種) 〈上層〉キサゴ・イボキサゴ・イボウミニナ・ツメタガイ・アカニシ・サルボウ・ハイガイ・カキ・イタボガキ・ハマグリ・カガミガイ・シオフキ・オオノガイ(計13種)
178	横浜	南永田山王台貝塚	中期	北	ハイガイ・アカニシ・ハマグリ・カキ・アサリ・オキシジミ(計6種)
189	横浜	笹下貝塚	中期		ツメタガイ・バイ・サルボウ・ハマグリ・アサリ・シオフキ(計6種)
235	横須賀	江戸坂貝塚	中期	(丘浅次郎)	ハマグリ・カキ・ミルクイ他
274	藤沢	渋沢貝塚	中期		シジミ主体

2.小海進期の貝塚

(1) 後期貝塚の概要

中期の気候の寒冷化とともに海退していた海を追うように東京湾よりに貝塚の分布が集中してくる。再び温暖化になり小海進期を迎えたのは堀之内式期になってからのことである。東京湾西岸域でも大貝塚が形成されるようになる。

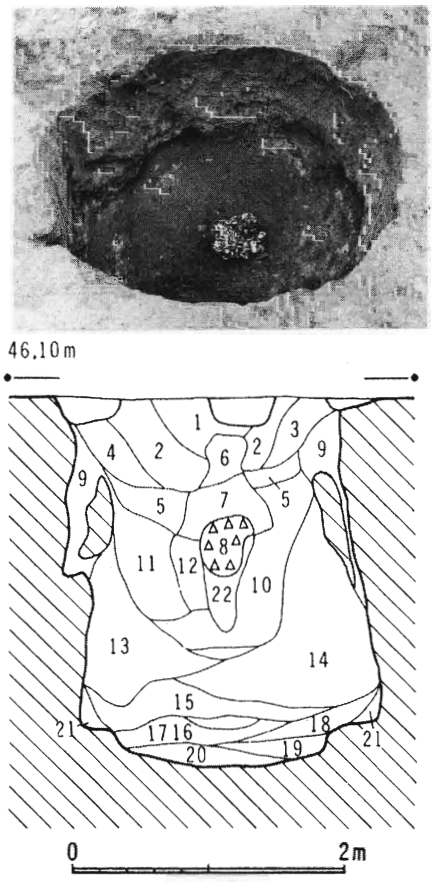
(2) 縄文後期の人々の貝塚観

縄文時代後期には、二つの異なる貝塚観が存在していたのではないかと、私は考えている。まったく異質のものではなく、基本的な部分は変わらないが、両者は併存するものではないように思われる。堀之内I式を境に、伝統的なものを一掃し新しいしい文化が到来したのではないかと想定する。伝統的な貝塚観を示すものは「柱をめぐる儀礼」であり、到来した貝塚観を示すものは「丘を築く儀礼」である。

(a) 柱をめぐる行為の例

—横浜市山田大塚遺跡15号土壙の事例—

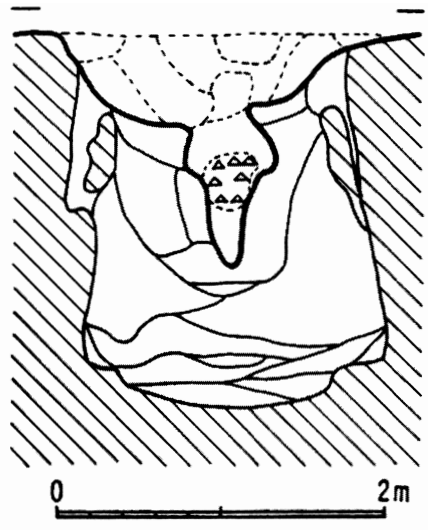
縄文時代早期から後期にかけて存続する集落であるが、後期堀ノ内I式期の住居を囲むように点在する土坑から貝ブロックが検出された。貝ブロックは、両手におさまる程度の量(3リットル1750グラム)であった。小型のハマグリ(殻長40mm)であったが、汽水種のヤマトシジミが1個含まれていた。貝殻は焼けておりもろくなっていた。貝以外にはマフグ・ヘビ・小獣の椎骨・大型獣の四肢骨破片が検出された。この他に、本遺跡から出土した貝はない。2km下流の高田貝塚に後期の貝塚があり(江坂1972)、直線にして4〜5kmの現東横線綱島駅あたりまで出向けば、ハマグリの生息域が存在していたようだ(松島・1979)。



第3図　山田大塚遺跡第15号土坑

土壙の中心に柱　貝ブロックは、土壙がある程度埋没し、深さ60 cmほどの浅い窪地になった段階に、土壙中央部に径20 cm程のきれいな円形のプランで検出された。ひとかたまりの貝の下に破砕した貝の層があり、さらにその下部はかなりフカフカの黒色土であったという。この状態は、住居址の柱穴に投げ込まれた貝ブロックの在り方に良く似ている。

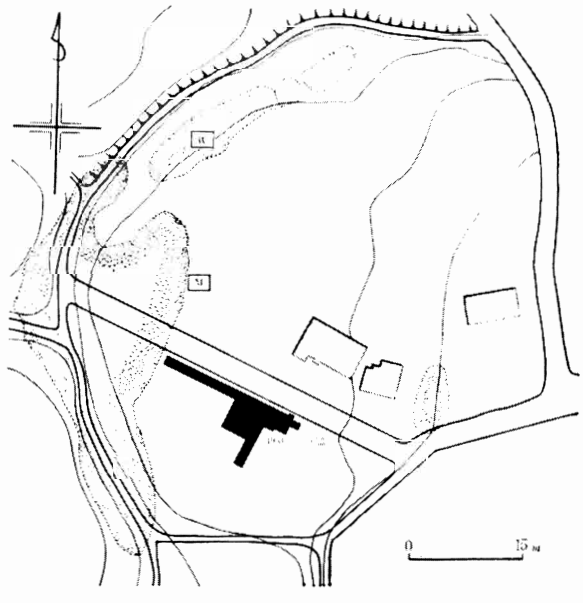
貯蔵穴として使用していた土坑廃絶後、廃棄用として使われる例は多い。私はその際、ここにもの送りの象徴ともいえる柱が建っていたのではないかと考えてみた。深さ２ｍをこえる土坑が2/3埋まる頃には、柱の根元は朽ちており、この柱を抜き去った後に、貝を埋納したのではないかと推定した。こうした柱をめぐる儀礼の事例は早期より存在し、長い縄文時代の中でも伝統的に受けつがれてきたものではなかったろうか。



第４図　山田大塚遺跡第15号土坑
貝埋納時の堆積状況

（ｂ）土塁状マウンドを築く行為
—横浜市杉田貝塚の例—

杉田貝塚は、東に東京湾を望む標高55ｍの台地上に位置する。1949･1956 年に早稲田大学が、貝塚の北東部の一角を調査し、厚さ40ｃｍのハマグリの純貝層を含む貝層を確認し、中～後期にわたる遺跡で、後期前半が主体であることを明らかにした(西村1956)。1950・1957年に明治大学は、マウンドの中央を調査し、安行３ｃ式土器を含む晩期の包含層を確認した。出土した大洞Ⅱ式並行の土器が出土し「杉田式」と命名した。晩期土器編年のタイプサイトとなった。2001年3月宅地造成に伴い発掘調査で、早稲田大学調査地点の隣接地である北西部斜面貝塚の中心部分を発掘し、中期後葉から晩期初頭にわたる保存状態が良好な貝層が確認された。(山田2001, 2002ａｂ)


第５図　杉田貝塚全容図（杉原・戸沢1968）

加曾利E3式～安行3a式まで確認された貝層は、最大厚4メートルにおよぶ。貝層はハマグリ・シオフキを主体とし、シカ・イノシシなどの獣骨・魚骨も豊富に検出されている。貝層の厚さという点では、東京湾西岸域では最大級ではないだろうか。

地山は砂質の黄褐色土であり、この地山の斜面に3メートルほどせり出して貝層が形成されてい

た。斜面の縁辺部と認識していた部分は、実は縄文人が斜面に貝殻を投棄してできた丘だったということである。すっかり地形の一部を形成しており、地表面の観察だけでは自然地形と区別できない状況であった。

貝塚の旧状を復元してみると、南に開口部をもつ馬蹄形を呈していたと想定図される。開口部は、一段下がっており、広場もあった。広場をはさんで南西部にも貝塚が存在していたようだ。今日杉田貝塚として把握されている貝塚を仮に北貝塚とすれば、規模はかなり小さいが陸橋のような部分をはさんで南貝塚が存在していたということになり、加曽利貝塚と同様の形状であったことが想定される。1993 年栃木県寺野東遺跡で確認された盛土遺構は、中央に窪地を持った馬蹄形貝塚との類似性を指摘している（江原 1999)。内陸部では盛土遺構で、海浜部では盛貝遺構すなわち環状貝塚になったと言える。

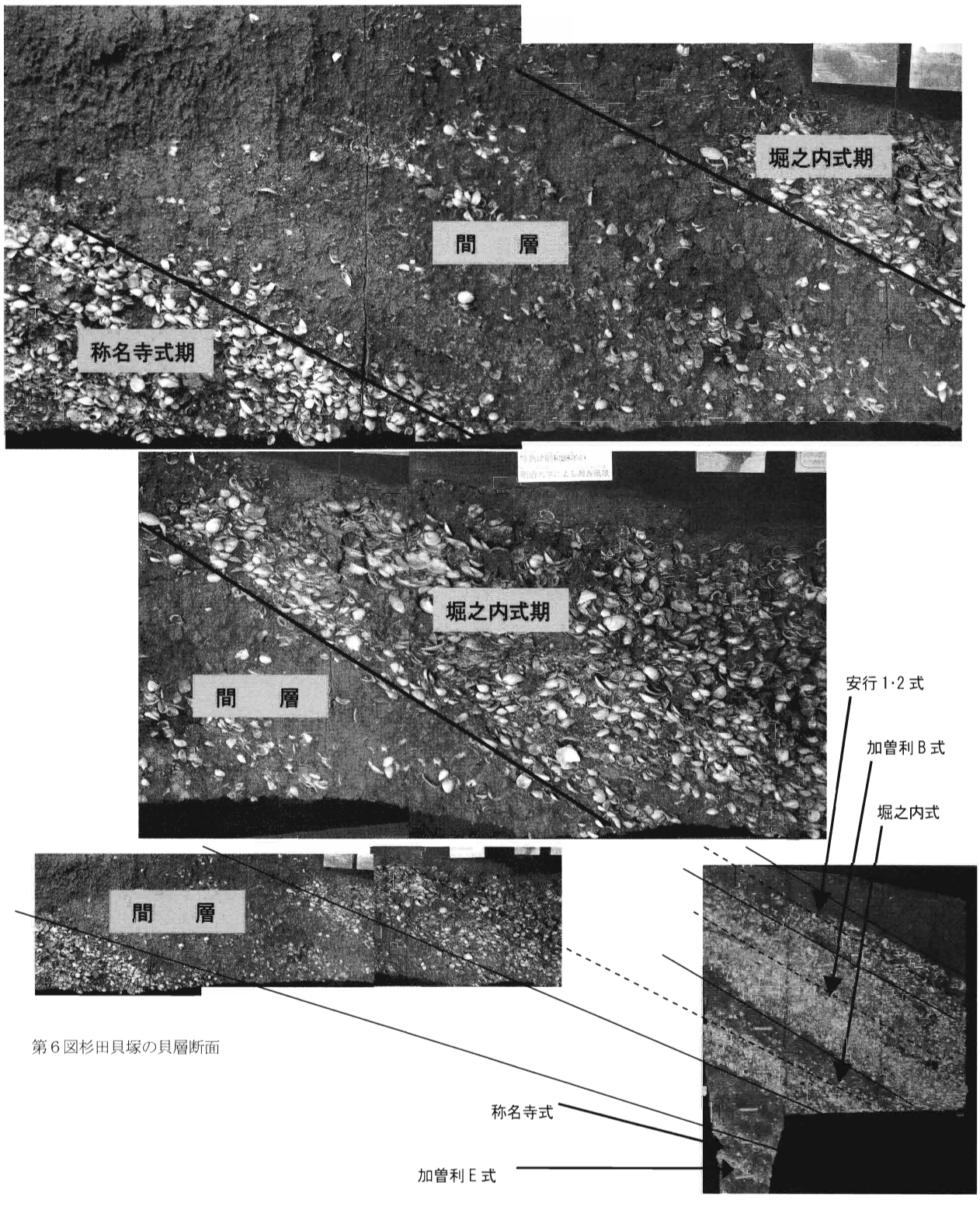
杉田貝塚は中期から晩期まで存続する遺跡で、拠点的大集落だったことが読み取れるが、堀之内式期に居住エリアの土で斜面を埋め、拡張工事をしたのではないかと推定される。貝層の断面を観察すると、中期から晩期初頭までの形成期間の間にいくつか間層がはいっていた。中でも堀ノ内期の間層は１メートルをこえる厚さで、多量の炭化材が混在していた。一見したところ、撹乱ではないかと思うほどであった。この間層をはさんで、称名寺と堀之内期の純貝層の層が厚く堆積していた。その上の加曾利Ｂの層は、かなり大型のハマグリとマテガイで構成されていたが、所々に灰とロームの間層が介在していた。これは、どのように考えられるだろうか。中期から後期初頭の貝塚の形成は、斜面に地点的に行われていたらしく、小高いところもあれば、そうでないところもあった。ところが、炭化物を含む多量の土で斜面の窪地を埋め、せりだした状態で斜面を整えている。堀ノ内式期以降、この斜面での貝塚形成最盛期をむかえる加曾利Ｂ式期の層は、整った斜面上に形成されていた。炭化物を含む層は居住エリアを拡張した際の廃土かもしれない。盛土遺構は、高さ1～２メートルあるようだが、杉田貝塚の場合今日地表面から確認できるのは、わずかな高まりである。この時期の人々にとって、土も貝も土手を築くための素材として用いられた。「土手を築く」という行為と結果に、『何らかの意味』を見出していたのであろう。杉田貝塚から出土している骨角器には、東北の要素が強い。これらを鑑みると、北からの新たな文化の流入がもたらした構築物なのであろう。

このように後期になると、それまでの貝塚を構成する食物や道具時には人もなど個々を対象とした『再生への願い』という側面だけでなく、集合体として機能をもつ（意味を持つ）構築物の素材として用いられることがあったと考えられ、構築物としての意味が生まれてくる。

3. 終焉期の貝塚

横浜市内の仏向・森・杉田・称名寺の 4 貝塚で晩期の貝層が確認されている。安行Ⅲd 期の貝塚を最後に縄文時代の貝塚は終焉を迎える。

神奈川県歴史博物館 2008『神奈川県貝塚地名表』
杉原荘介・戸沢充則 1963「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」考古学集刊第２巻第１号
中村若枝 1990「第 15 号土壙内貝ブロック検出の動物遺存体」『山田大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター
中村若枝 2007 付編「縄文時代の動物遺存体について」『北川貝塚』横浜市ふるさと歴史財団
中村若枝 2005「空間の浄化と帰還－社会構造における貝塚の位置」『地域と文化の考古学』明治大学考古学研究室編
西村正衛 1956「神奈川県横浜市杉田貝塚」『日本考古学年報９』日本考古学会
松島義章 1979「南関東における縄文海進に伴う貝類群集の変遷」第四紀研究 17 巻４号
山田仁和 2001「横浜市磯子区杉田貝塚」『第 25 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会
山田仁和 2002a「5 杉田貝塚」『平成 12 年度文化財年報（埋蔵文化財その１９』横浜市教育委員会
山田仁和 2002b「横浜市磯子区杉田貝塚」『公開セミナー貝塚からの情報』かながわ考古学財団



第６図杉田貝塚の貝層断面

第２表　神奈川県後期貝塚編年と構成貝種　　(2008「神奈川県貝塚地名表」より作成)
※番号は台帳 NO

NO	地域	貝塚名	時期	地点	主要構成貝類
135	横浜	荒立貝塚	勝坂式 加曽利Ｅ式 堀之内式	第１貝塚 (酒詰仲男)	カキ・ハイガイ・サルボウ・ハマグリ・カガミガイ・シオフキ他
277	藤沢	善 行 貝塚	加曾利Ｅ式 堀之内１式		ヤマトシジミ・ハマグリ
129	横浜	松蔭寺傍貝塚	加曽利Ｅ式 堀之内式		サルボウ・ハイガイ・カキ・ハマグリ・アサリ・シオフキ・オオノガイ他
136	横浜	二本木貝塚	加曽利Ｅ式 堀之内式		カキ主体
135	横浜	荒立貝塚	加曽利Ｅ式 堀之内式	第２貝塚 第１区	・サルボウ・ハイガイ・カキ・イタボガキ・ハマグリ・カガミガイ・シオフキ・オオノガイ他
217	横浜	青ヶ台貝塚	加曽利ＥⅢ式～ 堀之内２式 〃	第１	スガイ・コシダカガンガラ主体 マガキ・カリガネエガイ・レイシ・イボニシ主体
216	横浜	称 名 寺 貝塚	加曽利ＥⅣ式～ 称名寺１式 〃	Ａ貝塚 Ｉ貝塚	ハマグリ・イタボガキ・マテガイ・キサゴ・ツメタガイ他(計 24 種) ハマグリ・マテガイ・イボキサゴ・スガイ・ウミニナ他(計 33 種)
230	横須賀	中台貝塚	加曾利ＥⅣ式～ 加曾利Ｂ1 式	北貝塚	スガイ・イシダタミガイ・レイシ・イボニシ・コシダカガンガラ・カリガネエガイ・クマノコガイ・クボガイ・アカニシ・サザエ・テングニシ・マガキ・ハイガイ・オキシジミ・マテガイ他(計 28 種)
135	横浜	荒立貝塚	加曽利Ｅ式 堀之内式	(酒詰仲男)	ハイガイ・サルボウ・サトウガイ・アカガイ・イガイ・イタボガキ・カキ・ハマグリ・カガミガイ・オキシジミ・アサリ・シオフキ他
243	三浦	松輪間口東洞穴	称名寺式		スガイ・イシダタミガイ・クボガイ・サザエ他(計 94 種)
89	横浜	会ヶ谷貝塚	称名寺式～ 堀之内１式	２号住居址	イボキサゴ・ハマグリ・アサリ主体
			〃	20 号土坑	イボキサゴ・ハマグリ主体
			〃	23・26・32・35・50・号土坑	イボキサゴ主体
			〃	１号貝層 ４号貝層	イボキサゴ主体
			〃	２号貝層	ハマグリ主体
218	横須賀	榎戸貝塚	称名寺式～ 堀之内１式	Ｂ貝塚	イシダタミ・クボガイ・サザエ・スガイ・レイシ・アカニシ・カリガネエガイ・ハイガイ・イガイ・イタボガキ・シオフキ？・オオノガイ？他(計 14 種)
192	横浜	杉田貝塚	称名寺式 堀之内 1･2 式 加曽利Ｂ1･2 式 安行 1･2 式 安行 3a 式	(盤古堂)	ハマグリ主体 アサリ・シオフキ・ツメタガイ他(調査時所見)
218	横須賀	榎戸貝塚	称名寺式～ 堀之内２式	Ａ貝塚	カリガネエガイ・ハマグリ主体
216	横浜	称 名 寺 貝塚	称名寺２式	Ｄ貝塚北側	ハマグリ・マテガイ・シオフキ・キサゴ他(計 41 種)

216	横浜	称名寺貝塚	称名寺2式～ 堀之内1式	H貝塚	ハマグリ他(計17種)
			称名寺2式～ 堀之内1式?	E貝塚	シオフキ・バカガイ主体・カガミガイ・オキシジミ・ハマグリ他(計26種)
			称名寺2式～ 堀之内2式	B貝塚	ハマグリ・オキシジミ・アサリ・ツメタガイ・キサゴ他(計35種)
283	茅ヶ崎	行谷貝塚	堀之内1～ 加曽利B1式	(西村正衛)	ヤマトシジミ・ハマグリ・マガキ・ダンベイキサゴ
			〃		ヤマトシジミ・ハマグリ・マガキ・ダンベイキサゴ
285	茅ヶ崎	久保山A貝塚	堀之内1～ 加曽利B1式		ダンベイキサゴ主体
106	横浜	小 仙 塚貝塚	堀之内式 加曽利B式	A (大山柏)	・ハマグリ・アサリ他
114	横浜	月見ヶ丘貝塚	堀之内式 加曽利B式		貝類
111	横浜	北台貝塚	堀之内式 加曽利B式		ハマグリ・カキ他
217	横浜	青ヶ台貝塚	堀之内式 加曽利B式	(酒詰仲男)	コシダカガンガラ主体 他(計31種)
166	横浜	池ノ坂貝塚	堀之内式 加曽利B式 安行式	179番	ハイガイ主体 他(計10種)
135	横浜	荒立貝塚	堀之内式 加曽利B式	(松岡六郎)	アサリ・ハマグリ・シオフキ・オオノガイ・オキシジミ・アカガイ・アカニシ・バイ・カキ・マテガイ・ツメタガイ
192	横浜	杉田貝塚	堀之内式 加曽利B式 安行1式	(早稲田大学) 西	ハマグリ主体 他(計27種)
166	横浜	池ノ坂貝塚	堀之内式 加曽利B式 安行式	(酒詰仲男)	ハイガイ主体 カキ・ハマグリ他(計10種)
189	横浜	新川貝塚	堀之内式 加曽利B式 安行1・2式	(酒詰仲男)	ハマグリ・マガキ他(計44種)
95	横浜	泉谷戸貝塚	堀之内1式		ヤマトシジミ主体
186	横浜	稲荷山貝塚	堀之内1式	第1(第5貝塚)	イボキサゴ主体
			〃	第2(第1貝塚)	イボキサゴ主体
46	横浜	山田大塚遺跡	堀之内1式	15号土坑	ハマグリ主体他
87	横浜	富士塚貝塚	堀之内1式	(池田・斎藤)	ハマグリ・バカガイ・アカニシ等
93	横浜	平台貝塚	堀之内1式		ハマグリ主体
260	三浦	馬場遺跡	堀之内1式		スガイ主体
281	茅ヶ崎	堤 貝塚	堀之内1式 堀之内2式	W貝塚	ダンベイキサゴ主体
21	川崎	木月貝塚	堀之内式		サルボウ・アサリ・オオノガイ・アカニシ
44	横浜	矢増貝塚	堀之内式	(酒詰仲男)	ハマグリ・アサリ
59	横浜	神隠(北)貝塚	堀之内式		ハマグリ・ヤマトシジミ主体

84	横浜	原谷貝塚	堀之内式	東	アサリ主体
87	横浜	富士塚貝塚	堀之内式	(松下胤信)	ハマグリ・アカニシ・アサリ他
107	横浜	東寺尾別所貝塚	堀之内式		ハマグリ・シオフキ主体
110	横浜	倉畑貝塚	堀之内式		貝類(純鹹)
123	横浜	蕃神台貝塚	堀之内式		ハイガイ・サルボウ・イタボガキ・カキ・ハマグリ・カガミガイ・アサリ・シオフキ
128	横浜	久保下貝塚	堀之内式		サルボウ・カキ・シジミ類・ハマグリ・オキシジミ・アサリ・ミルクイ・オオノガイ他
184	横浜	坂ノ台貝塚	堀之内式		アサリ主体
94	横浜	片倉町 大 丸貝塚	堀之内式 加曽利B式		ヤマトシジミ・サルボウ
104	横浜	下末吉愛宕社貝塚	堀之内式		アカニシ・サルボウ・ハマグリ・アサリ・シオフキ(計5種)
108	横浜	池の端貝塚	堀之内式		ハイガイ・カキ・ハマグリ主体他(計 16種)
153	横浜	斉藤分町貝塚	堀之内式	中段	ハマグリ主体
160	横浜	保土ヶ谷貝塚	堀之内式	A 第1地区	ハマグリ主体
169	横浜	大谷戸貝塚	堀之内式		アサリ主体 アカニシ・バイ・カキ・ハマグリ(計5種)
187	横浜	岡村三殿台貝塚	堀之内式	西側貝塚	ハマグリ・マガキ・アカニシ他
87	横浜	富士塚貝塚	堀之内式	酒詰南 C1A	ハイガイ・ハマグリ主体
119	横浜	岸貝塚	堀之内式	(谷川磐雄)	ハマグリ
106	横浜	小 仙 塚貝塚	堀之内式	I～K (赤星直忠)	ハマグリ・シオフキ・アカニシ他
165	横浜	伊勢山貝塚	堀之内式	(酒詰仲男)	カキ・ハマグリ・アサリ(計3種)
166	横浜	池ノ坂貝塚	堀之内式	(松下胤信)	アサリ・オキシジミ・オオノガイ・スガイ・ハイガイ・マガキ・サルボウ・アカニシ・カガミガイ(計9種)
112	横浜	寺ノ谷貝塚	堀之内式		ハマグリ・イボキサゴ主体
186	横浜	稲荷山貝塚	堀之内式	第3貝塚 (下部貝層)	ハマグリ主体他
			堀之内式	第4貝塚 (下部貝層)	ハマグリ・アサリ・シオフキ・キサゴ主体
131	横浜	東寺尾白幡神社貝塚	堀之内式?	裏参道	サルボウ・カキ・ハマグリ・アサリ・シオフキ・オオノガイ他
189	横浜	新川貝塚	堀之内式?		イボニシ・バイ・ハイガイ・ハマグリ・シオフキ(計5種)
186	横浜	稲荷山貝塚	堀之内2式	第1(第5貝塚)	アサリ・イボキサゴ・ハマグリ主体
272	藤沢	西富貝塚	堀之内2式	第Ⅰ貝層	ダンベイキサゴ主体
			堀之内2式	第Ⅱ貝層	ダンベイキサゴ・ハマグリ主体
			堀之内2式	第Ⅲ貝層	ダンベイキサゴ・ハマグリ主体
			堀之内2式	第Ⅳ貝層	ダンベイキサゴ主体
			堀之内2式	第Ⅴ貝層	ダンベイキサゴ主体ハマグリ

106	横浜	小 仙 塚貝塚	堀之内２式	C・D 神奈川県Ａ区	ハマグリ・アカニシ・シオフキ・ハイガイ他
			堀之内２式	神奈川県Ｃ区	ハマグリ・アカニシ・シオフキ・ハイガイ他
186	横浜	稲荷山貝塚	堀之内２式	第２(第１貝塚)	アサリ・イボキサゴ・ハマグリ主体
281	茅ヶ崎	堤 貝塚	堀之内２式	Ｅ貝塚	ダンベイキサゴ主体
			堀之内２式	Ｗ貝塚	ダンベイキサゴ主体
180	横浜	矢畑貝塚	堀之内２式 加曽利Ｂ１式		ハイガイ主体
193	横浜	森貝塚	堀之内２式～ 安行 3c 式		サルボウ・アサリ・ハマグリ
281	茅ヶ崎	遠藤貝塚	堀之内２式		ダンベイキサゴ主体
186	横浜	稲荷山貝塚	堀之内式または加曽利Ｂ式	第３貝塚 (上部貝層)	ハマグリ・カキ主体
159	横浜	帷子峯遺跡	初頭～前葉		ハマグリ主体
106	横浜	小 仙 塚貝塚	加曽利Ｂ１式	神奈川県Ｂ区	ハマグリ・アカニシ・シオフキ・ハイガイ他
173	横浜	仏向貝塚	加曽利 B2 式 加曽利 B3 式 曽谷式	Ｂ	ハイガイ主体 アカガイ・シオフキ・ハマグリ・オキシジミ・アサリ・マガキ他
181	横浜	榎戸第１遺跡	加曾利Ｂ式		オキシジミ(計１種)
243	三浦	松輪間口東洞穴	加曽利Ｂ式～ 安行１式		スガイ・イシダタミガイ・イガイ・クボガイ・サザエ他(計 112 種)
216	横浜	称 名 寺 貝塚	加曽利 B3 式 曽谷式 安行 1・2 式 安行 3a・3c 式 大洞Ａ式	Ｄ貝塚	ハマグリ・カガミガイ・マテガイ・スガイ・キサゴ他(計 24 種)
187	横浜	岡村三殿台貝塚	安行１？式	311 号住居址	不明
173	横浜	仏向貝塚	安行 1～3ｄ式	Ａ	オキシジミ・ハイガイ・アサリ・カキ・アカニシ他
234	横須賀	高坂貝塚	安行１式	Ａ貝塚	スガイ主体
183	横浜	山手貝塚	安行Ⅱ式	貝殻坂	ハマグリ他
			安行式		アカニシ他(計 19 種)
89	横浜	会ヶ谷貝塚	後期	34 号住居址	イボキサゴ主体
106	横浜	小 仙 塚貝塚	後期	神奈川県Ｄ区	ハマグリ・シオフキ
			〃	神奈川県Ｅ区	貝類
135	横浜	荒立貝塚	後期	第２貝塚 第２区	サルボウ・ハイガイ・カキ・イタボガキ・ハマグリ・カガミガイ・オキシジミ・アサリ・シオフキ・マテガイ・オオノガイ他 サルボウ・ハイガイ・カキ・イタボガキ・ハマグリ・カガミガイ・シオフキ・オオノガイ他
160	横浜	保土ヶ谷貝塚	後期	３ヶ所	ハマグリ主体
186	横浜	稲荷山貝塚	後期		ハマグリ・カキ他
			後期	第５貝塚	
187	横浜	岡村三殿台貝塚	後期	東側貝塚	
			後期	南側貝塚	
281	茅ヶ崎	堤 貝塚	後期	Ｎ貝塚	ダンベイキサゴ